

北陸自動車道関連遺跡  
発掘調査報告書  
VI

——伊香郡余呉町所在黒田長山古墳群——

1981・3

滋賀県教育委員会

財団法人 滋賀県文化財保護協会

107033704

北陸自動車道関連遺跡  
発掘調査報告書  
VI

——伊香郡余呉町所在黒田長山古墳群——

1981・3

滋賀県教育委員会

財団法人滋賀県文化財保護協会

## 序

滋賀県教育委員会では、北陸自動車道の建設に先き立って、昭和48年度から遺跡の発掘調査を実施してまいりました。発掘調査の結果については、これまでその一部をすでに報告したところでありますが、このたび昭和52・53年度に実施しました余呉町黒田長山古墳群の発掘調査結果を報告するはこびになりました。

黒田長山古墳群は、武器や武具を副葬する4号墳と、それをとりまく小古墳からなる、古墳時代中期後半の特異な古墳群として注目されました。また、古墳群に重複して発見された、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての墳墓群は、湖北での古墳時代前夜の墓制として重要な資料と評価されています。共に、古代の湖北を考えるうえで貴重な発見であり、その活用がおおいに望まれます。

ここに本報告書が上梓されることで、歴史に対する認識の一助となれば、最も幸せとするところであります。

最後に、発掘調査及び整理業務等に日夜努力いただいた調査員の方々や、地元関係者の方々に深謝します。

昭和56年3月

滋賀県教育委員会

教育長 伊藤 多賀雄

## 例 言

1. 本書は、日本道路公団大阪建設局の実施する、北陸自動車道建設工事に伴う黒田長山古墳群の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、滋賀県教育委員会の指導のもとに、日本道路公団の委託により財団法人滋賀県文化財保護協会が実施した。
3. 本書は、昭和52・53年度に発掘調査を実施し、昭和54年度に整理した結果である。
4. 調査および整理・報告には、滋賀県教育委員会文化財保護課技師田中勝弘、兼康保明が指導にあたった。
5. 現地調査及び整理作業には以下の諸氏の協力を得た。

(昭和52年度)

京都産業大学考古学研究会

(昭和53年度)

(財)滋賀県文化財保護協会：本田修平(現彦根市教育委員会)、山口順子  
調査員：白井忠雄(現高島町教育委員会)、藤野道成、堀内宏司、酒井和子、  
柏田三枝子、米田実。

6. 本書は、第1、2章を田中勝弘、第3、4章を山口順子、兼康保明(遺構)、堀内宏司(土器)、白井忠雄(鉄器)、第5章を本田修平、第6章を白井忠雄が執筆し、編集は田中、兼康が当たった。

# 目 次

序

例 言

第1章 位置と環境	1
1. 地理的環境	1
2. 歴史的環境	1
第2章 黒田長山4号墳の調査	5
1. 墳 丘	5
イ. 第1区	
ロ. 第2区	
ハ. 第3区	
ニ. 第4区	
ホ. 墳丘の構造	
2. 埋葬施設	10
イ. 南 棺	
I. 墓壇 II. 木棺 III. 副葬品	
ロ. 北 棺	
I. 墓壇 II. 木棺 III. 副葬品	
ハ. まとめ	
3. 遺 物	16
イ. 南棺出土遺物	
I. 墓壇 II. 鉄刀 III. 短甲 IV. 須恵器 V. 土師器	
ロ. 北棺出土遺物	
I. 鉄鍬 II. 鉄斧 III. 鉄剣 IV. 鉄刀 V. 鉾 VI. 短甲	
4. 年 代	28
第3章 黒田長山古墳群の調査	30
1. 1号墳	30
2. 2号墳	39
3. 3号墳	44
4. 5号墳	47

5. 6号墳	51
6. 7号墳	54
7. 8号墳	56
8. 9号墳	60
9. 10号墳	63
10. 11号墳	66
11. 12号墳	68
12. 13号墳	70
13. 14号墳	76
14. 15号墳	78
15. 16号墳	79
16. 17号墳	81
17. 18号墳	82
18. 19号墳	84
19. 20号墳	87
20. 21号墳	88
第4章 黒田長山墳墓群の調査	90
1. A号墓	90
2. B号墓	94
3. C号墓	96
4. D号墓	99
5. E号墓	100
6. F号墓	114
7. G号墓	116
8. H号墓	117
9. I号墓	118
10. J号墓	119
11. K号墓	120
12. L号墓	121
13. M号墓	122
14. N号墓	123
15. O号墓	124

16. P号墓	126
17. Q号墓	127
第5章 集石遺構	129
第6章 小 結	135
1. はじめに	135
2. 黒田長山古墳群	135
3. 黒田長山墳墓群	136

## 挿 図 目 次

第1図	黒田長山古墳群位置図	2
第2図	1～8号墳地形測量図	6
第3図	4号墳地形測量図（発掘後）航空測量図	7
第4図	4号墳墳丘断面上層実測図及び墓石実測図	9
第5図	4号墳南棺実測図	12
第6図	4号墳北棺実測図	13
第7図	4号墳南棺出土鉄鏃実測図（1）	14
第8図	4号墳南棺出土鉄鏃実測図（2）	15
第9図	4号墳南棺出土鉄鏃実測図（3）	16
第10図	4号墳南棺上部出土須恵器壺実測図	18
第11図	4号墳南棺出土短甲実測図（縮尺3分の1）	19
第12図	4号墳北棺出土鉄鏃・鉄斧・鉄鉾・鉄短剣・鉄剣実測図	22
第13図	4号墳南棺・北棺出土鉄刀・鉄剣実測図	23
第14図	4号墳北棺出土短甲実測図（縮尺3分の1）	25
第15図	1号墳平面図	31
第16図	1号墳断面図	32
第17図	埋葬施設上部土器出土状況及び掘方	33
第18図	1号墳出土土器	33
第19図	1号墳主体部	34
第20図	1号墳鉄器出土状況	35
第21図	1号墳出土鉄刀	36
第22図	1号墳出土鉄器類	37
第23図	2号墳平面図	39
第24図	2号墳断面図	40
第25図	2号墳主体部	41
第26図	2号墳出土遺物	42
第27図	3号墳平面図	44
第28図	3号墳・A号墓断面図	45
第29図	3号墳出土押形文土器	46
第30図	5号墳平面図	47
第31図	5号墳断面図	48
第32図	5号墳主体部	49
第33図	5号墳出土遺物	50
第34図	6号墳平面図	51

第35图	6号填断面图	52
第36图	6号填主体部	53
第37图	7号填平面图	54
第38图	7号填主体部	55
第39图	7号填出土铁刀	55
第40图	8号填甕棺出土状况	56
第41图	8号填平面图	57
第42图	8号填主体部	58
第43图	8号填出土遗物	59
第44图	9号填平面图	60
第45图	9号填断面图	61
第46图	9号填出土遗物	62
第47图	9号填出土铁刀	62
第48图	10号填平面图	63
第49图	10号填断面图	64
第50图	10号填出土铁刀	65
第51图	10号填出土刀子	65
第52图	11号填平面图	66
第53图	11号填出土遗物	67
第54图	12号填平面图	69
第55图	13号填平面图	70
第56图	13号填主体部	71
第57图	13号填出土遗物	71
第58图	13号填 烧土填	72
第59图	南尾根南北土層断面图	73
第60图	13号填 烧土填平面图	75
第61图	14号填·15号填平面图	76
第62图	14号填出土铁器	77
第63图	16号填·17号填·I号墓平面图	79
第64图	16号填出土勾玉	80
第65图	17号填出土遗物	81
第66图	18号填平面图	82
第67图	19号填·J号墓平面图	84
第68图	19号填出土遗物	85
第69图	20号填出土遗物	87
第70图	20号填·M号墓平面图	87

第71図	21号墳平面図	88
第72図	21号墳出土遺物	89
第73図	A号墓主体部	90
第74図	A号墓平面図	91
第75図	A号墓出土遺物	92
第76図	B号墓平面図	94
第77図	B号墓出土遺物	95
第78図	C号墓平面図	96
第79図	C号墓主体部	97
第80図	C号墓断面図	97
第81図	C号墓出土ガラス玉	98
第82図	D号墓・E号墓・H号墓平面図	100
第83図	E号墳断面図	101
第84図	E号墓主体部	102
第85図	E号墓主体部内玉出土状況	103
第86図	E号墓出土ガラス玉(1~144)	104
第87図	E号墓出土ガラス玉(145~288)	105
第88図	E号墓出土ガラス玉(289~406)	106
第89図	F号墓平面図	114
第90図	F号墓出土遺物	115
第91図	G号墓平面図	116
第92図	H号墓出土遺物	117
第93図	J号墓出土遺物	119
第94図	K号墓平面図	120
第95図	L号墓平面図	121
第96図	M号墓出土遺物	122
第97図	N号墓平面図	123
第98図	O号墓・P号墓平面図	124
第99図	O号墓出土遺物	125
第100図	Q号墓平面図	127
第101図	Q号墓主体部	128
第102図	集石遺構出土遺物	129
第103図	表採遺物	129
第104図	集石遺構(上層)平面図	131
第105図	集石遺構(下層)平面図	133

## 図版目次

- 図版一 (上) 黒田長野より長山を望む(南より)  
(下) 黒田長山古墳群を望む(北西より)
- 図版二 (上) 4号墳全景・発掘前(西より)  
(下) 同・発掘前(東より)
- 図版三 (上) 4号墳墓石(2区・3区)  
(下) 同 墓石(1区・4区)
- 図版四 (上) 4号墳墓石(1区)  
(下) 同 墓石(2区)
- 図版五 (上) 4号墳墓石(3区)  
(下) 同 墓石(4区)
- 図版六 (上) 4号墳主体部(北より)  
(下) 同(西より)
- 図版七 (上) 4号墳北棺全景(手前)(北より)  
(下) 同 南棺全景(北より)
- 図版八 (上) 4号墳南棺出土短甲  
(下) 同 南棺出土鉄刀
- 図版九 (上) 4号墳南棺出土鉄刀  
(下) 同 南棺上部出土土器
- 図版一〇 (上) 4号墳北棺出土鉄鏃・短甲  
(下) 同 北棺出土短甲
- 図版一一 (上) 4号墳北棺出土鉄鏃  
(下) 同 北棺出土鉄剣・鉄刀
- 図版一二 (上) 4号墳北棺出土鉄剣・鉄刀  
(下) 同 北棺出土鉄剣
- 図版一三 (上) 4号墳北棺出土鉄短剣  
(下) 同 北棺出土鉄斧
- 図版一四 (上) 4号墳北棺出土鉄鏃  
(下) 同 北棺上部出土土器
- 図版一五 4号墳北棺出土短甲

- 図版一六 4号墳北棺出土鉄剣・鉄刀
- 図版一七 4号墳北棺出土鉄斧・鉄鉞
- 図版一八 4号墳北棺出土鉄鏃・鉄短剣及び鉄劍（下左）・鉄刀（下右）近影
- 図版一九 4号墳南棺出土短甲
- 図版二〇 4号墳南棺出土鉄刀及び近影
- 図版二一 黒田長山古墳群全景垂直写真・発掘前
- 図版二二 1～3、8号墳付近垂直写真・発掘前
- 図版二三 黒田長山古墳群と桜内遺跡
- 図版二四 黒田長山古墳群全景（西より）
- 図版二五 黒田長山古墳群全景（西より）
- 図版二六 黒田長山古墳群尾根西半全景垂直写真
- 図版二七 黒田長山古墳群尾根東半全景垂直写真
- 図版二八 （上） 1号墳全景・発掘前（東南より）  
（下） 同 ・発掘前（西より）
- 図版二九 （上） 1号墳々丘裾出土鉄刀（東より）  
（下） 同 （北より）
- 図版三〇 （上） 1号墳全景（東より）  
（下） 同 （東南より）
- 図版三一 （上） 1号墳主体部（北より）  
（下） 同 棺上部出土土器
- 図版三二 （上） 1号墳主体部（北より）  
（下） 同 （南より）
- 図版三三 （上） 2、3号墳全景（東より）  
（下） 5号墳全景（西より）
- 図版三四 （上） 5号墳主体部検出状況（東より）  
（下） 同 棺上部土器出土状況
- 図版三五 （上） 5号墳主体部（南より）  
（下） 同 鉄斧出土状況
- 図版三六 （上） 9号墳全景（東より）  
（下） 同 主体部鉄刀出土状況（東より）
- 図版三七 （上） 10号墳全景（東より）  
（下） 10、11号墳（北東より）

- 図版二八 (上) 11号墳主体部(南より)  
(下) 同 (東より)
- 図版三九 墳丘除去後の黒田長山古墳群・墳墓群全景(西より)
- 図版四〇 墳丘除去後の黒田長山古墳群・墳墓群全景(北より)
- 図版四一 墳丘除去後の尾根東半全景垂直写真
- 図版四二 墳丘除去後の尾根西半全景垂直写真
- 図版四三 黒田長山古墳群・墳墓群南尾根全景垂直写真
- 図版四四 黒田長山古墳群・墳墓群全景(南より)
- 図版四五 (上) 墳丘除去後の尾根西半(西より)  
(下) 黒田長山古墳群・墳墓群南尾根(西南より)
- 図版四六 (上) E号墓付近(西南より)  
(下) 黒田長山古墳群・墳墓群南尾根(東より)
- 図版四七 (上) A号墓全景(東より)  
(下) 3号墳主体部(奥)、A号墓主体部(手前)(東より)
- 図版四八 (上) C号墓全景(東より)  
(下) 同 主体部(北より)
- 図版四九 (上) C号墓全景(西より)  
(下) Q、P、O号墓(手前より)全景(南より)
- 図版五〇 E、F号墓全景
- 図版五一 (上) E号墓主体部全景(東より)  
(下) 同 (西より)
- 図版五二 (上) 19号墳、J号墓全景(北東より)  
(下) 20号墳全景(北東より)
- 図版五三 (上) N号墓全景(北より)  
(下) 同 (南より)
- 図版五四 (上) O号墓全景(北より)  
(下) 21号墳主体部全景(東北より)
- 図版五五 (上) P号墓全景(東より)  
(下) Q号墓全景(北東より)
- 図版五六 集石遺構全景(東より)
- 図版五七 (上) 集石遺構(北東より)  
(下) 同 (北より)

- 図版五八 (上) 集石遺構・石除去後(北東より)  
(下) 同(北より)
- 図版五九 1、5、8、21号墳出土土器
- 図版六〇 2、19号墳出土土器
- 図版六一 8号墳出土土器
- 図版六二 土器及び玉類
- 図版六三 2、5号墳、A、M号墓出土土器
- 図版六四 (上) 黒田長山古墳群、墳墓群出土土器  
(下) 同上
- 図版六五 (上) 黒田長山古墳群、墳墓群出土土器  
(下) 押形文土器
- 図版六六 (上) 1号墳出土鉄鏃  
(下) 同上
- 図版六七 (上) 1号墳出土鉄鏃  
(中) 13号墳出土鉄鏃  
(下) 14号墳出土鉄鏃
- 図版六八 黒田長山古墳群出土鉄刀・鉄劍
- 図版六九 黒田長山古墳群出土鉄鉾・鉄劍・刀子
- 図版七〇 黒田長山古墳群出土鉄斧・鋤先
- 図版七一 小塔

別添図面

第1図 黒田長山古墳群測量図

第2図 黒田長山古墳群・墳墓群測量図

# 第1章 位置と環境

## 1. 地理的環境

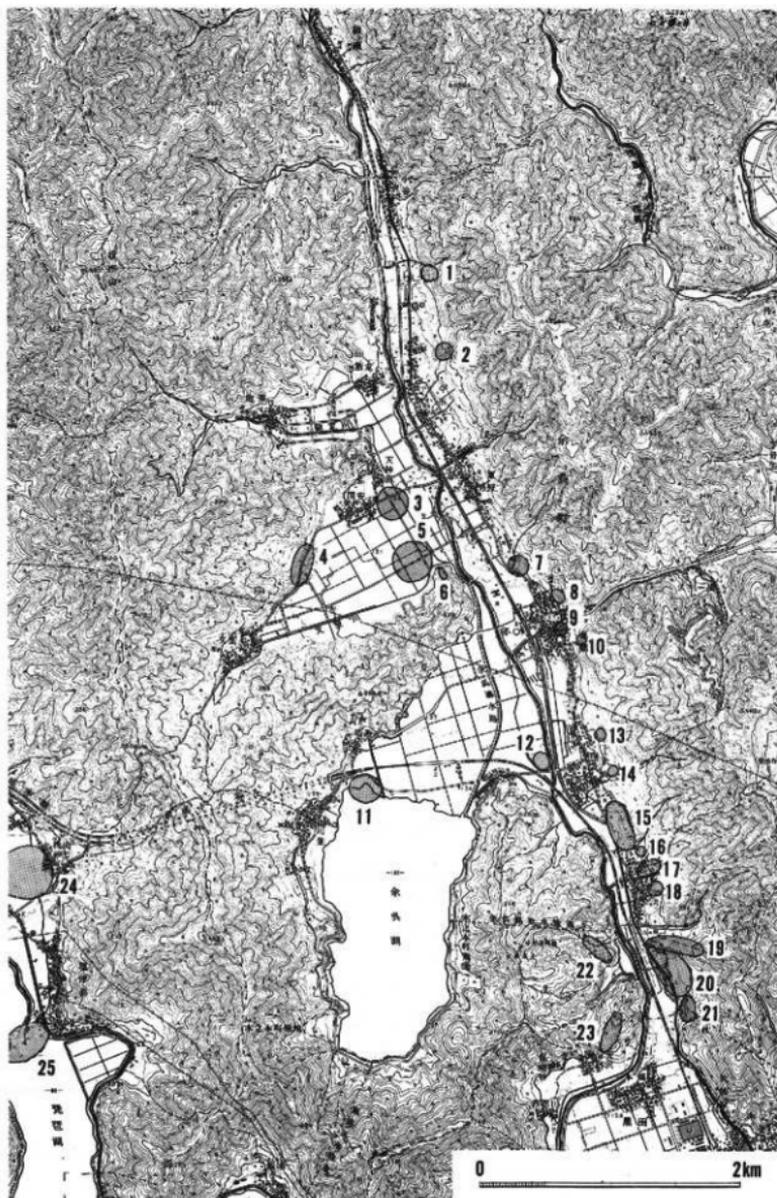
黒田長山遺跡は行政上、滋賀県伊香郡余呉町坂口長山に属する。姉川、高時川、草野川、余呉川などの諸河川により形成された湖北平野は、その北端を木の本町黒田付近で集束し、以北は伊吹山地の断層谷である柳が瀬地溝帯へと続いている。地溝帯の南部には、余呉町今市から中ノ郷、下余呉にかけに盆地状の小平野が形成されているが、下余呉以南黒田以北は東の大箕山、西の大岩山に挟まれて狭い谷筋が形成されている。この狭い谷筋に現在は国鉄北陸線が通過し、柳が瀬トンネルを抜けて福井県敦賀市へ通じ、国道365号線が余呉町椿坂を越えて中河内を抜け、椽の木峠、木ノ芽峠を経て福井県武生市に通じている。古代においても、国道365号線にほぼ沿って北国街道が北上していて、越前武生に通じていた。現在、国鉄北陸線が、米原町で東海道線とつながり、国道365号線が伊吹山の山裾を通過して山東町で国道24号線に合流し、また、木の本町で8号線と合流している。この狭い谷筋が北陸地方と東海地方、また畿内地方とを結び付ける幹線的な役割を担っている。古代においても、北国街道は国道8号線に沿い、彦根市鳥居本で中仙道と交わり、また、木の本町で分離し、国道365号線に沿って南に下る北国脇往還道も山東町柏原で中仙道に合流している。越前と美濃・尾張、また畿内とを結び付ける幹道であった。琵琶湖を利用した交通は、現在ではほとんど利用されていないが、古代においては、米原町朝妻筑摩が筑摩の御厨の所在地として知られ、美濃から近江に入って湖上交通を利用するための港として機能していたようである。また、湖北町尾上付近も、若狭へ通じる塩津の港と共に、越前へ通じる要港として利用されていたと思われる。

このように、余呉川沿いの狭い断層谷も、交通上の要所として位置付けることが出来るであろう。長山遺跡はこの断層谷の南端の東側、大箕山の西側裾部に馬の背状に細長くのびた支丘尾根上に立地している。

## 2. 歴史的環境

長山遺跡は、発掘調査の結果弥生時代後期末の方形周溝墓群と古墳時代中期末の古墳群が検出されている。歴史的環境は複雑さを避けるため、湖北地方の弥生時代と古墳時代についてのみ述べることにする。

湖北地方における弥生文化の波及は、伊勢湾地域からのルートが想定されるが、早くにも前期には、米原町入江内湖遺跡、長浜市川崎遺跡、びわ町大安寺遺跡、湖北町今遺跡などを経て高月町妙光庵遺跡にまで達している。これまで前期遺跡は上記のもの以外に長浜市大辰巳遺跡、同市宮司遺跡、同市十里町遺跡など長浜平野を中心に展開していることが知られているが、妙光庵遺跡は前期中段階の土器類を出土していて、弥生文化の北上が極めて早期に達成されていることが知られるのである。しかし、湖北北部においては、弥生文化のその後の発展は遺跡から見る限り、遅滞とした様相を見せている。湖北南部においては、入江内湖遺跡では中期から後期にかけての土器類を引き続き出土しており、川崎遺跡では中期にまで集落の存続は認め難いが、隣接する長浜市大辰巳遺跡や鴨田遺跡などでは中期以降古墳時代に至るまでの継続が見られ、弥生文化の中心的な遺跡となっているのである。湖北北部においては、今のところ湖北町延勝寺湖底遺跡で中期中段階の遺物の出土を見ているが、以降への継続性はなく、中期後葉の住居跡を確認している高月町井口遺跡においても古墳時代初頭までの間に断絶を認めざるを得ない。このように、湖北地方における弥生文化は、極めて早い段階に湖北平野の最奥部にまで達してい



第1図 黒田長山古墳群位置図

番号	遺跡名	所在地	立地	遺跡の概要	年代	備考
1	塚谷古墳	余呉町今市	山麓	円墳一基		
2	狐塚古墳	余呉町今市	山麓	円墳一基		
3	松田遺跡	余呉町東野松田	平地	須恵器(墨書土器有り)、土師器	8世紀	
4		余呉町文室	台地	土師器		
5	ナラ遺跡	余呉町国安	平地	須恵器		
6		余呉町	丘陵	前方後円墳か?		
7	籠岡遺跡	余呉町中之郷	台地	須恵器		
8	笠上遺跡	余呉町中ノ郷	山麓	近世墓跡、土城墓(勾玉、碧玉出土)	4世紀、15世紀	「北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書1」昭49
9	日槍塚古墳	余呉町中ノ郷大塚	平地	円墳一基		
10	柏塚古墳	余呉町中ノ郷柏塚	山麓	円墳一基(直葬墓、須恵器、鉄製品出土)	5世紀末	「北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書」昭53
11	余呉湖岸遺跡	余呉町川並	湖岸から 湖底	縄文式土器、埋没林	縄文後期	
12	蔵方遺跡	余呉町下余呉蔵方	平地	須恵器	8世紀	「北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書田」昭51に出土遺物実測図有り
13	願れ谷古墳	余呉町下余呉願れ谷	山麓	須恵器		
14	北畑古墳群	余呉町下余呉北畑	山麓	円墳数基(須恵器、勾玉、金環出土)	6世紀後半	「北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書田」昭51に出土遺物実測図有り
15	坂口北遺跡	余呉町坂口	台地	須恵器・土師器		
16	大門古墳	余呉町坂口大門	山麓	円墳一基(横穴式石室)	6世紀	
17	坂口遺跡	余呉町坂口	台地	整穴式住居跡3基以上、近世神社跡(弥生式土器出土)	3世紀	昭51調査
18	上ノ山古墳群	余呉町坂口上ノ山	山麓	円墳7基(横穴式石室、直葬墓、須恵器、勾玉、碧玉、瓦玉出土)	6世紀初頭～ 7世紀初頭	「北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書田」昭51
19	黒田長山古墳群	余呉町坂口長山	丘陵尾根	円墳 基(直葬墓、短甲、銅、鉄、并出土)、方形周溝墓群	5世紀末、3世紀	昭52・53調査
20	塚内遺跡	余呉町坂口塚内	台地	整穴式住居跡、方形周溝墓(弥生式土器、須恵器出土)	3世紀、6世紀末	昭52以降継続
21	黒田長野古墳群	木之本町黒田長野	山麓			今回報告
22	西山古墳群	余呉町坂口	丘陵尾根	円墳6基(横穴式石室)以上	6世紀	
23	黒田古墳群	木之本町黒田南嶋山	山頂	円墳6基		
24	祝山遺跡	西浅井町祝山	平地	須恵器・土師器		
25	大川河口遺跡	西浅井町塩津浜	湖岸から 湖	陶器類	鎌倉～室町	

表1. 黒田長山古墳群周辺主要遺跡分布図

るのであるが、その後の発展は姉川以南の長浜平野を中心とした展開を示し、湖北北部での定着は後期を待たねばならない状況であるといえよう。この時期は、湖北において集落が増加する時期であり、その分布も、かつての低湿地から谷部などの高標高の地域にも達し、湖北全域に遺跡が広がる時期でもある。弥生時代の墓制については、発掘例が少なく、平地に立地している長浜市大東遺跡で後期の方形周溝墓を2基、丘陵端部に立地する虎姫町丸山遺跡では漢式築を出土し、木棺墓の存在が想定される。同町の五村遺跡は平地に立地し、中期末から後期にかけての土器類を出土し、方形周溝墓が数基確認されている。湖北町丁野遺跡も丘陵に立地していて、後期から古墳時代にかけての土壌草群が検出されている。このように、弥生時代中期以降のものが若干例知れるにすぎないが、平地の方形周溝墓と丘陵上に立地する土壌草群と言う対比できる状況にある。しかし、集落との関係となると、五村遺跡において方形周溝墓の分布範囲と土器類の出土範囲との分類から対比させることが可能と言える程度に留まり、不明確な点が多いのが現状である。

古墳時代では、湖北地方は特に前期から中期にかけて極めて特徴ある展開を示す。集落の検出例は、土器類出土の分布に比べて極めて少なく、しかも知りうるものは何れも後期のものである。特徴ある点は古墳の在り方であって、40基前後の前方後円墳の存在は他の地域を遥かに凌駕しているのである。古墳時代前期の古墳についてははっきりしないが、中期から後期にかけての前方後円墳については極めて特徴的な分布を示している。前方後円墳の分布は、湖北北部の高月町を中心とした古保利古墳群、物部古墳群、涌山古墳群を含む地域、姉川左岸の長浜古墳群、天の川左岸の息長古墳群の3地域を中心に展開している。特に、息長古墳群を除く2地域の古墳群は前期ないし中期に古墳群の形成が見られ、物部古墳群中の姫塚古墳や長浜古墳群中の丸岡山古墳などのように100mを超すような大型の古墳をある時期に形成しながら群を形成しており、ともに後期に至るまでには群の形成を終えているのである。後期には息長古墳群に湖北全域が統一された感があると言えるほど、前方後円墳の築造はこの古墳群に限られるのである。こうした消長を経ながら湖北の古墳時代が経過していくのであるが、中期段階には、上記2地域の中心地以外に、美濃と越前とをつなぐ北国脇往還道沿いの山東町から浅井町、湖北町にかけて前方後円墳や大型円墳、前方後円墳の伝承地などが点的に分布する。湖北に勢力をもつ2地域以外に、幹道沿いに分布する在地の小首長層の存在を物語るものであろう。また、当長山遺跡の南、長尾古墳群において、前期末ないし中期初頭頃に2期の方墳が築造される。この2基の方墳の存在は、方墳の分布が畿内の勢力範囲の縁辺部に多く分布すると言う特徴がみられ、当時の越前地方と畿内勢力との関係からすれば注意すべき存在と言えるのであり、湖北の二大古墳群の形成初期に、早くも畿内勢力の及ぶところとなっている様子を見ることができそうである。中期と後期の境は、湖北の二大古墳群が前方後円墳を築造しなくなり、代わって息長古墳群が勢力を持つと言う過渡期に当たるが、この頃に当長山古墳群が形成され、浅井町雲雀山古墳群等と共に、短甲などの武器器具類を副葬するなどの特徴的な古墳群が形成される。今のところこの二群が知られるにすぎないが、地理的に要所を占めていることなどから、この古墳群の持つ性格については興味のある所である。

## 第2章 黒田長山4号墳の調査

### 1. 墳丘(第2~4区)

墳丘は、自然地形の整形、封土の築成、葦石の貼り付けの順で構築される。これらの各々については、墳丘を4等分して第1区~第4区とし、各区毎に説明して最後に墳丘全体に触れたい。墳丘の断面については、各区の墳丘に向かって左側にくる観察用畔を第1区畔等と表現し、その観察結果を記述することとした。平面的な計測数値は主にこの畔からの距離である。なお、垂直距離については、各区のレベルを比較するため、できるだけ標高で示すこととした。

#### イ. 第1区

(地山整形) 自然地形は、第1区畔の観察では、幅約5.6m、深さ1.2m程にわたり、V字形に近くカットされている。この整形は、第1区側に約6m、第4区側に約12mの計18mにわたり、円弧状に掘削されている。掘削部の深さは第1区畔で177.65m、北端で177.03mを計り、両端に向かって徐々に深くなるが、両端では自然消滅しており、自然地形の高所側の墳形を整えるべく掘削されたことが知れる。円弧状掘削の内側は、幅4.5m程にわたり、178.8mの高さまでほぼ水平に削平しており、以下では自然地形の緩斜面となっている。

(封土) 封土は、最初水平削平面の高さまで円弧状掘削部の最深所より内側が埋められ、外表面の傾斜を約25度とする。次いで、水平削平面上部に、厚さ50~60cm(標高179.4m)程盛土し、最後に全体を覆って盛土して墳丘を完成している。従って、円弧状掘削部の最深所を墳丘裾部とし、墳丘外表面の傾斜を25度として最深所より高さ2.15mの墳丘を築成していることになる。墳丘外表面の傾斜部は最深所より水平距離で5mまでで、以西は水平となっている。

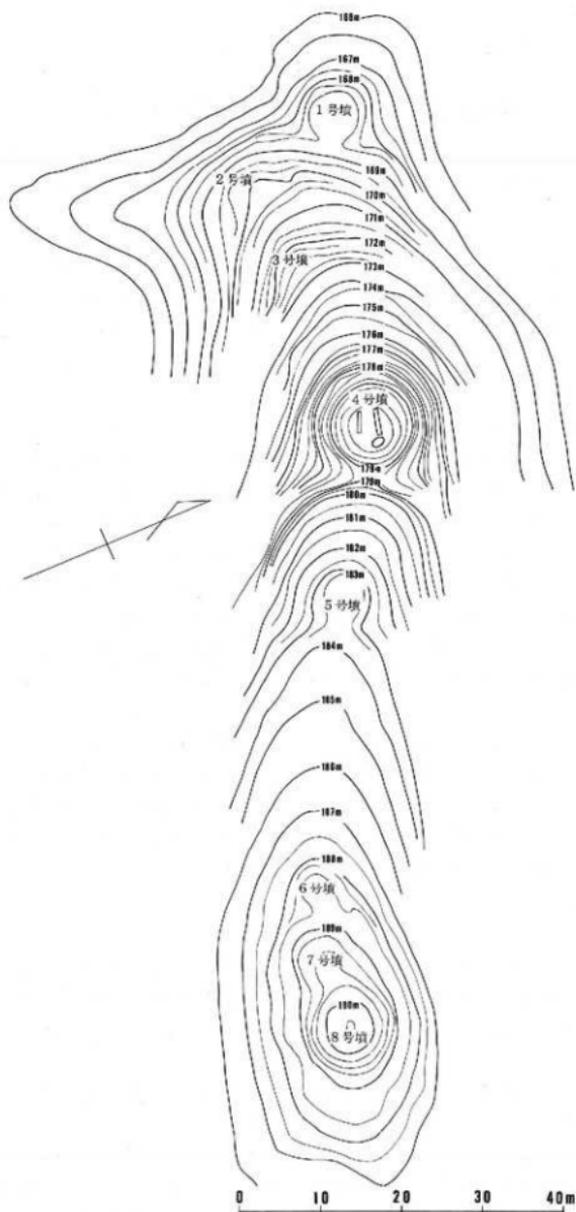
(葦石) 基礎石は円弧状掘削部の最深所にくる。従って、第1区畔では標高177.65mの高さに基礎石が据えられていることになる。178.8mの高さまでの分が遺存していた。第1区では、基底部で幅5.8mまで三角形に良く残るが、第2区よりの半分はまばらにしか残っていなかった。使用石材の規模は、この遺存状態の異なる2つの部分で若干異なっている。すなわち、第1区畔側の遺存状態の良好な部分では長さにして約40cmのやや大型の石材であるのに対し、遺存状態の悪い部分では長さにして20cmの小型の石材のみが残っているのである。基礎石の規模も上部の石材と同じである。

#### ロ. 第2区

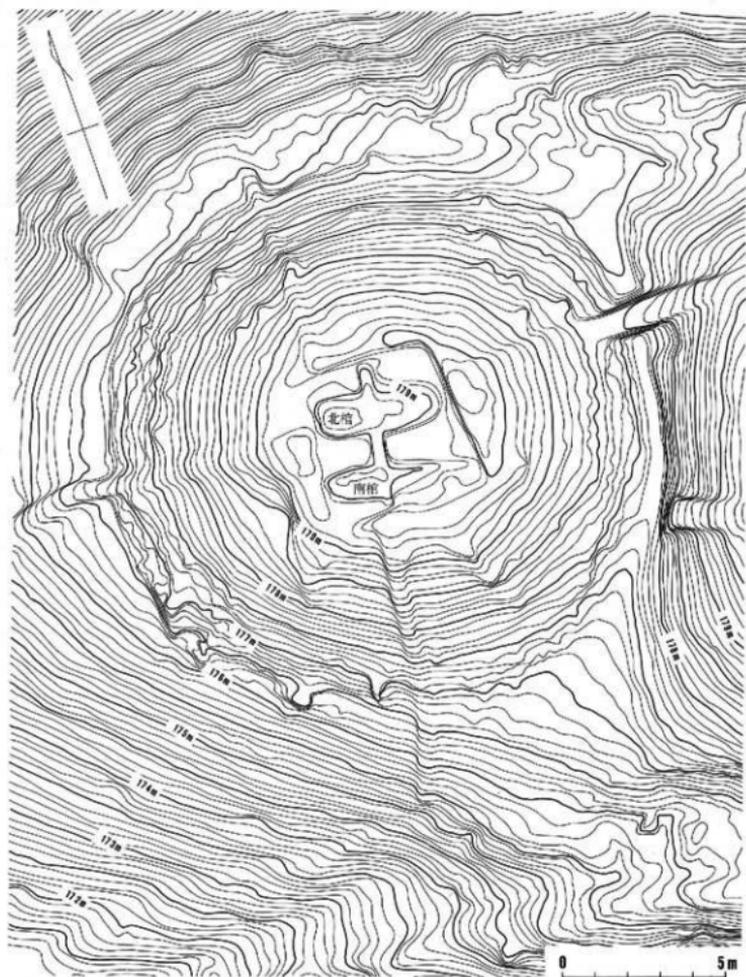
(地山整形) 馬の背状の細い根椋の北側斜面で、それに直交する方向にあるが、この部分での自然地形の整形は特に認められない。畔部分での最高所は178.56mであり、第1区で認められた水平削平面部分の高さに及ばず、未整形で自然地形を残しているものと思われる。このことは墳丘の裾部においても同様で、特に繫部を決めるための整形は成されておらず、葦石の基礎石によって決定している。

(封土) 盛土はほぼ水平に堆積させている。墳丘の外表面は、墳丘裾部より内側約4.88mまでを約29度の傾斜とし、以南を水平としている。

(葦石) 基礎石は第2区全域で遺存していたが、上部は遺存状況が悪い。基礎石は、第2区畔の部分で176.6mの高さにあり、第1区畔の部分に比べて約1mほど低くなっている。基礎石は、長さにして約40cmほどの規模であり、上部の石材に先行して、横位置に据えられていることは第1区の場合と同様である。上部の石材は基礎石



第2图 1~8号埧地形测量图



第3图 4号墳地形測量圖(発掘後)航空測量圖

より1.4mの高さまで残っていた。使用石材は、第3区の畔より第2区側へ50cmほどの点で、この点における接線に対して約60度の線分を境に、第3区よりのものが長さにして25cm前後の小型のものであり、第1区よりのものが基底石と同規模の大型のものが多く見受けられる。この境を明確に引くことは遺存状況から困難であるが、同様のことが次の第4区でも認められる所から葺石の構築にかかる差異と考えることができよう。第1区でも石材規模の異なる部部があったことは先述の通りである。

#### ハ、第3区

(地山整形・封土) ここでも自然地形の整形は顕著でない。約15度ほどの自然傾斜面を残し、盛土はこの直上に置かれている。

(葺石) 葺石は第4区側の半分がほとんど流失してしまっている。第2区よりの半分も樹根等によりその状況は明らかでない。基底石は第3区畔より3.4mまで良好な遺存状態を示している。石材は他の地区と同様の規模のものをを用い、やはり横位置に並べている。上部の石材は第2区より続いてやや小型のものをを用い、小口積みになっている。

#### ニ、第4区

(地山整形) 第4区でも自然地形の整形は認め難い。

(封土) 盛り土は外表面を約23度の傾斜にし、水平に積み上げている。

(葺石) 第4区が最も遺存状態が良好であった。基底石の規模や並べ方、上部の石材の小口積みなどは他の地区と同様である。上部石材の大きさに関して、第1区より第4区側2.8mの位置で、この点で設けた接線に対し約40度の線分を境に、第1区よりと第3区よりとでその規模が異なる。すなわち、第1区よりでは基底石と同規模のものが用いられているのに対し、第3区よりでは小型の石材が用いられているのである。この境は第2区で認められた以上に明瞭であった。

#### ホ、墳丘の構造

以上の各地区毎の観察結果を以下にまとめることとする。

(地山整形) 自然地形の整形については、馬の背状の丘陵尾根の高所側を、山側は幅17m程にわたってほぼ直線的に、谷川は墳形を整えるべく円弧状に幅18mにわたって、V字形に近い横断面で掘削される。この掘削は標高177.65mを最高に177mの深さまで行われ、以下の高さには及ばない。墳丘に当たる部分では、標高178.8m以上の部分は水平に削平されるが、以下の部分は自然の地形をそのまま生かしている。

(封土) 盛土はほぼ水平に積み上げ、墳丘の外表面は22～29度の傾斜を持たせている。この傾斜角は葺石の遺存状況から考えて、ほぼ本来の傾斜面をのこしていると考えてよいものである。

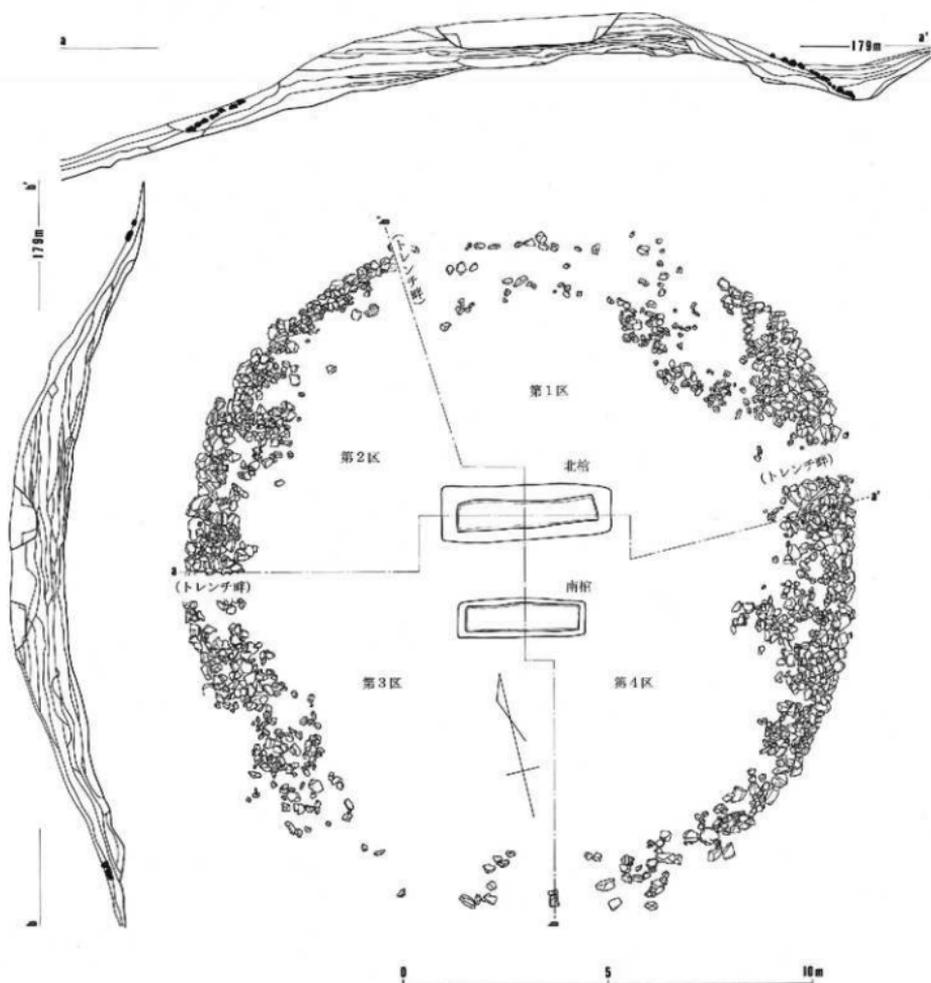
墳頂部は、直径10mの範囲で水平な面を形成している。墳頂部の標高は179.8mを測る。

墳丘の裾端部は葺石の基底石によって決定されている。各区畔部分における墳丘端部の標高は別表2の通りである。ただし、第4区畔では葺石の基底石が遺存していなかったため、上部葺石の最下部の数値である。従ってこの数値以下の標高である。

表1

第1区畔	177.65m
第2区畔	176.60m
第3区畔	176.64m
第4区畔	(177.20m)

この計測数値で明らかのように、墳丘の山側と谷側とでは1mほどの高低差が生じているが、墳丘の南北両側と谷側とではほとんどレベル差がない。すなわち、墳丘の山側半分で墳丘裾部が大きく傾斜し、谷側半分でほぼ水平となっているのである。これは、山側で自然地形を切断した掘削が行われ、この掘削の深さに規制された結果生じたものである。掘削は中央の177.65mから両端部の177mまで



第4図 4号墳墳丘断面土層実測図及び葦石実測図

行われており、葦石の基底石はこの高さに合わせておかれている。さらに基底石は176.6mの高さまで自然地形の傾斜にそわし、以下の高さではほぼ水平においているのである。このことから、墳丘の形状はほぼ正円形を呈し、直径16.4~17mを計ることとなり、高さは、2.25~3.3mを計り、山側と谷側とで約1mほどの計測差が生じることとなるのである。

(葦石) 葦石は山側の遺存度が良好で、南北両側は流失が激しい。葦石の傾斜角は22~29度で、遺存度の最も良好な第1区では25度を計る。

葦石の葦方については、まず、長さにして40cmほどのやや大型の石材を横位置に置き並べ、次いで上部の石材を小口積みにする。上部の石材については、第2区と第4区とで使用される石材規模のことなる部分が認められた。特に第4区では隔線とでも称すべき線分によって明瞭に区別できた。第2区と第4区とで石材の規模の異なる基底石部分での境界点を結ぶ線分は、墳丘のほぼ中心点を通るのであり、葦石の構築に計画性のあることが考えられるのである。第4区では、基底石での境界点を頂点とし、幅1.5mを下底とした逆三角形の範囲に小型の石材が目立つ。第4区から第1区にかけて、基底石での境界点から約8.4mまで大型の石材が続き、それより外側では小型の石材が多い。8.4mと言う数値は、墳丘の円周をおよそ6等分した数値であり、第2区での石材の規模が変化する境界点から基底石遺存部まで、また、同じ境界点から第2区及び第3区にかけての基底石の遺存部まで、さらに、第4区において、石材規模の異なる境界点から基底石の遺存している範囲の距離がほぼこの数値に等しいのである。墳丘の南北両側は急傾斜面であり偶然に墳丘の円周の6分の1に近い数値幅で流失している可能性も考えられるが、隔線とも称すべき線分の存在、第4区で、逆三角形に小型石材が葦かれていることなどにより、むしろ、墳丘円周を6等分し、6分の1円弧毎に大型の石材を貼り付け、このことによって生じる逆三角形の空白部分に小型の石材を貼り付けていくと言う葦石の構築法を復元しようものとする。

## 2. 埋葬施設 (第5・6区)

墳頂部で木棺を直葬したものを2基検出した。2基は、約1.4mの間隔をおいて墓壇を穿ち、南北にほぼ平行して棺を埋納していた。墳丘の中心線が両墓壇の対象線と重なり、両者が計画的に埋納されていることが知れる。以下では、南側の施設を南棺、北側のものを北棺と呼称する。なお、両主体部の計測値は次表3の通りである。

表3

		南 棺			北 棺		
		長さm	西端幅m	東端幅m	長さm	西端幅m	東端幅m
墓	上端	3.14	1.04	0.85	4.20	1.36	1.23
	下端	3.02	0.82	0.80	3.37	0.72	0.55
木 棺		2.78	0.55	0.65	3.41	0.70	0.65
棺底傾斜		(W) 179.23, (E) 179.43, (3° 30')			(W) 178.33, (E) 179.16, (4°)		
頭位		東			東		
軸線		N113° E			N109° E		

#### イ. 南棺 (第5図)

##### I. 墓壇

長さ3.1m、上端幅0.85~1.04mの規模を持つ。下端の計測値と大差ないが、これは主体部検出過程で若干掘り過ぎているため、木逆台形状の横断面を呈する掘り方である。上端は西端が東端より20cmほど広くになっているが、下端では差がなく、墓壇底は長方形のプランを持つ。

##### II. 木棺

棺は長さ2.78m、幅0.55~0.65mの箱型の木棺であったと思われる。棺底は東側が20cmほど高く、傾斜角は3度30分を計る。この傾斜角は墓壇底と等しく、棺が墓壇底の直上に置かれていることが知れる。棺の東西の軸線はN113度Eにある。これら棺の傾斜角、棺幅、また、次に述べる副葬品の配置などから、頭位は東にあったと考えてよい。

##### III. 副葬品

鉄刀2振り、短甲1領、鉄鏃一括、鉄刀の残刀1点が、何れも棺内から出土している。鉄刀は、棺の南北両側に1振りずつ、刃先を西に向けて置かれていた。短甲は、棺の西端にあって、前胸を上、裾部を東にして出土している。鉄鏃は、この短甲の左脇部(北側)に、刃先を西に向けて、一括して置かれていた。

以上の副葬品の配列を遺体との関係でみると、頭位が東にあると考えられるから、短甲が棺の東端より2.05mの位置、すなわち、足元に短甲及び鉄鏃が置かれていることになる。鉄刀は、南側のものの刃先が北側のものの基の位置にきており、従って、南側の鉄刀は上半身の側面、北側のものが下半身の側面に沿って置かれていたことになる。鉄刀の残欠は、棺の東端より1.46mの位置から出土している。調査の過程で盗掘の痕跡を認めなかったため、この鉄刀の残欠も原位置を保っているとせざるを得ない。従って、遺体の膝位置辺りに当たることとなる。あるいは、遺体にはまり込んでいたものであるかも知れない。

以上の副葬品のほかに、棺の上面に当たる位置から、須恵器の壺1個体分、壺の口縁部及び体部片1個体分、土師器で高杯かと思われるものの破片1個体分が出土している。

#### ロ. 北棺 (第6図)

##### I. 墓壇

南棺のものより大きく、上端で、長さ4.2m、幅1.23~1.36mの規模を持つ。下端は、長さで上端より83cm、幅で64~68cm狭くなっており、横断面逆台形状の掘り方を示す。幅が頭位とは逆に西側が広くなっているところは南棺と同様である。

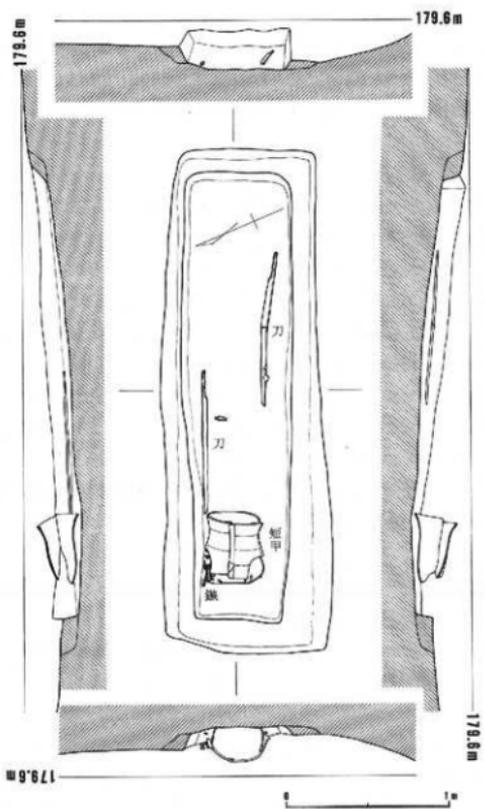
##### II. 木棺

長さ3.41m、幅0.65~0.7mの箱型の木棺である。南棺に対して、長さで63cm長い、幅は大差がない。棺底は墓壇底の直上にあり、東側が17cm高く、4度の傾斜角を持っている。棺の東西の軸線はN109度Eにあり、南棺に対してわずか4度の差である。棺底のレベルは南棺に対して約30cmほど低い。頭位は、棺底の傾斜から考えて、やはり東であろう。

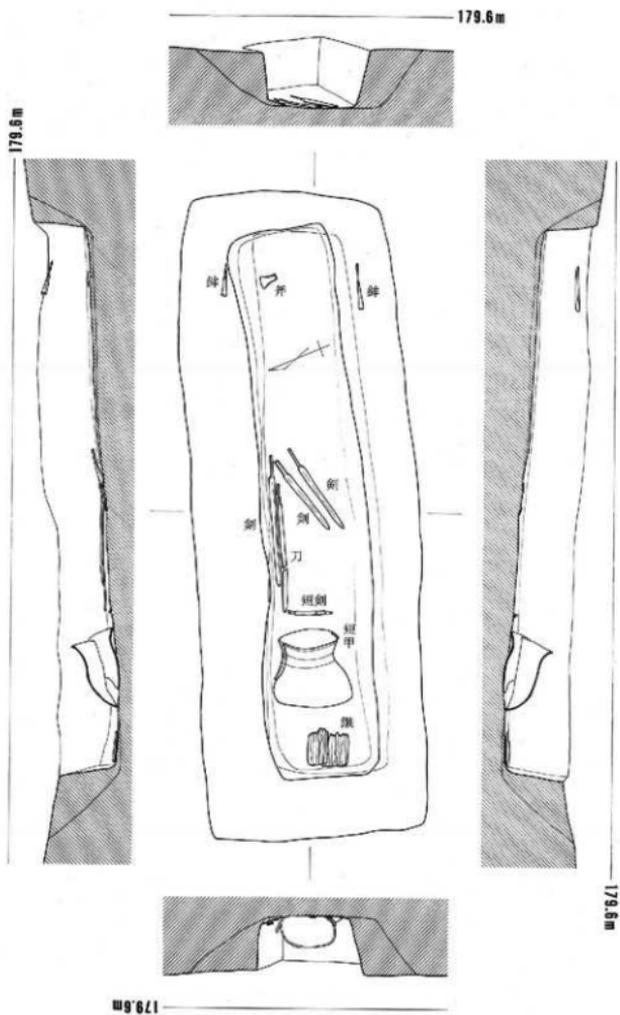
##### III. 副葬品

鉄剣3振り、鉄刀1振り、短剣1振り、短甲1領、鉄鏃一括、鉄斧1本が棺内から、鉄鉾が棺外から出土している。

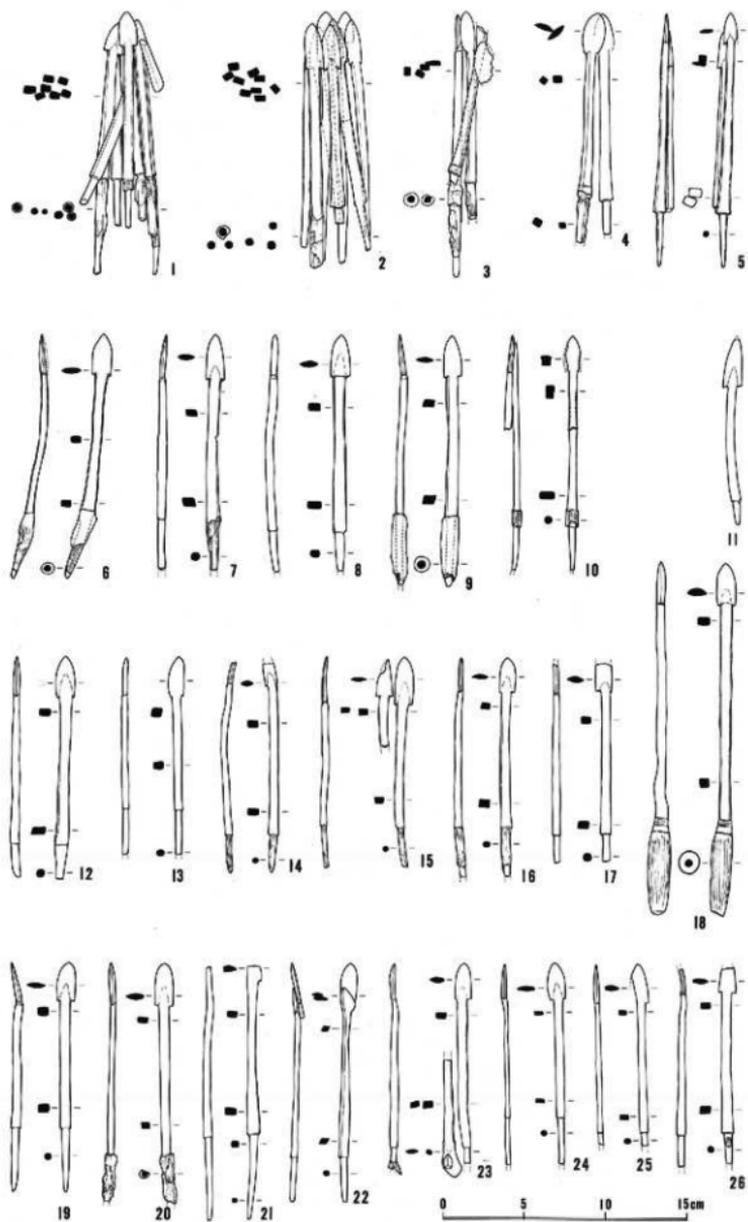
鉄斧は、やや東よりで、棺の東端から25cmの位置から出土し、短剣が棺の主軸に直交して、東端より2.34mの位置に置かれていた。従って、この間に遺体が置かれていたと考えることが出来る。短甲は、短剣の西側で、9



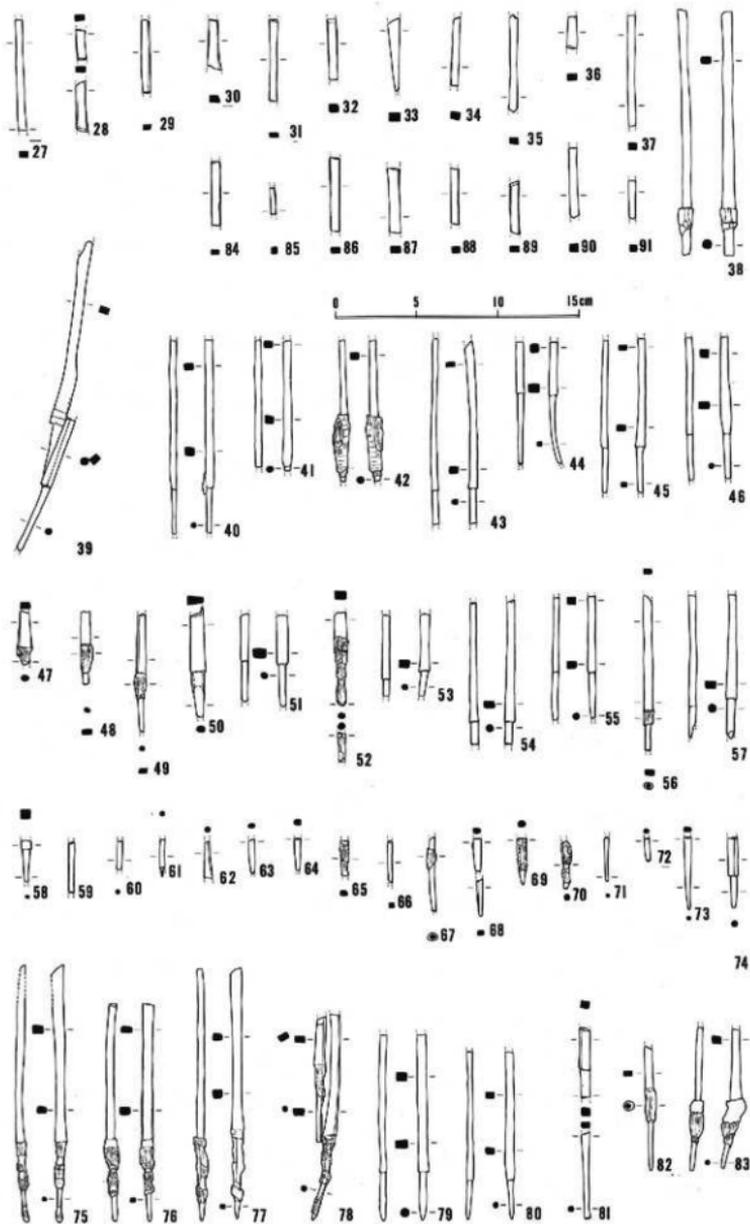
第5图 4号填南棺实测图



第6图 4号坑北棺实测图



第7图 4号墳南棺出土鉄器実測図(1)



第8图 4号墳南棺出土鉄鏃実測図(2)

cmほどの間隔をおいて置かれていた。短甲は、裾部を東側に向けるが、南棺とは逆に、後胴を上方に向けている。鉄鍔は、短甲よりさらに西側に、刃先を西に向けて、一括した状態で出土している。刀剣類は、刀と剣各1振りずつが棺の北側の側面ぞいに、短剣2振りが南側にあって、棺を斜めに横断するような状態で出土している。刀剣類は、何れも棺底の直上から出土しており、棺内に納められた副葬品であることは確実であるが、南側の剣2振りは、あるいは、遺体を立て掛けて埋納されていたものであろうか。

鉄鉢は唯一の棺外からの出土品である。棺の東端で、南北両肩部にあったものが、棺の腐朽により棺内にずり落ちたような状態で出土している。

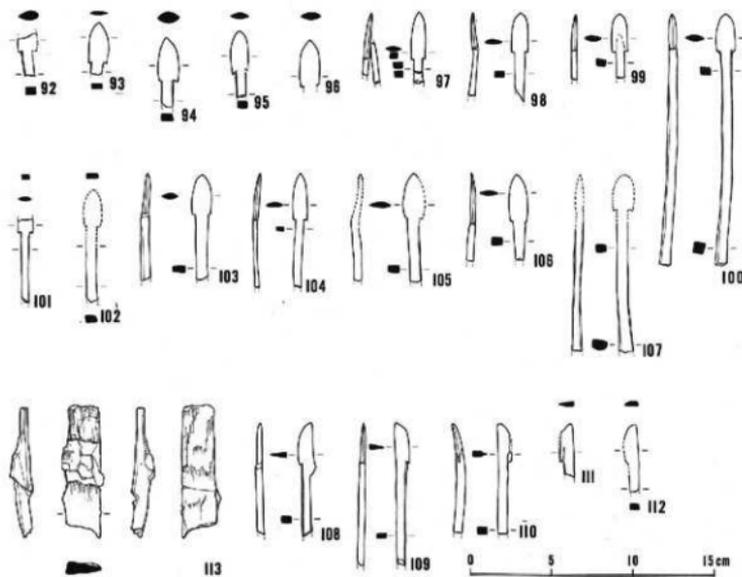
#### ハ、まとめ

南北両棺は、墓壇及び木棺の規模、棺の埋納の深さ、副葬品の量などに相違が見られる。しかし、墓壇の掘り方、棺が墓壇底の直上に置かれていること、棺底の傾斜方向、すなわち、頭位、棺の軸線方向など共通性が多く、両者の墳丘における位置関係などからも極めて計画的に作られた埋葬施設と言える。副葬品についても、その量的な差異は認められるものの、副葬品セットの基本的な種類や配置等に共通性がある。このように、南北両棺には共通性が多く見受けられ、各々の埋葬時期にそれほどの差のないことが知れるであろう。

### 3. 遺物

#### イ、南棺出土遺物

##### 1. 鉄鍔 (第7~9図)



第9図 4号墳南棺出土鉄鍔実測図(3)

No.	刃部		棒状部の長さ	葉長
	長さ	幅		
3	2.1	—	8.7	—
	2.5	—	8.2	—
4	2.7	1.3	9	(2.9)
	2.4	1.2	9.2	(2.9)
5	2.5	0.8	10.6	3.3
	2.4	0.9	8.7	(0.2)
6	2.6	1.2	9.1	3.6
7	2.9	1.1	8.8	(3.1)
8	2.6	1.2	9.7	(2.4)
9	2.7	1.1	8.9	(4.2)
10	2.2	(0.9)	(3.6)	—
	—	—	(10.7)	(3.4)
11	(3)	1.1	7.2	(1.4)
12	2.6	1.2	9.3	(2.1)
13	2.5	(1)	8	(2.7)
14	(1.4)	0.8	9.4	2.3
15	3	1.1	7.7	(2.4)
	2.3	1	(3.1)	—
16	2.2	1	8.4	(3)
17	(1.8)	1	8.9	(1.6)
18	2.7	1.2	13.7	(5.8)
19	2.4	1.2	7.9	3.9
20	2.7	1.1	9.6	(2.7)
21	(0.9)	0.9	9.6	5.3
22	(1.5)	(0.9)	9	(2.8)
	2.6	1	(0.9)	—
23	(1.5)	(0.9)	9	(2.8)
	2.2	1	(5.1)	—
24	2.4	1.1	7.4	(2.8)
25	2.4	(1.1)	8.1	(0.8)
26	(1.6)	1.1	8.7	(1.9)
27	—	—	(6.8)	—
28	—	—	(5.1)	—
29	—	—	(4.6)	—
30	—	—	(3.1)	—
31	—	—	(5.1)	—
32	—	—	(3.8)	—
33	—	—	(4.5)	—
34	—	—	(4.3)	—
35	—	—	(6.1)	—

No.	刃部		棒状部の長さ	葉長
	長さ	幅		
36	—	—	(2.1)	—
37	—	—	(7)	—
38	—	—	(12.5)	(1.9)
39	—	—	(11.2)	(3.8)
	—	—	(12.5)	(1.9)
40	—	—	(9.3)	(2.8)
41	—	—	(7.8)	(0.3)
42	—	—	(5.2)	(3.6)
43	—	—	(9.4)	(2.2)
44	—	—	(3.2)	(4.5)
45	—	—	(6.8)	(12.8)
46	—	—	(6)	(2.8)
47	—	—	(2.3)	(0.9)
48	—	—	(2.1)	(3.1)
49	—	—	(4.5)	(2.9)
50	—	—	(4)	(2.8)
51	—	—	(3)	(2.5)
52	—	—	(2.5)	(5.1)
53	—	—	(3.6)	(1.5)
54	—	—	(7.4)	(1.4)
55	—	—	(4.7)	(3)
56	—	—	(8.1)	(1.6)
57	—	—	(6.9)	(2)
58	—	—	(0.5)	(2.1)
59	—	—	—	(3.2)
60	—	—	—	(1.8)
61	—	—	—	(2.4)
62	—	—	—	(2.3)
63	—	—	—	(2.1)
64	—	—	—	(2)
65	—	—	—	(2.2)
66	—	—	—	(2.7)
67	—	—	—	(4.6)
68	—	—	—	(4.5)
69	—	—	—	(2.9)
70	—	—	—	(2.9)
71	—	—	—	(2.8)
72	—	—	—	(1.5)
73	—	—	—	(4.5)
74	—	—	(2.5)	2
75	—	—	(11)	5

No.	刃部		棒状部の長さ	葉長
	長さ	幅		
76	—	—	(9)	4.6
77	—	—	(10.8)	5
78	—	—	(7.6)	5.4
79	—	—	(3)	4.7
79	—	—	(8.6)	3
80	—	—	(8)	2.5
81	—	—	(2.6)	7.1
82	—	—	(2.7)	5
83	—	—	(4.5)	4
84	—	—	(4)	—
85	—	—	(1.7)	—
86	—	—	(4.6)	—
87	—	—	(4)	—
88	—	—	(3.5)	—
89	—	—	(3.4)	—
90	—	—	(4.4)	—
91	—	—	(2.4)	—
92	(1.2)	1.3	(1.6)	—
93	2.5	1.2	(0.8)	—
94	2.8	1.3	(1.7)	—
95	2.7	1.1	(1.7)	—
96	2.9	1.2	—	—
97	2.9	0.9	(1)	—
97	—	—	(2.5)	—
98	2.5	1.1	(3.1)	—
99	2.5	1.1	(3.1)	—
100	2.4	1.2	(13.3)	—
101	(0.9)	1	(1.4)	—
102	2.4	1.2	(4.6)	—
103	2.5	1.2	(4.1)	—
104	2.9	1	(4.2)	—
105	2.7	1.4	(4)	—
106	3	1.2	(2.3)	—
107	2.3	1.3	(8.9)	—
108	2.6	1	(4.5)	—
109	2.5	0.9	(6.4)	—
110	2.5	0.9	(4.4)	—
111	2.4	(0.9)	(1)	—
112	2.4	0.9	(1.8)	—

(( ))は残存部計測数値、刃部幅は最大幅  
Noは図6～8の遺物ナンバーと一致

表. 4号墳南出土鉄器計測数値表

刃部の確認できるもので52本を数える。本来の数量もこれに近い数値であろう。

形態的には、何れも刃部に長い棒状部が付き、さらにこれに茎の付くタイプのものである。棒状部は、一辺4mm前後の横断面が方形ないし長方形のもので、茎は径3mm前後の規模で、概して横断面は丸い。刃部の形態のみ見ると2種類がある。一種類目は、長さ2.1~3cm、幅0.8~1.4cmで、小さな逆刺を持ち、両刃で、横断面がレンズ状を呈するものである（A類）。2種類目は、長さはA類と大差がないが、幅が0.9cmと狭く、片刃で、横断面がレンズを半裁した形状を持つものである（B類）。大半がA類で、B類は、確認できたものはわずか6本である。

規模については、完存するものが26本で、このうち25本までが長さ7.2~10.6cmの間に入る。わずか1本のみ13.7cmと極端に長いものとなっている。接合の困難なものの中で、残存長が10cmを超えるものが5本有り、また、8~9cm程度のもので7本ある。従って、大半が棒状部で8cm前後のものであるが、少数ながら長大なものが加わっていることになる。ただし、この規模の差は刃部の形態とは関係を持たない。なお、鉄鐮の計測数値を別表4に示しておいた。

## II. 鉄刀（第13図）

1本は完形で、全長97.7cmを計る直刀である。茎は長さ16.2cm、幅1.9~2.6cmで、茎の付け根の刃部側に腐みが見られる。厚みは0.9cmである。刃部は、関部で幅4.1cm、厚みは0.8cmを計る。直刀であるが、若干内反りしている。茎から刃部にかけて木質部の異存状態が良好で、特に、茎の背の部分には布の痕跡を認めることが出来る。また、刃部の木質部に、関から刃先側へ2.5cmの位置に、刃部を横断して直線状の刻線が見られる。布の痕跡や刻線については、北檜出土のものにも認められるところであり、これらについては後に合わせて再述することとする。

他方は、刃部の先端及び茎の基部が欠失している。残存長70cm、茎の残存長7.3cmを計る。幅は、刃部が3.3cm、厚みは刃部が0.7cmである。刃部はやはりわずかに内反りしている。木質部の異存状況は良好で、この鉄刀の場合、茎に関から2.6cmのところに横一直線の刻線状の刻みが認められる。

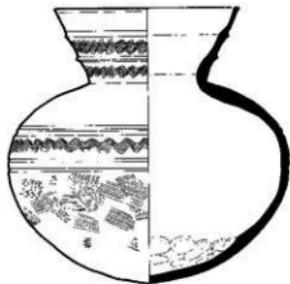
## III. 短甲（第10図）

右前胸開閉式横別板鋏留短甲である。前胸高34.8cm、後胸高43.3cm、胸前後径32.5cm、胸左右径38.0cmを計る。前後胴ともに7段で、前胸は堅上4段、長側3段である。押し付け板、地板、襠板の何れも後胴と左右胴とを別々に作り、鋏留めている。押し付け板は皮紐で覆輪を作っていたらしく、穿孔が見られる。上縁は円弧状を呈し、裾板は、鉄板端を外側に折り返して縁としている。

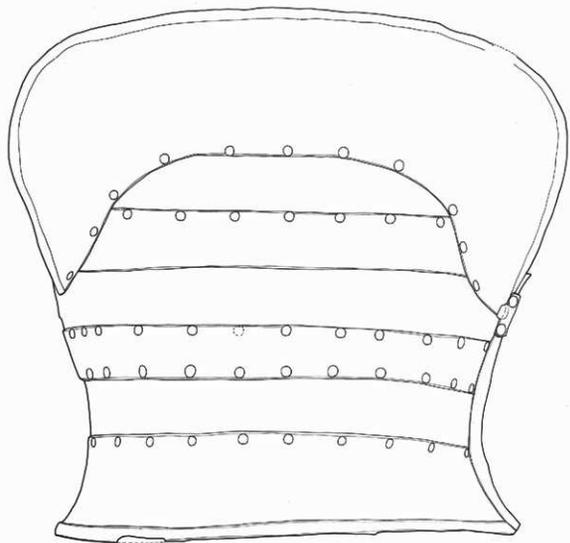
なお、地板（横別板）は幅7.5~7.8cmで、上下端を下重ねにしている。帯金は幅4.2~4.8cmで、地板は、外観上幅4.5cmとなり、地板、帯金とも外観では幅が等しく見える。裾板は幅8.2cmを計る。

## IV. 須臾器（第11図）

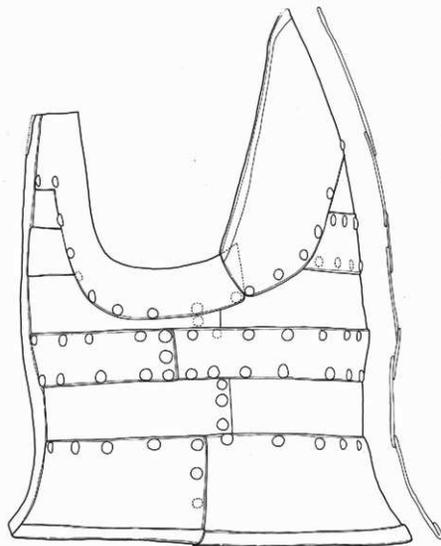
1点は直口形の壺で、全体を復元できる。口縁部外面に2状の突帯が巡り、各突帯の下方に波状文が施されている。また、体部の中程とそれより2cmほど上方に2状一對の凹線が施され、その間にも波状文がある。体部の形態はやや扁平で、胴部の最大径がやや上方に来る。整形は、体部の下半部に叩き痕が残るが、叩いた後に撫で調整し、底部付近はほとんど叩き痕は残らない。体部の内面は横撫でしており、内底面には指による押圧痕が見られる。



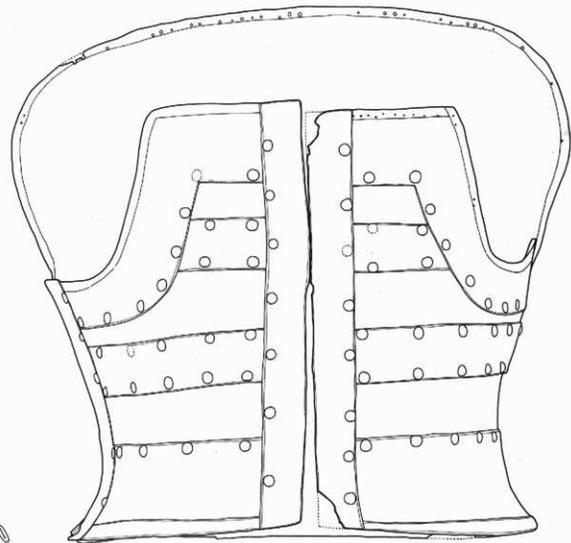
第11図 4号墳南柏上部出土須臾器壺突帯側面図



第10図 4号墳南棺出土短甲実測図（縮尺3分の1）



第11図 4号墳南棺出土短甲実測図（縮尺3分の1）



口縁部は、端部に面取りが成され、わずかに外方へ肥厚している。

端面は水平である。

他の1点も壺型土器と思われるものの口縁部の破片である。口縁部の復元径は19cmと大きく、外反して開いている。端部に面取りがあり、わずかに上方へ肥厚している。端部下方に1条の凹線とこれと接して下方に突帯が走る。凹線と端部との間、及び、突帯の下方に波状文が施されている。下段の波状文の下にわずかな段が見られ、凹線が通っているのであろう。

これら須恵器壺2点は、ともに胎土は精良で、茶色味を帯びた灰白色を呈し、硬質に仕上がっている。

#### V. 土師器

高杯かと思われるが、細片で、形状は明らかでない。

#### ロ. 北棺出土遺物

##### I. 鉄鎌 (第12図)

出土状況を残すため分解はしていないが、46本まで数えることが出来た。これは一括ではなく、少なくとも21本と25本で各々1束になっていた状況にある。長さは、全長で18cm前後で、南棺に見られたような長大なものではなく、統一された長さを持っている。形態は南棺のものと同様で、長い棒状部に刃部及び茎が付くものである。刃部の形態は、観察できるかぎりではA類のみで、B類の存在は明らかでない。

##### II. 鉄斧 (第12図)

全長10.9cm、刃部の幅8.7cm、袋部の外径3.5cm×2.5cm、内径2.7cm×1.8cm、袋部の長さ4.6cmを計る。板状の鉄板の片側を叩き伸ばし、両側より折り曲げて袋部を作り上げたもので、全体にバチ形を呈し、袋部と刃部との境界は肩を持たず、スムーズである。刃部は徐々に薄くなるが、端部はまるい。

##### III. 鉄剣 (第13図)

短剣を含めると4本ある。各々の計測値は次表5の通りである。

何れも両側で、刃部の横断面はレンズ状を呈して、明瞭な鍔は認められない。何れも木質の遺存状況は良好で、特に3には、刃部で闊から1cmのところ、木質部に一条の刻線状の凹線が横断している。また、4には刃部及び茎に闊から各々2.2cmのところと同様の凹線が認められる。これは、南棺出土の鉄刀に認められたものと同様のものである。

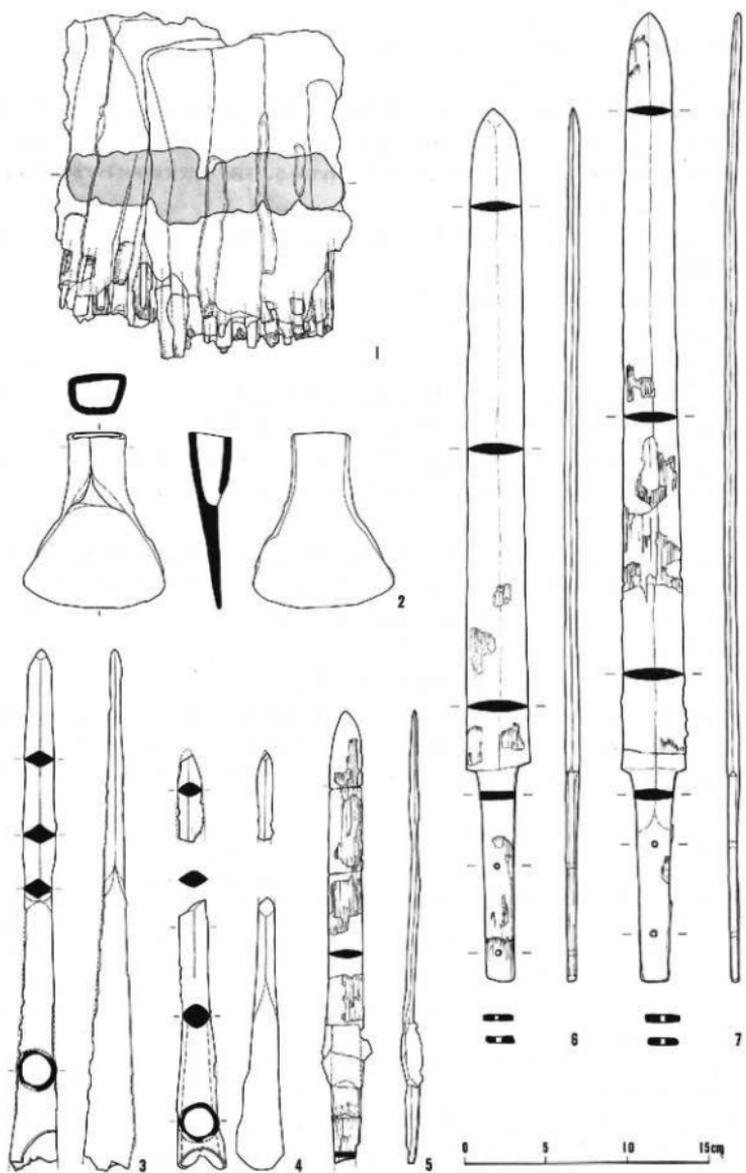
表5

No.	全長	刃部長	刃部幅	刃部厚	茎幅	茎厚	目釘
1	27.9	19.5	2.3	0.5	1.3~1.8	0.3	ナシ
2	54.1	41.0	3.9	0.9	1.7~2.5	0.4~0.5	2
3	60.1	46.9	3.9	0.8	1.8~2.8	0.5~0.7	2
4	83.9	68.0	4.0	0.7	1.9~2.7	0.5~0.6	ナシ

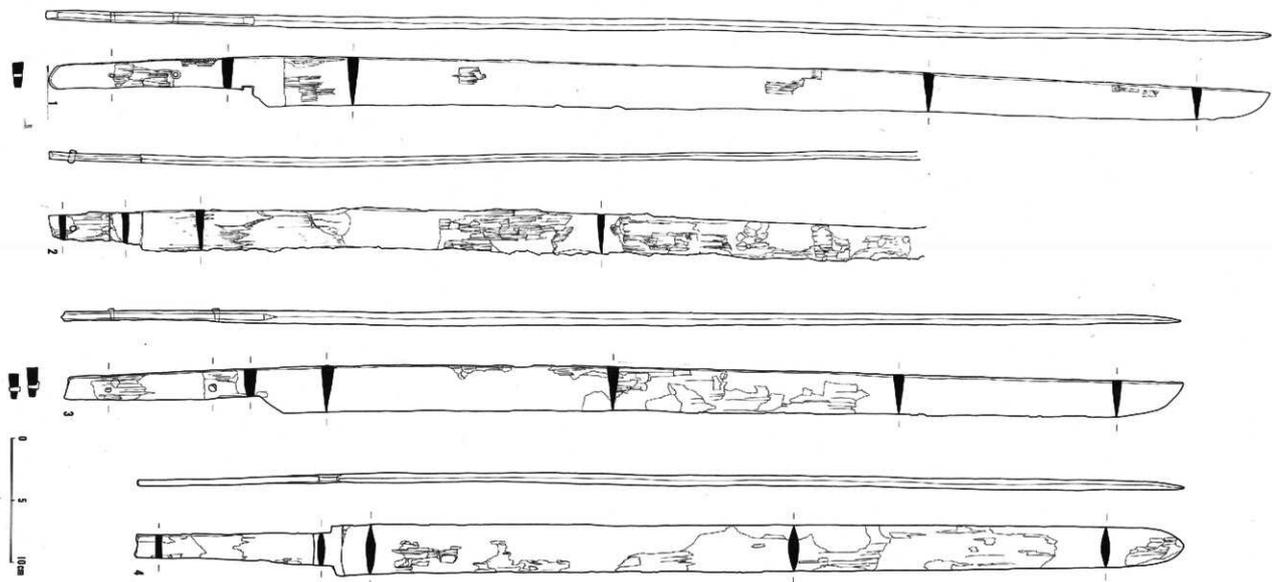
(単位cm)

##### IV. 鉄刀 (第13図)

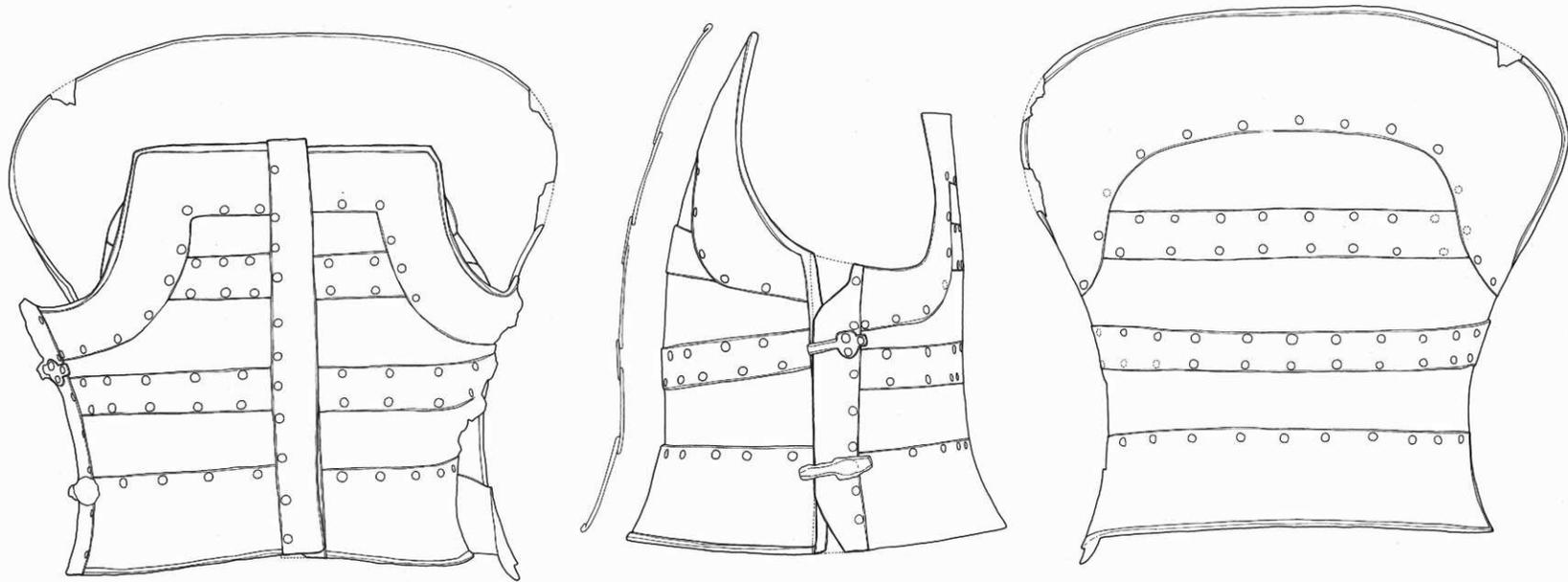
全長89.4cm、刃部長72cm、刃部幅3.8cm、刃部厚1cm、茎幅1.8~2.3cm、茎厚0.7~1.0cmを計る。目釘穴は2個である。刃部は若干内反りしている。闊は斜めに切り落とされ、南棺出土の鉄刀と共通しているが、茎に凹状の切り込みはない。木質部の遺存状況は良好であるが、鉄剣でみられたような刻線状の凹線は認められない。また、



第12图 4号墳北棺出土鉄鏃・鉄鏃・鉄鏃・鉄短剣・鉄劍実測図



第13图 4号填南棺·北棺出土铁刀·铁剑实测图



第14図 4号墳北棺出土短甲実測図（縮尺3分の1）

表 6

No	全長	刃部幅	袋部長	袋部径
1	32.3	2.0	15.6	3
2	21.1以上	1.8	11.7	3

(単位cm)

茎の背の部分には布の痕跡が良く残っている。これは南棺出土の鉄刀にも認められたところである。

さて、ここで、南棺及び北棺出土の鉄刀及び鉄剣に共通して認められた刃部及び茎の刻線状の凹線、あるいは茎の背の部分の布痕について考えられるところを若干記述しておくこととする。

まず、これらの痕跡は、茎に装着する把との関連が非常に深いものと考えられる。把が木製であることは、茎に木質部が良く残っていることから明かである。木製の把を茎に装着する場合、把木に茎の形を彫り込むわけであるが、奈良県布留遺跡から多量に出土した木製の刀装具を見ると、把には、1本で作るものと、把縁の装具を別の材で作り、組み合わせるものがあり、茎の入る部分は溝を彫っている。特に、刀の場合、刀の峰側から溝が彫り込まれていると言われる。この事例から、当古墳出土の鉄刀には、ともに茎の峰側に当たる部分のみ布痕が認められるのであり、従って、把木に茎の幅の分だけ峰側に溝が彫られ、茎をこの溝に挟み込み、目釘を打ち込んだ後、糸で繋ぎ合わせたのではないかと考えることが出来る。すなわち、茎に把木を合わせ、目釘を入れた後、把の表面を糸で繋ぎかして把を完成させるのが一般的であるが、溝に茎を挟み込む場合、把木の表面に繋ぎかされる糸は、茎の峰にのみ直接接するのであるから、茎の峰側にのみ布痕が認められるのはこのためであり、鉄剣に布痕が認められないのは、把木の彫り込みが茎全体を覆う形で成されたためであろう。鉄刀と鉄剣とで把の着装法の相違の知れる一事例とすることが出来るのであろう。

次に、鉄刀と鉄剣に共通して認められる刻線状の凹線については、刃部、茎の両方に認められるものと、どちらか一方のみに認められるものがある。両者に共通するのは、何れも開から2cm前後の位置に残っていることである。これは把及び鞘の着装に関係があるものと思われるが、特に、刃部に残る凹線は把木が一部刃部に及ぶためであり、把と鞘との境界部分が両木質部の切れ目となり、これが刻線状に残ったものと考えることが出来る。茎に残るものについては同様には考えがたい。北棺出土の鉄剣については、茎と刃部の両方に刻線状の痕跡が認められるが、その間隔は4.4cmである。把の構造に関して、鹿角製装具の場合では、把頭、把元、鞘口装具で、誇張したエ字形の形式が多く、剣の装具に用いられているが、この場合、把元、鞘口装具などが別々に作りだされていると考えられるのである。このことから、茎と刃部の両方に残る刻線状痕は、把が、少なくとも、把縁の装具を別の材で作り、組み合わせた結果生じたものと見ることが出来るであろう。

#### V. 鉾 (第12図)

南棺の左右肩部で各々1本ずつ出土しているが、ともに、刃部の横断面は菱形で、袋部は円形である。両者の計測値は次表6の通りである。

#### VI. 短甲 (第14図)

南棺出土のものと同じ形式の右胴開閉式横割板鉄留式の短甲である。前胴高36cm、後胴高43.9cm、胴前後径32cm、胴左右径34.6cmで、規模も南棺出土のものと同様である。前後胴とも7段で、押し付け板、地板、裾板が後胴と左前胴とを別々に作り、鉄留めされている点も同様である。南棺のもの異なる点は、押し付け板の上縁が革紐覆輪ではなく、外方へ鉄板を折り返していることである。裾板が鉄板を外方へ折り返されている点は南棺のものと同じである。地板の幅は、7.3~8.7cmで、上下端を下重ねにしている。帯金は3.4~6.4cm幅となっている。右前胴が蝶番で後胴に取り付けてある点も南棺のものと同様である。

#### 4. 年代

古墳の年代を決定する資料としては土器類が極めて有効であるが、当古墳の場合、棺内から土器類が出土しておらず、南棺の棺の上部からのみ出土しているのにすぎない。このうち須恵器の壺は、墳丘の裾部から出土したものと接合でき、1個体分として図上復元できた。さて、これらの土器類が本来的に当古墳に伴うものであるのかどうか問題になろう。長山古墳群においては、他の古墳においても須恵器類が1~2個体分程度が棺の上部より出土している。また、近江の湖北地方においては、浅井町雲雀山2号墳<sup>⑤</sup>で、簡略化された竪穴式石室の上部に、人為的に破砕された状態で多量の須恵器類が出土している。高月町涌出山古墳<sup>⑥</sup>では、略式の竪穴式石室の上部に礫被覆が成されていたが、この上面で、形象埴輪と共に須恵器の壺と壺が出土している。さらに、余呉町鉛練古墳<sup>⑦</sup>でも、直葬された木棺内に、須恵器の杯、器台などが、棺上部に置かれていたものが、棺の腐朽により棺内に下落したような状態で出土している。これらの諸古墳は、出土した須恵器類の形式が何れも近似したものであり、湖北地方で最古式の横穴式石室を持つ四郷崎古墳より先行するものである。従って、横穴式石室が採用される直前までの、少なくとも一時期の葬法として、棺の上部に土器類を供献する風習のあったことが想定できるであろう。当古墳出土の須恵器類もこれら諸古墳のものに近い形式のものであるところから、古墳の年代を考える資料として有効なものであるとすることができよう。

さて、復元できた須恵器の壺は、直口型のもので、その形状については大阪府陶色古窯跡群<sup>⑧</sup>に類品を見出すことが出来る。また、和歌山県陵山古墳出土のものを標識とする数塚式<sup>⑨</sup>の直口壺が、体部の波状文を欠くだけで良く似ている。湖北地方の諸古墳のものと比較すると、現在のところ最古式と考えられる横穴式石室を持つ四郷崎古墳の1類とした須恵器類には明らかに先行するものである。横穴式石室採用以前のものとしては、雲雀山2号墳、涌出山古墳、鉛練古墳、余呉町上ノ山7号墳<sup>⑩</sup>などの出土須恵器が知られている。何れも当古墳と同形態の壺は出土していないが、鉛練古墳の器台に、突帯、回線文、波状文などの施文法に類似点が見られる。また、涌出山古墳の壺も非常に良く似た体部形態が伺え、また、施文法にも共通性がある。雲雀山2号墳からは短脚の一段透かしのある有蓋高杯が出土しているが、これは鉛練古墳のものに近い。上ノ山7号墳からは杯身と蓋が出土しているが、鉛練古墳や雲雀山2号墳のものより後出である。以上から、当古墳の須恵器類は、上ノ山7号墳に先行し、雲雀山2号墳、涌出山古墳、鉛練古墳などに近い時期のものと考えられる。

須恵器類以外のものと考えてみると、短甲は、南棺のものが、押し付け板が革紐覆輪であるのに対し、北棺のものは鉄板端を外側へ折り返したものとなっている。これは鉄覆輪を簡略化した手法と言われる<sup>⑪</sup>。短甲は雲雀山2号墳からも出土しているが、ここでは、押し付け板、裾板とも革紐の覆輪であり、形式的にも右前副閉閉式三角板鉋留め式であり、当古墳より古式のものである。鉄鏝についても、雲雀山2号墳からは、屈膝式長革鏝が出土していて、大阪府古市古墳群中の黒塚山古墳や藤の森古墳などとの共通点が指摘されている<sup>⑫</sup>。このように、鉄鏝や短甲でみれば、当古墳は雲雀山2号墳に対しては後出的である。

以上から、当古墳は上ノ山7号墳に先行し、雲雀山2号墳より後出である要素が強いと言える。かつて、湖北地方の横穴式石室を6期に区分したことがある<sup>⑬</sup>。約100年間を6期に区分したのであって、最古式の四郷崎古墳を6世紀初頭に置いた。現在のところ、雲雀山2号墳・長山4号墳・涌出山古墳・上ノ山7号墳・四郷崎古墳の編年序列が考えられるのであって、この間の時間的な流れがスムーズとするなら、上ノ山7号墳は5世紀末頃に置けるのであり、当古墳はこれより須恵器の1形式分先行した時期のものとする事ができよう。

註

- ①. 大阪府弁天山C1号墳では、「墓石列は円く配列されているが、同一円周上にあるのではなくて、5m内外の長さをもって区切ることが出来るような弧が連接されている。この弧は恐らく墓石の積上げ作業の単位を示していると推定される。たとえばⅡ段斜面の墓石をみると、くびれ部から5m1単位の範囲に使用されている墓石は径15~20cmのものが多いのに対し、つぎの1単位のものは10~15cmのものが多く用いられているという違いがある」と言われる(原口正三・西谷正「弁天山C1号墳」(『弁天山古墳群の調査』大阪府文化財調査報告 第17輯 昭和42年))。
- ②. 置田雅昭「天理市布留遺跡出土の木製刀剣装具」(『日本考古学協会第47回總會資料』昭和56年)
- ③. 大塚初重「大和政権の形成—武器武具の発達—」(『世界考古学大系』3 日本Ⅲ 昭和34年)
- ④. 前掲書③
- ⑤. 直木孝次郎・藤原光輝「滋賀県東浅井郡湯田村雲雀山古墳群調査報告」(昭和28年)
- ⑥. 昭和53年度に滋賀県教育委員会によって調査されている。
- ⑦. 田中勝弘「北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書」Ⅳ (昭和53年)
- ⑧. 鬼柳彰「四郷崎古墳」(『北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書』Ⅱ 昭和50年)
- ⑨. 田辺昭三「陶器古窯跡群Ⅰ」(昭和41年)
- ⑩. 権崎彰一「須恵器編年図」(『日本の考古学』Ⅴ 昭和42年)
- ⑪. 田中勝弘「上ノ山古墳群」(『北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書』Ⅲ 昭和51年)
- ⑫. 小林謙一「甲冑製作技術の変遷と人工の系統(上)」(『考古学研究』第20巻第4号 昭和49年)
- ⑬. 野上丈助「古墳時代における甲冑の変遷とその技術史的意義」(『考古学研究』第14巻第4号 昭和43年)
- ⑭. 田中勝弘「湖北地方の後期古墳の編年—最近の調査例を中心に—」(『近江地方史研究』第3巻 昭和51年)

## 第3章 黒田長山古墳群の調査

### 1. 1号墳

#### 〔位置〕

1号墳は西にのびる第1尾根の丘陵頂部に立地し、見晴らしのよい位置にある。4号墳の西約20mの所にあり、7号墳とは溝をはさんで隣接している。

#### 〔墳丘〕(第15図)

調査前の墳丘は、直径約8mを測り、墳丘高は東裾と南裾からは土砂流入のため40cm程、北裾と西裾からは2m程であった。

発掘調査の結果、墳丘が東西径11m、南北径11.2mの円墳になった。封土については、主体部の東側・南側で50cm、北側で1.1m、西側で90cmが残存していた。封土の状況は、墳丘断面図(第16図)によって判断するが、まず簡単に整形した地山の緩斜面に、ほぼ水平に土を積み、墳丘を形成していることが知られる。

また、周溝は完周せず墳丘背後の東側に周溝がめぐるとい形になっている。西側の溝は、7号墳造営時に作られたもので、当初はなかったと思われる。

#### 〔埋葬施設〕(第19図)

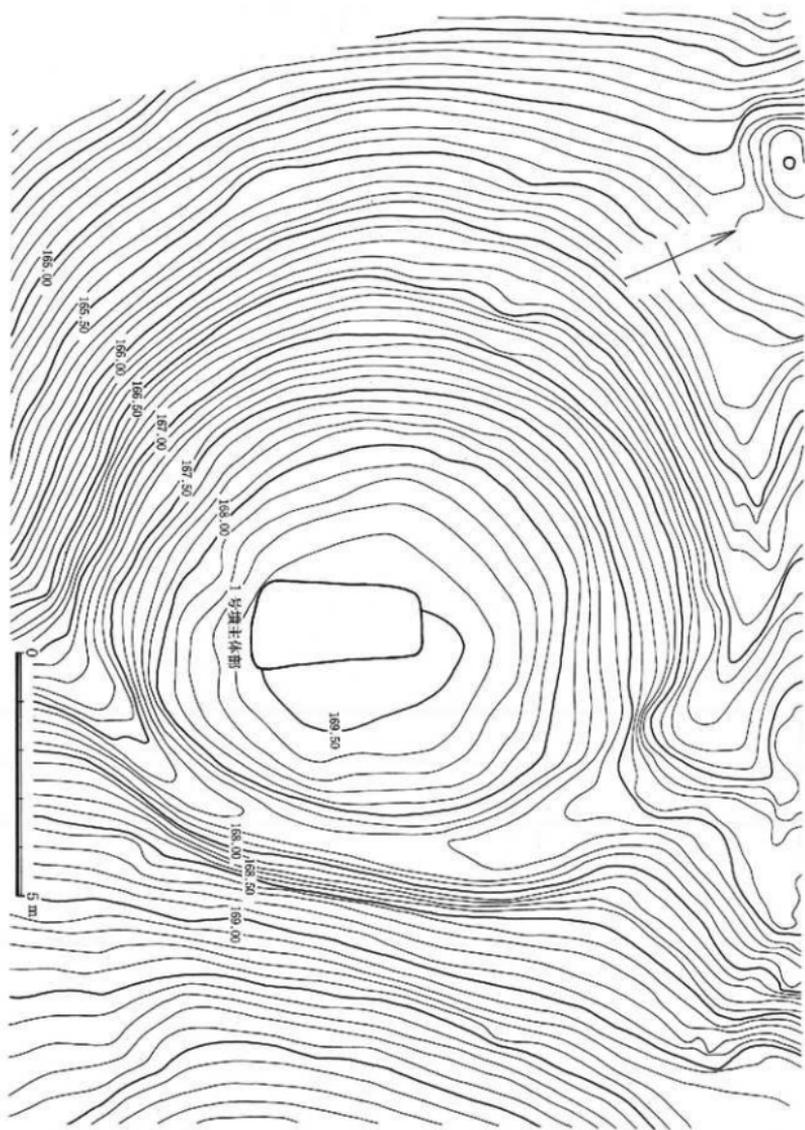
現地表面より約40cmの表土を除去すると墳丘封土となり、この面において墓壇を確認した。墓壇は墳丘中央部よりやや南よりに位置し、主軸を北北東に配している。全長3.5m、北側幅1.25m、南側幅1.75mの隅丸方形で、残存深度70cmであった。掘り下げると主体部が確認でき、平底で両壁が直線的であることから、箱形の組合式木棺になると思われる。全長1.9m、北側幅35cm、南側36cm、残存の深さ45cmであった。棺底の高さは、南側が北側に比べて5cm程高くなっており、頭部を南側に安置していたものと考えられる。また、墓壇内にベンガラ散布がみられた。

遺物等の出土状況からみて木棺の埋葬方法は、封土を盛った後墳丘中央部に棺より広めの墓壇を穿ち、底に約10cmの敷土をし、そのほぼ中央に棺をすえている。棺外側に約10cmの埋土をした段階で鉄鎌を置きベンガラを散布する。さらに埋土し棺をすっきり密封した後、棺の中央に匙を置いたものである。

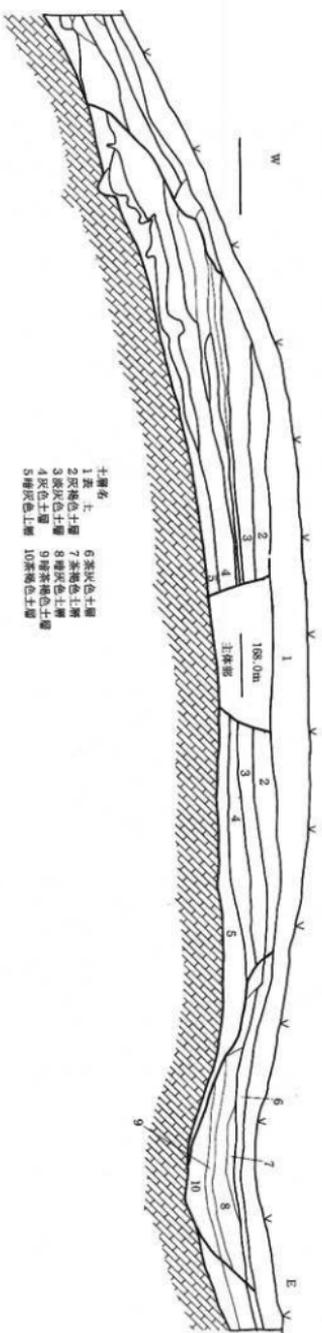
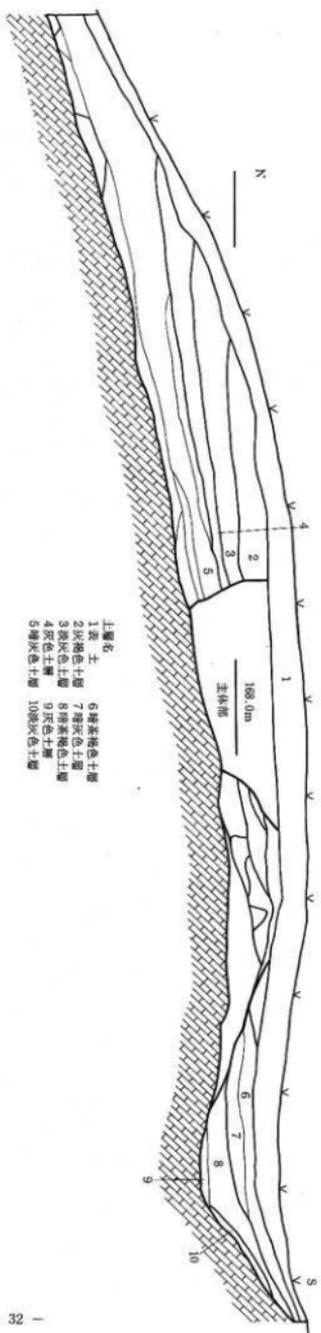
#### 〔出土遺物〕

1号墳検出に係わる遺物は、木棺中央上面に須恵器匙1点、墓壇内南東部分で土師器片5点を検出した。土師器片は同一個体であると思われるが、器形は不明である。木棺内では、西壁に沿って鉄刀2点が刃部分を向き合わせ、刃先をそれぞれ反対にして置かれてあった。また、刀子1点が頭部にあたると思われる南側端部分に、刃先を東に向けて置かれてあった木棺外では、西側部分で、鉄鎌38本以上が木棺にそって縦に並べた状態で検出された。矢柄等の木質部はほとんど形が残っていなかった。北側では、刀子1点が刃先を南西に向けた状態で検出された。また、調査の域終段階で、封土を除去したところ、地山上で、U字型の鉄製鋤先が3点に分かれ出土した。古墳造営時に使用された道具の一部であろうと推定される。

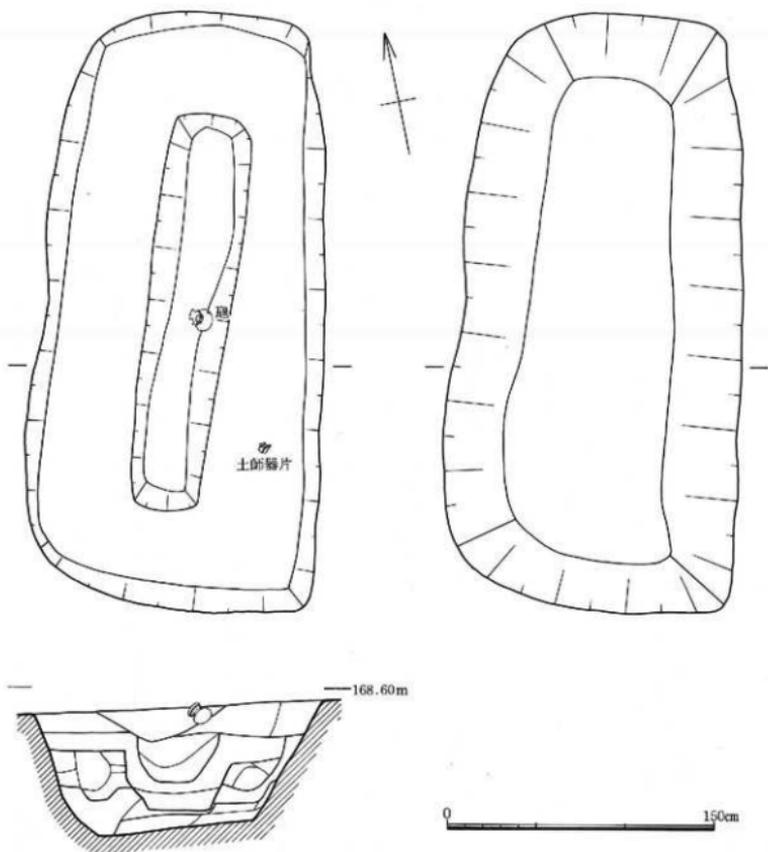
匙(第18図) 口径9.35cm、器高10.8cm、口縁部は「逆八の字」状に外上方に開き、口縁部と口頸部との境に断面三角形の段をもつ。段上方の口縁部外面には5本を1単位とする櫛状波状文を巡らし、口縁端部は丸くおさまる。頸部はよくしまり、胴部最大径は中程やや上方にくる。外面上方より内面下方にむけて円孔が穿たれてい



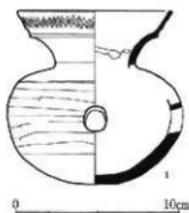
第15图 1号墳平面图



第16区 1号墳断面図



第17図 埋葬施設上部土器出土状況及び掘方



第18図 1号墳出土土器

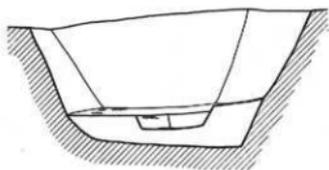
る。口縁部は横ナデ調整、胴部は回転斲削りを行い、底部は丁寧なナデにより仕上げられている。口縁部内外面及び胴部上方に自然軸が付着。色調淡灰色、胎土精良、焼成硬。時期は陶器編年のI型式で2・3段階に比定できる。

鉄刀(第21図左) 全長76.5cm、刀身61.1cm、茎長15.4cm、幅2.7cmの直刀である。中径には一ヶ所目釘穴がある。茎部には顕著な木質の錆着が見うけられ、木製把であろう。

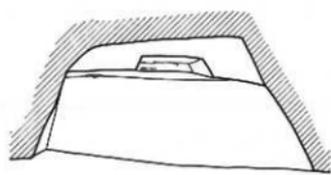
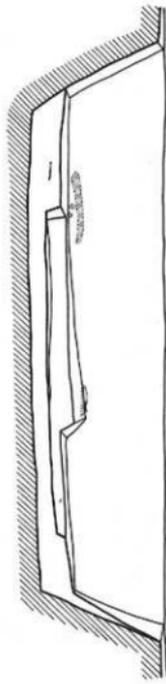
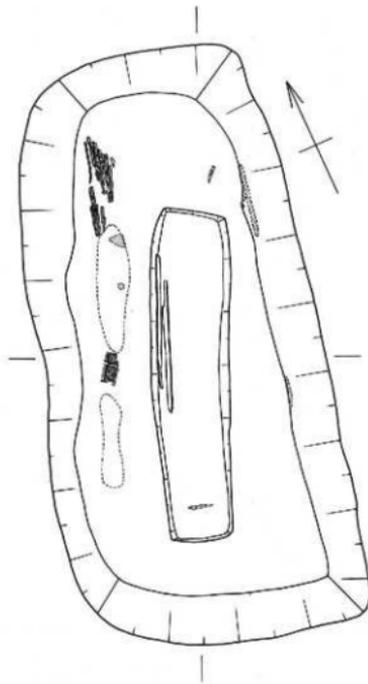
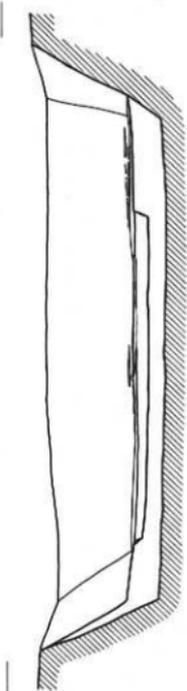
鉄刀(第21図右) 全長75.5cm、刀身63.5cm、幅2.7cmの直刀である。茎長は12cmで、木質の錆着が見うけられる。

刀子(1) 主体部より検出され、背部の現存値が13cm、刀部の現存値が9cm、

—168.70m



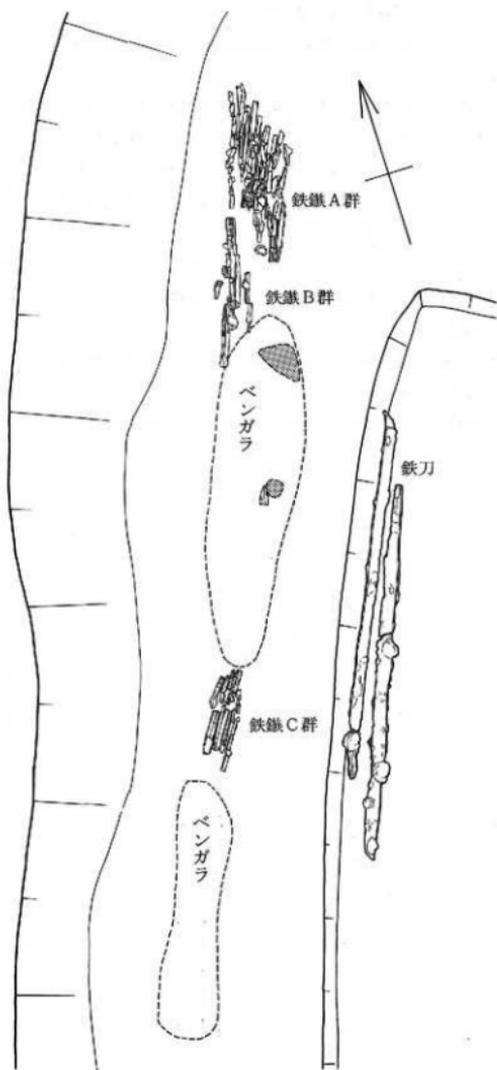
—168.70m



—168.70m

0 100 200cm

第19图 1号墳主体部



第20図 1号墳鉄器出土状況

某部の現存値が3cmである。厚さは背部で2.5mmを測る。

刀子(2) 墓壇内より出土し、背部が9.2cm、刀部が6.5cm、某部が1.9cmである。厚さは背部で3.5cmを測る。

鉄鏃(第22図)、A、B、C群に別けて取り上げ、A群は19本以上で形式としては三角形式1本、片刃矢式15本で他は不明である。B群は8本が確認され、片刃矢式が7本で他の1本は不明である。C群は11本で、10本が片刃矢式で他は不明である。

鉄製鋤先(3) 刃部中央部の厚みは最大値6mmで、断面をY字形に造ってある。刃部の端では厚みの最大値4mmで、断面Y字形。

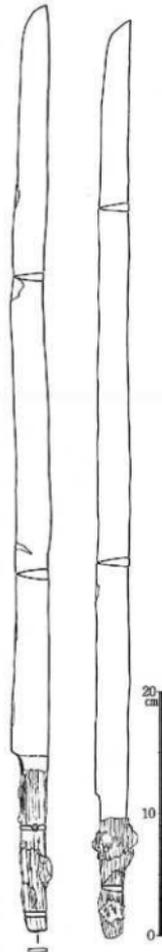
[赤色顔料の同定]

墓壇内で検出された赤色顔料について、水銀朱かベンガラ(酸化第二鉄)かどうか識別するため、分析を依頼した。

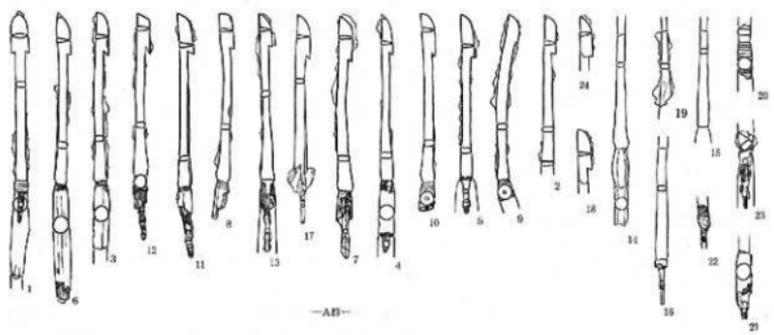
分析方法は、2カ所で採取した粉末状ないし固形状で試料を、マイラーシートに封入し、蛍光X線分析装置による非破壊による分析を行った。

分析結果は、蛍光線分析により、試料2点とも水銀(Hg)の元素ピークがほとんどなく、こそで鉄(Fe)の元素ピークが高くあらわれた。

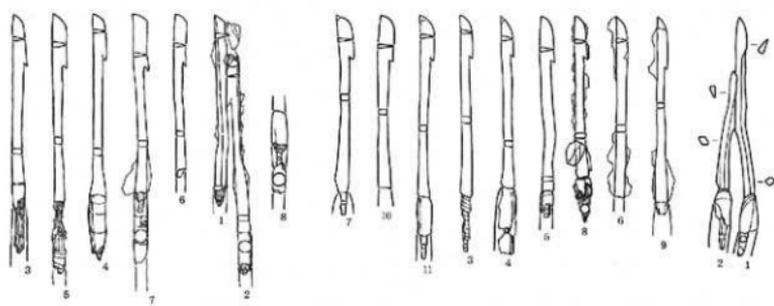
これらの赤色顔料は、酸化鉄によるベンガラと同定された。



第21図 1号墳出土鉄刀

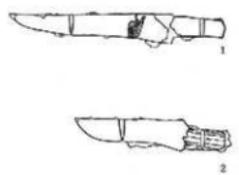
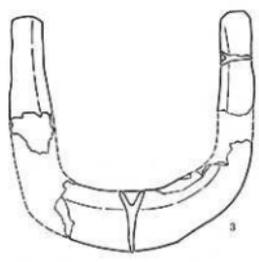


-AII-



-BII-

-CII-



第22图 1号墳出土鉄器類

表7 1号墳A群その1 (単位mm)

No	現在長	鎌長	刃長	刀厚	矢柄径	形式
1	164.9	130.1	24.1	3.0	9.4	三角形形式
2	93.5	-	-	3.0	-	片刃矢式
3	146.0	146.0	22.9	2.4	8.2	#
4	145.2	-	-	2.4	9.3	#
5	123.1	-	26.3	2.7	8.9	#
6	178.4	-	-	3.0	9.9	#
7	152.9	152.9	25.9	3.1	9.3	#
8	124.0	124.0	27.0	2.1	-	#
9	110.5	-	-	-	9.8	
10	123.1	-	27.2	2.5	8.2	#
11	150.9	150.9	28.3	2.1	9.3	#
12	141.2	141.2	24.9	2.6	7.8	#
13	148.1	148.1	20.0	2.8	9.8	#
14	116.3	-	-	-	9.0	不明
15	60.4	-	-	-	-	#
16	98.3	-	-	-	7.1	#
17	131.1	131.1	27.8	2.8	-	片刃矢式
18	33.9	-	24.7	2.8	-	#
19	47.5	-	-	-	8.8	不明
20	34.2	-	-	-	8.8	#
21	43.6	-	-	-	9.0	#
22	22.9	-	-	-	6.9	#
23	47.3	-	-	-	8.1	#
24	25.7	-	25.1	2.2	-	片刃矢式

表-8 1号墳B群

(単位mm)

No	現在長	鎌長	刃長	刀厚	矢柄径	形式
1 2	左120.1 右137.2	左120.1 右137.2	左- 右32.0	左3.6 右2.1	左8.1 右8.1	片刃矢式
3	148.2	148.2	31.2	3.2	7.9	#
4	152.9	152.9	28.9	2.4	10.5	#
5	161.5	-	34.4	3.2	8.0	#
6	101.1	-	32.0	2.9	-	#
7	155.8	-	36.8	3.0	8.5	#
8	51.2	-	-	-	8.4	不明

表-9 1号墳C群

(単位mm)

No	現在長	鎌長	刃長	刀厚	矢柄径	形式
1 2	左111.3 右149.6	左111.3 右149.6	左- 右18.4	左3.4 右3.8	左11.0 右7.9	左不明 右片刃矢式
3	147.4	147.4	26.5	3.2	5.1	片刃矢式
4	146.7	-	-	3.5	5.1	片刃矢式
5	124.9	124.9	23.3	3.0	7.9	#
6	116.2	-	-	-	-	#
7	123.1	-	-	3.0	-	#
8	129.2	129.2	27.4	2.8	10.0	#
9	114.4	-	27.4	2.8	10.0	#
10	108.5	-	28.9	3.0	-	#
11	149.0	-	-	2.8	9.4	#

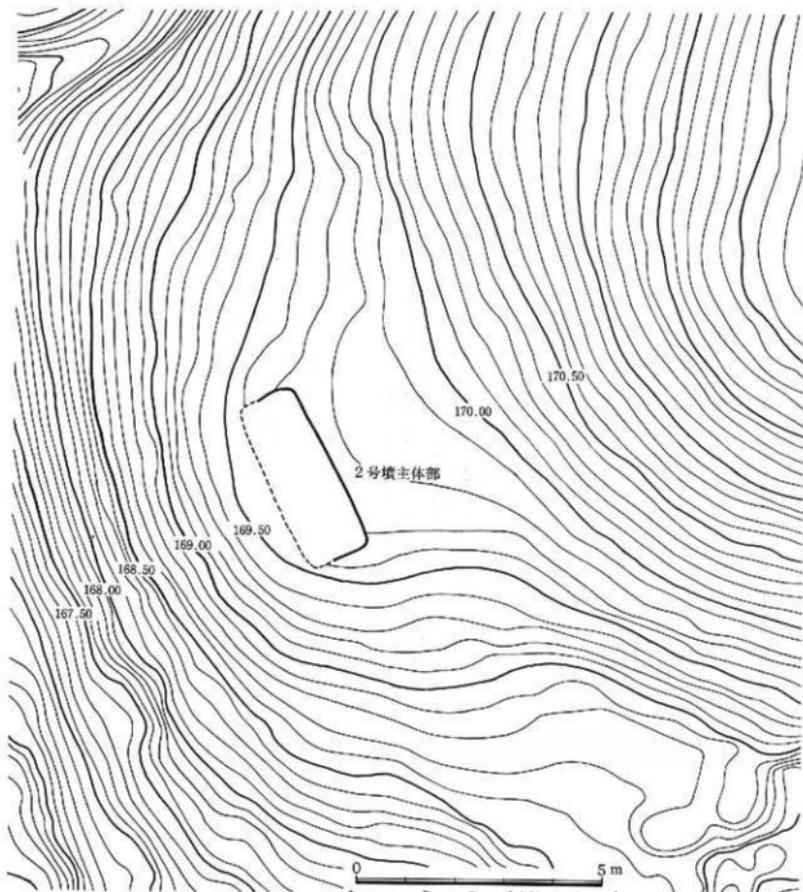
## 2. 2号墳

〔位置〕

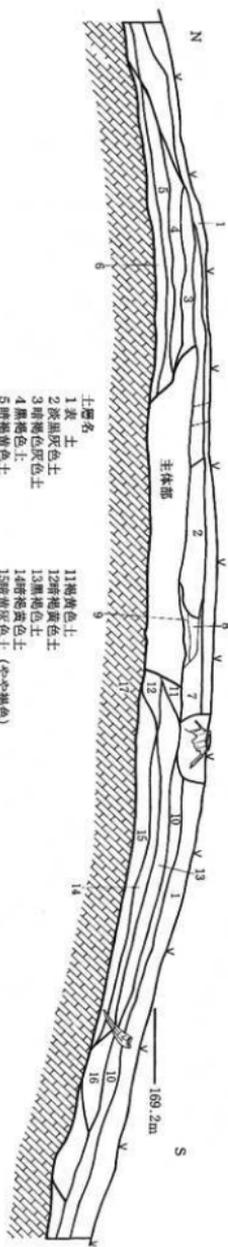
2号墳は南にのびる第2尾根のつけ根部分に立地しており、1号墳の南側3号墳の西隣に位置する。

〔墳丘〕(第23図)

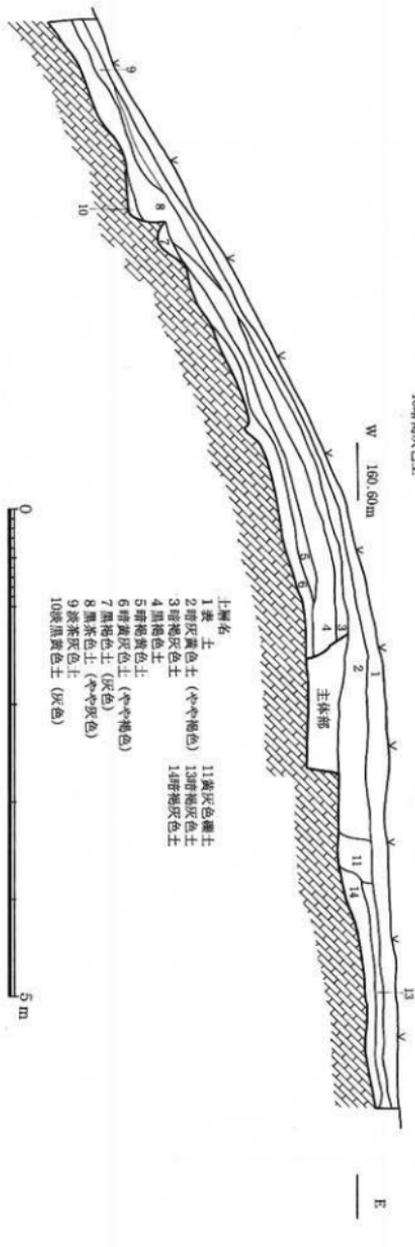
調査前の墳丘は、直径8mの円墳で、墳丘高は、北裾から20cm、南裾から70cm、西裾から1.2mを測った。東裾は土砂流入のため、墳頂部より逆に30cm程高位を示した。



第23図 2号墳平面図



- 土層名
- 1 表土
  - 2 深褐色灰色土
  - 3 暗褐色灰色土
  - 4 黑褐色土
  - 5 暗褐色灰土
  - 6 暗褐色灰土 (含砂)
  - 7 暗褐色灰土 (含砂)
  - 8 黑灰褐色土
  - 9 黑灰褐色土 (含砂)
  - 10 暗褐色灰土
  - 11 暗黄色土
  - 12 暗褐色灰土
  - 13 黑褐色土
  - 14 暗褐色灰土
  - 15 暗褐色灰土 (含砂)
  - 16 木根砂?
  - 17 地山 灰黄色砂壤土



- 土層名
- 1 表土
  - 2 暗灰褐色土 (含砂)
  - 3 暗褐色灰土
  - 4 黑褐色土
  - 5 暗褐色灰土
  - 6 暗褐色灰土 (含砂)
  - 7 黑褐色土 (灰色)
  - 8 黑褐色土 (含砂)
  - 9 深灰褐色土
  - 10 暗灰褐色土 (灰色)
  - 11 灰黄色壤土
  - 13 暗褐色灰土
  - 14 暗褐色灰土



第24图 2号横断面图

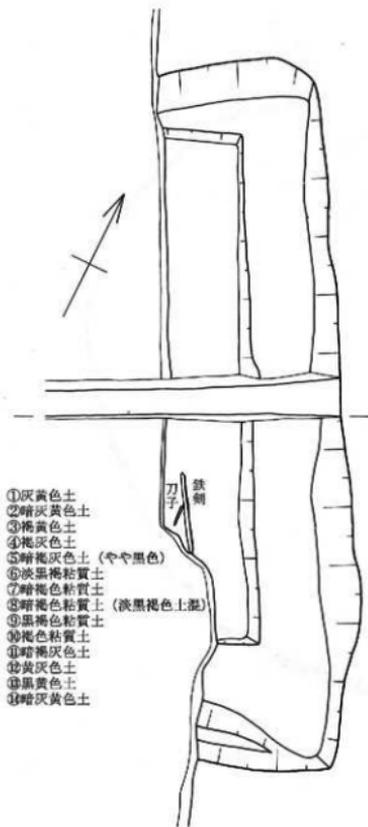
後世の堆積土、流出土を除去した結果、南北約10m、東西径は、東側墳丘部分が削平を受けているため東裾が明確にはわからないが、復原すれば10m前後になると思われる。封土については、主体部の北側で36cm、南側で40cm、西側で45cm残っており、東側は削平をうけ残存していなかった。墳丘の築成は、地山整形ののち封土をほぼ水平にならしながら盛りあげることによって行われている。但し東側は地形を利用しているため、封土の量も少ないと考えられる。周溝については、認められなかった。

〔埋葬施設〕(第25図)

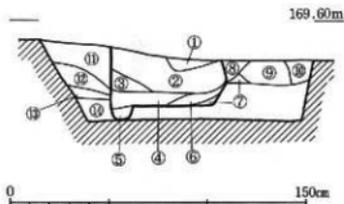
現地表面から約40cm程の堆積土をとり除くと、墳丘封土があらわれ、この面において墓壇の存在を確認できた。墓壇はほぼ墳丘中央部に位置し、主軸を北西に配している。西側半分が掘削をうけているため棺と墓壇の全容は知り得ないが、断面図より復原すると、墓壇は全長3.5m、幅1.4mを測る長方形になる。残存深度は40cm前後で、東側は地山を切り込んで形成されている。墓壇内には、組合式木棺を安置している。棺の主軸方向は、墓壇主軸とほぼ同じである。

遺物出土状況からみた埋葬方法は、封土を盛った後広めの墓壇を穿ち、その中央に棺をすえる。棺を密封した後、上面に須恵器の甕を小片砕いたものを撒く。さらに土を盛り墳丘を形成する。

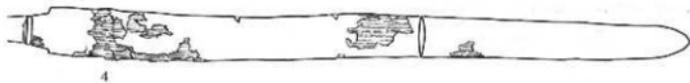
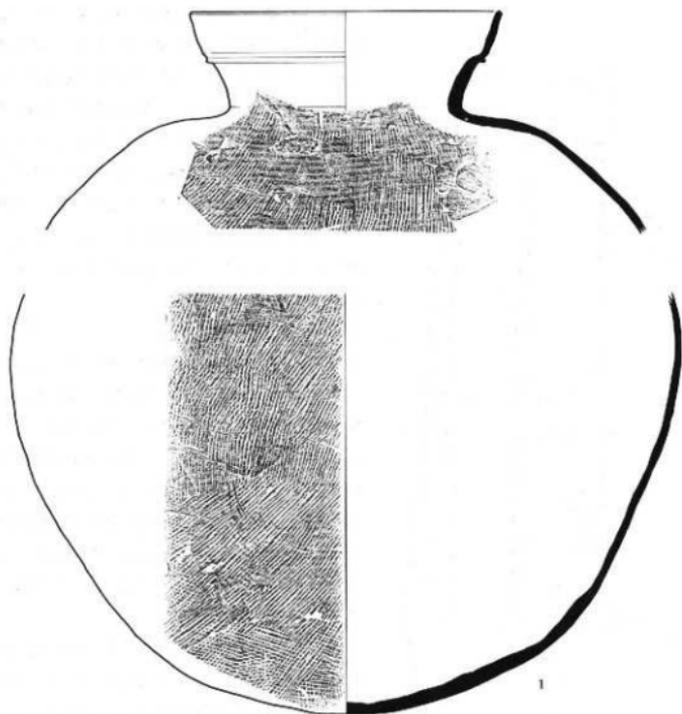
主体部も西側半分が削除されているが、復原すると、全長2.6m、幅55cm、深さは断面で知られる限りで30cmを測る。頭部の位置は不明である。



- ① 灰黄色土
- ② 暗灰黄色土
- ③ 稀黄色土
- ④ 稀灰色土
- ⑤ 暗稀灰色土 (やや黒色)
- ⑥ 淡黒褐色粘質土
- ⑦ 暗褐色粘質土
- ⑧ 暗褐色粘質土 (淡黒褐色土混)
- ⑨ 黒褐色粘質土
- ⑩ 褐色粘質土
- ⑪ 暗褐色土
- ⑫ 黄灰色土
- ⑬ 暗黄灰色土



第25図 2号墳主体部



第26图 2号墳出土遺物

〔出土遺物〕（第26図）

2号墳検出に伴う遺物は、墓壙上面と木棺内において出土した。

墓壙上面では、復原すると1個体になる須恵器の甕の小破片がばら撒かれた状態で検出された。意識的にまかれたものであり、埋葬形態の一端を示すと考えられる。また、土師器の壺も出土した。

棺内には、南半分の中央に鉄剣1点、刀子1点が埋葬されていた。刃先は北西に向いている。

壺（1） 口径18.9cm、口縁部はやや外傾ぎみに外上方に開き、口縁端部は丸くおさまる。口縁部と口頸部との境に断面三角形の段がつく。胴部最大径に比べて口径は小さい。口縁部内外面は横ナデ調整、胴部外面は平行叩き、内面は丁寧にスリ消されている。色調淡青灰色、胎土精良、焼成硬。時期は陶色編年のI型式2・3段階に比定できる。

壺（2） 頸部のみであり、上方に櫛描波状文が施される。内外面共に横ナデ調整。色調淡灰色、胎土精良、焼成硬。時期は陶色編年のI型式2・3段階比定できる。

壺（3） 口径10cm、口縁部はやや外反ぎみに立ち上り、口縁端部は丸くおさまる。口径と頸部径がほぼ同じで、胴部は球体で最大径が胴部中程にくる。口縁部内外面は横ナデ調整、胴部外面は刷毛、内面は軽い指おさえ。色調淡茶褐色、胎土1mm位の微砂を含む、焼成硬。時期は布留式の最も新しいものであろう。

鉄剣（4） 現存長41cmを測り、剣部分は39.4cmで、中央部の厚さ4mm、幅2.6cmである。断面は菱形を呈する。剣身部と茎部の間には2.9cmの関節がある。茎部は現存長1.6cm、厚さ3mm、幅1.7cmを測る。剣身部には木質の錆着が見られ、木鞘の残存可能性がある。

刀子（5） 背部現存長10.1cm、刃部現存長5cm、茎部3cmを測り、背部の厚さは3mmである。

### 3. 3号墳

#### 〔位置〕

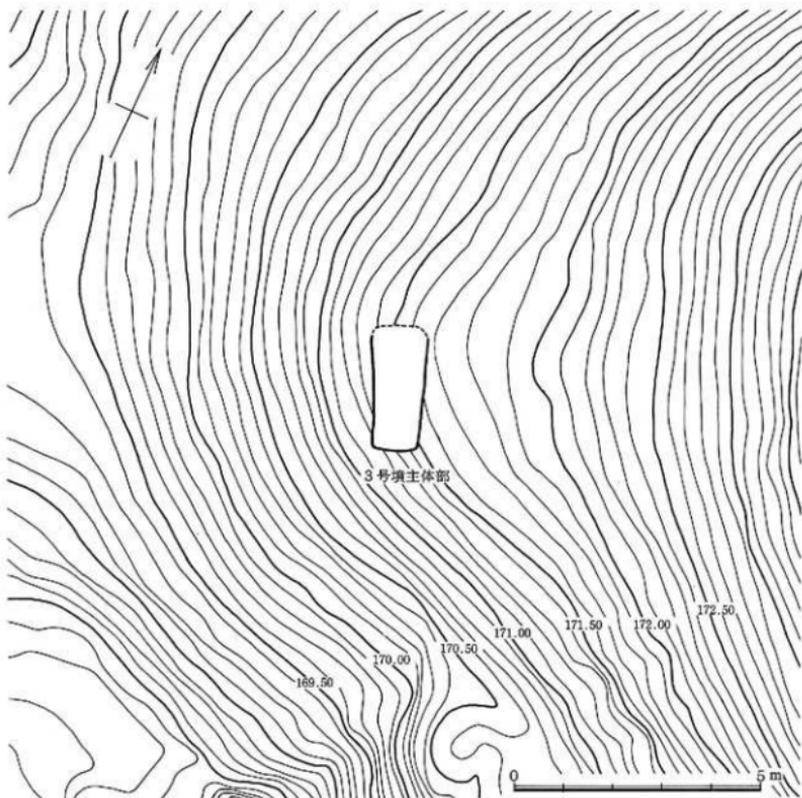
3号墳は1号墳と4号墳との中間にあり、2号墳の東隣に接する。

#### 〔墳丘〕(第27図)

調査前は、直径約10cmの円墳で、墳丘高は、北裾から40cm、西裾から1.3m、南裾から1.0mを測った。東裾は後世の堆積土や流出土のため、墳頂部より逆に70cm程高位を示していた。

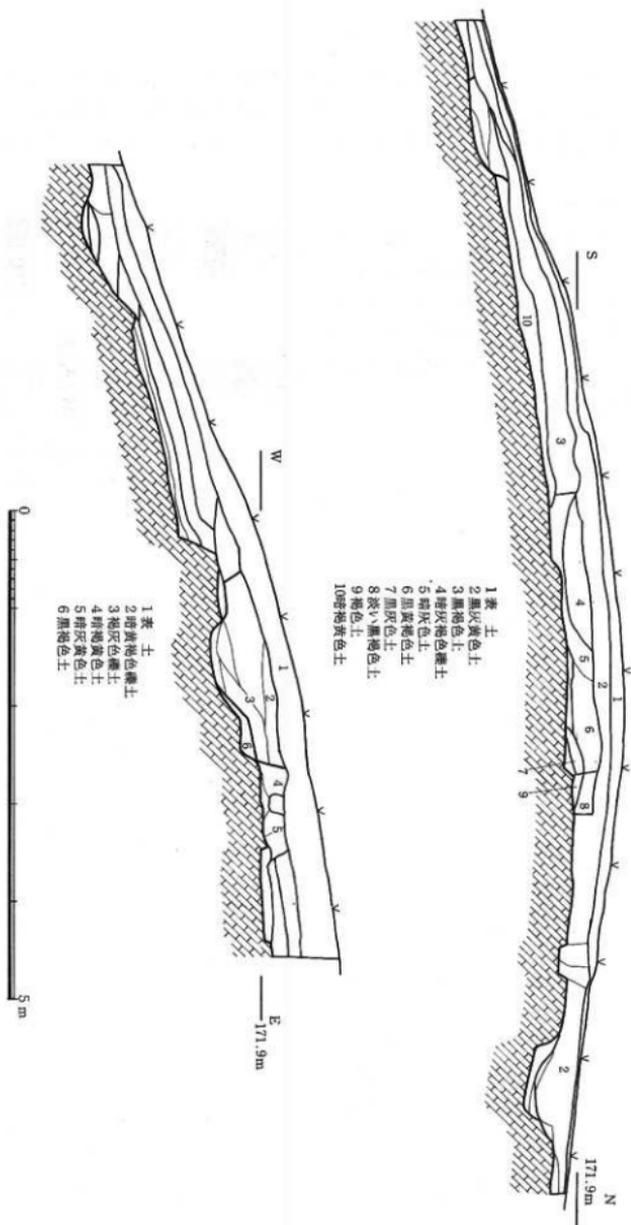
発掘調査の結果、封土のほとんどが削平や流失されているため、墳丘の裾部を明確にすることはできなかった。かろうじて主体部の東側と西側で20cm程の封土を認めたにすぎない。

また、地山を掘り込んで形成された周溝を検出したが、この溝は後で述べるように、3号墳下のA号墓にともなう溝であることがわかり、3号墳には溝の痕跡が認められなかった。



第27図 3号墳平面図

第282圖 3号墳 V・V'号墓横断面圖



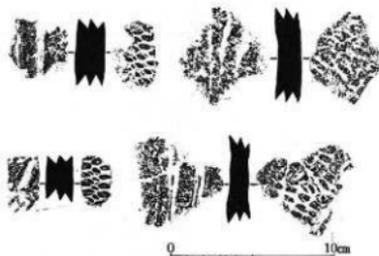
〔埋葬施設〕

検出が難しく地山まで掘り下げてはじめて埋葬施設の存在を確認した。A号墓の主体部の南2mのところに隣接して検出された。断面から判断すると、約20cmの表土下に墓壇の壁が認められる。墓壇幅は約2mで、残存していた長さは2.30mである。中央に窪みが認められるため、ここに棺を置いたと思われる。埋葬方法は、木棺直葬であろう。

〔出土遺物〕(第29図)

埋葬施設内に遺物は残存していず、3号墳検出に係る遺物が出土していないため、時期を明確にしにくい。

他に、封土から縄文土器が出土している。外面に楕円押捺文を施し、内面に縦方向の沈線文が入る。色調淡赤褐色、胎土1mm位の微砂を含む、焼成硬。縄文時代早期の高山寺式である。



第29図 3号墳出土押形文土器

#### 4. 5号墳

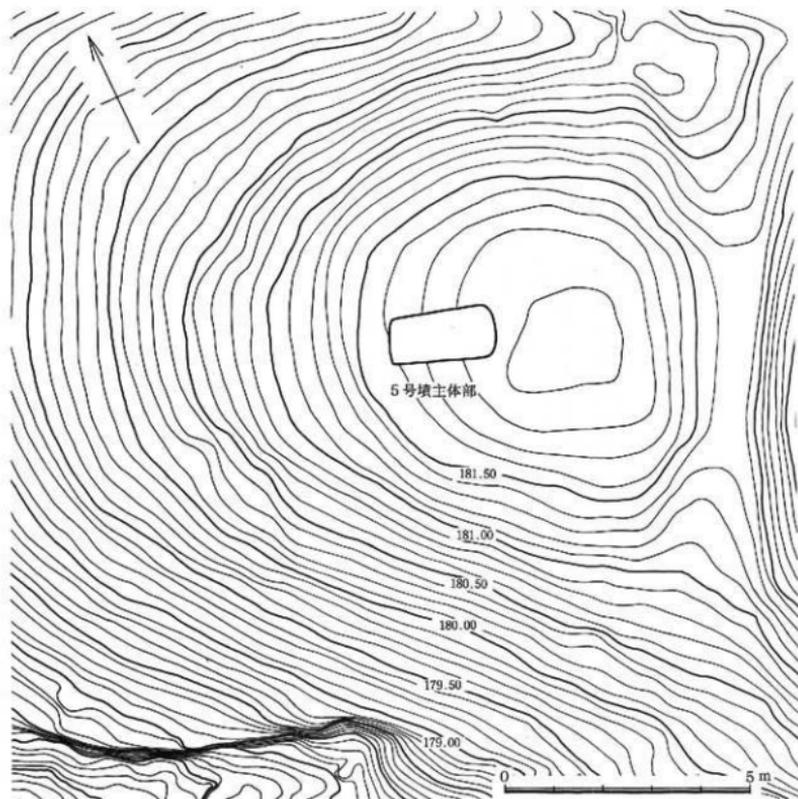
〔位置〕

5号墳は、西にのびる第1尾根に立地しており、6号墳の西35m程の所にあり、西側の4号墳の溝をはさんで隣接している。

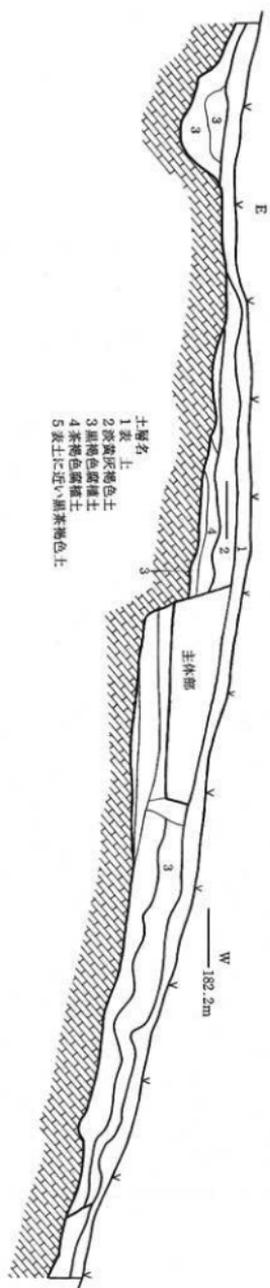
〔墳丘〕(第30図)

調査前の墳丘は、東西径10m、南北径9m、墳丘高は、北裾から70cm、南裾から1.3m、西裾から1.1mを測る。東裾は土砂流出のため、墳頂部より逆に10cm程高くなっている。

発掘調査の結果、墳丘の規模が東西辺10.0m、南北辺10.0mの方墳になった。封土については、主体部の東側で40cm、西側で50cm、北側で60cm、南側で50cmが残存していた。封土の状況は、墳丘断面図(第31図)によって

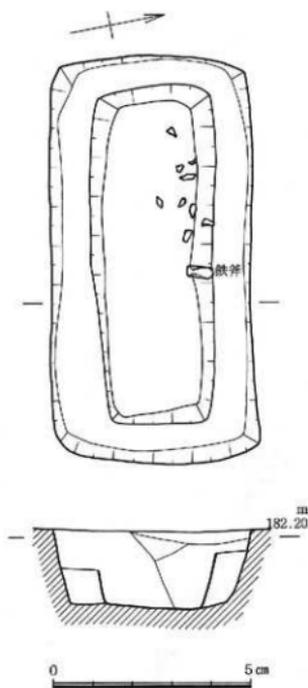


第30図 5号墳平面図



第31图 5号堤断面图





第32図 5号墳主体部

たものである。墓丘内からは、須恵器杯身片1点、土師器高坏片1点、器台になるとと思われる土師器片1点が出土している。東側周溝上面からは、須恵器片3点が出土しているが、時期がかけはなれたものであるため、後世に混じたものであろう。

5号墳検出に係る遺物は、墓壇内上面に無蓋高坏1点、土師器の高坏片1点、棺上に鉄斧1点、墳丘斜面で土師器の高坏1点、東側周溝上面から須恵器杯3点、平瓶1点が出土している。

無蓋高坏(1) 口径14.7cm、脚部径11.35cm、口縁部はやや外反ぎみに直立に近い状態で立ち上り、口縁端部は丸くおさまる。2条の凹線が2ヶ所に巡らされ、その間に6本を1単位とする縞描波状文を施す。杯部は深く中程に1対の把手を貼付ける。脚部はなきだかに開き、脚端部で縁を作り外側に面をもつ。脚部には四方に台形状のすかしが入る。口縁部内外面は比較的丁寧な横ナデ調整、杯底部外面は静止鋭削り、内面は指おさえ後ナデ、脚部すかしには面取りを行う。色調暗灰色、胎土精良、焼成硬。時期は陶色編年1型式2・3段階に比定されよう。

坏(2) 口径12.6cm、器高3.85cm、底部と口縁部との境に明確な稜はつかず、口縁部は外傾ぎみに立ち上がり、口縁端部は丸くおさまる。口縁外面上方及び内面は横ナデ調整、口縁部外面下方及び底部外面は鈍削り、底

判るが、まず簡単に整形を加えたとと思われる地山の緩傾斜面に、ほぼ水平に土を積み、墳丘を形成していることが知られる。

また、周溝は完周せず、墳丘背後に周溝がめぐるとい形になっており、東側に形成されている。地山を掘り切った浅い溝であることが知られる。

#### 〔埋葬施設〕(第32図)

現地表面より約20cmの表土を除去すると、墳丘封土となり、この面において墓壇の存在を確認した。墓壇は墓丘中央部より約2m程西より位置し、主軸を東南東に配している。全長2.2m、東南東幅90cm、西北西幅1.1mを測る隅丸長方形で、残存の深さ約43cmである。墓壇内には、棺上に鉄斧1点を伴った木棺を安置している。棺の主軸方向は、墓壇主軸とほぼ同じである。

遺物出土状況からみて木棺の埋葬方法は、封土を盛った後詰め墓壇を穿ち、その中央に棺をすえている。棺上に鉄斧を置き、さらに埋土した後、棺の西側に須恵器と土師器の高坏を置いたものであろう。

木棺の大きさは、全長1.74m、東南東幅50cm、棺の深さは最もよく残っている所で28cmであった。箱形の組合式木棺になると思われるが、頭部の位置は不明である。

#### 〔出土遺物〕(第33図)

5号墳検出に係る遺物については、墓壇上面に土師器片9点、棺上に鉄斧1点、墓丘内に3点、東側周溝上面に3点を数えた。

墓壇上面の遺物は、須恵器・土師器の高坏で、棺を密封した後上に置いたものと考えられる。鉄斧は、棺上の中央北辺に直角に置いて

部内面はミズビキ形成。色調青灰色、胎土精良、焼成硬。

坏 (3) 口径14.15cm、器高3.95cm、高台径9.5cm、底部と口縁部との境に明確な稜はつかず、外傾ぎみに立ち上る口縁部で、口縁増部は丸くおさまる。口縁部外面及び内面は横ナデ、底部外面は匏削り後ナデ。色調青灰色、胎土精良、焼成硬。

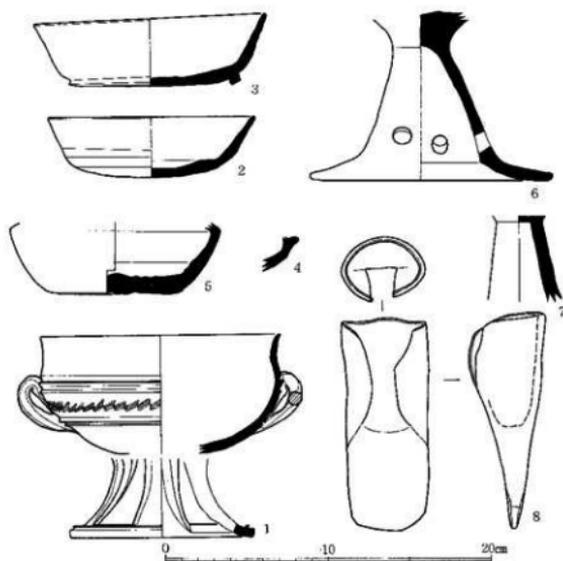
坏 (4) 受部が外上方にのびる。外面中程より下方は匏削りで、他は横ナデ調整。色調淡灰色、胎土精良、焼成硬。

平瓶 (5) 底部径6.55cm、胴部外面は横ナデ調整、底部外面には粘土が付着している。内面はミズビキ形成。色調淡灰色、粘土良、焼成硬。

高坏 (6) 墳丘斜面から出土、底径13.1cm、裾部は大きく開き、端部は丸くおさまる。脚柱部と裾部との境に外上方より内下方にむけて三方に円孔が穿たれている。色調赤褐色、胎土1~2mmの微砂を含む。焼成硬。

高坏 (7) 色調赤褐色、胎土1~2mmの微砂を含む。焼成硬。

鉄斧 (8) 長さは13.3cm、幅5.2cm、刃幅4.7cmを測る。この鉄斧は、鉄板を折り曲げて上半部に袋を作った、鍛造品である。



第33図 5号墳出土遺物

## 5. 6号墳

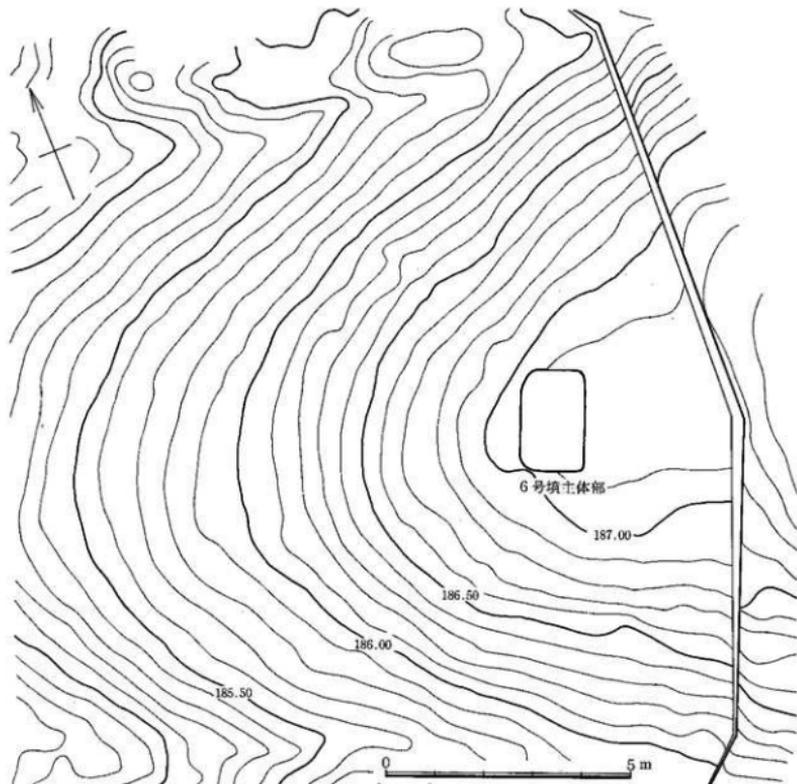
### 〔位置〕

6号墳は、西にのびる第1尾根に立地しており、本調査地区の最も東端、最奥部に位置している。

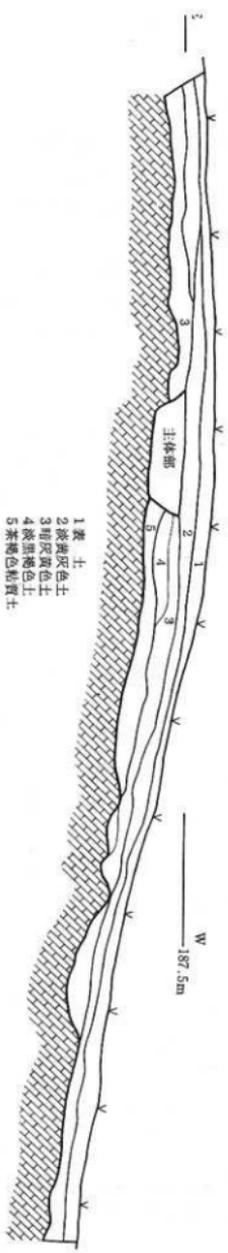
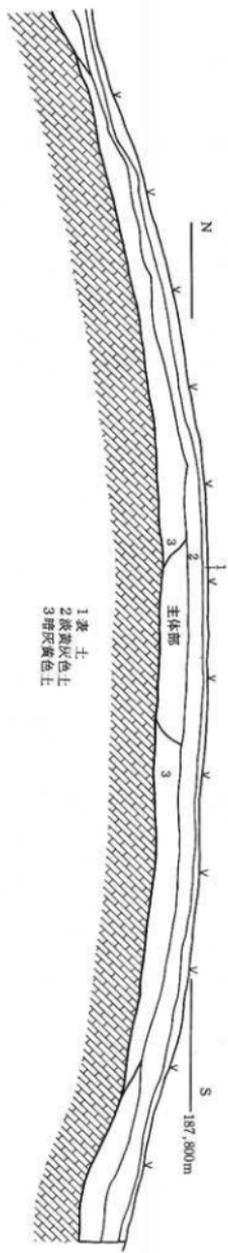
### 〔墳丘〕(第34図)

調査前の墳丘は、東西径10m、南北径8m、墳丘高は、北裾から50cm、南裾から60cm、西裾から90cmを測る。東裾は土砂流入のため、墳頂部と同じ高さを示していた。

発掘調査の結果、墳丘の規模は、南北径10.6mを測るが、東西径は東裾が調査地区外になるため、正確な規模は明らかにできないが、推定9m程になると思われる。封土については、主体部の東側で20cm、西側で40cm、北側で30cm、南側で26cmが残存していた。封土の状況は、墳丘断面図(第35図)によって判るが、まず簡単に整形された地山の緩傾斜面に、ほぼ水平に土を積み、墳丘を形成している。



第34図 6号墳平面図



第35图 6号墳断面图

また、周溝については、調査部分では検出されなかった。

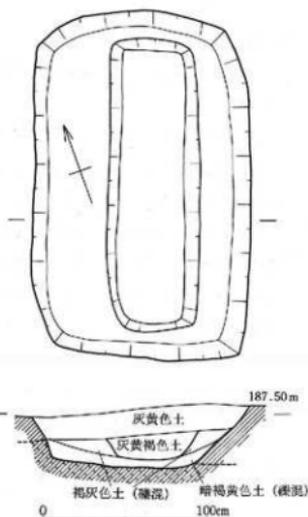
〔埋葬施設〕（第36図）

現地表面より約30cmの後世の堆積土を除去した結果、墳丘封土となり、この面において墓壇の存在を確認した。墓壇はほぼ墳丘中央部に位置し、主軸を北北東に配している。全長2.1m、北北東墳幅1m、南南西墳幅1.2mを測る隅丸方形で、残存の深さは東側で38cm、西側で25cmを測る。主体部は、全長1.82m、北北東側50cm、南南西幅43cmの箱形の組合式木棺になると思われ、残存の深さは、約15cmを測った。棺の北側小口の方が南側小口に比べて広く、棺底の高さも北側が高くなっていることから、頭部を北側に安置したものと考えられる。この棺の主軸はN20° Eである。

木棺の埋葬方法は、封土を盛った後墳丘中央部に広めの墓壇を穿ち、約5cm程の敷土をし、墓壇のやや東より棺を安置している。

〔出土遺物〕

6号墳検出に係る遺物は、墳丘内から壺になると思われる土師器片が数点、墳丘中央部の表土より近世の玩具と思われる土製の小塔1点が出土している。



第36図 6号墳主体部

## 6. 7号墳

### 【位置】

7号墳は、東西にのびる第1尾根の西へ下降する斜面に立地しており、1号墳と8号墳とはさまれて位置している。

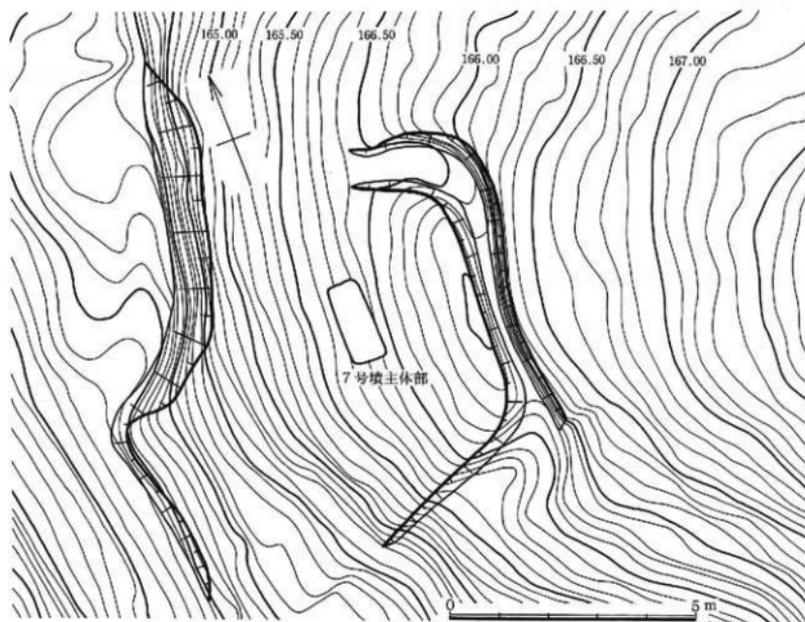
### 【墳丘】(第37図)

調査前においては、1号墳の裾のゆるやかな斜面があるのみで明らかな墳丘は認められず、古墳の所在する可能性はほとんどないと考えられていた。

堆積土や流出土を除去した結果、墳丘は不明確であったが、埋葬施設の背後をめぐる周溝が検出された。この溝は長辺を地形の等高線に平行して掘り込まれており、墳形は楕円形になると思われる。復原すると長径6.5m、短径5.0mになる。周溝の幅は、最大幅1.4m、最小幅60cm、深さ50cmを測る。

### 【埋葬施設】(第38図)

7号墳の埋葬施設は木棺直葬であった。棺は墳形中央部よりやや東側に位置している。棺の大きさは、全長1.6m、幅70cm程を測るが封土と伴にほとんど流失され、かろうじて底部が残るのみで、正確な棺の大きさはつかみがたい。また、棺に伴う墓壇も明確には出来なかった。

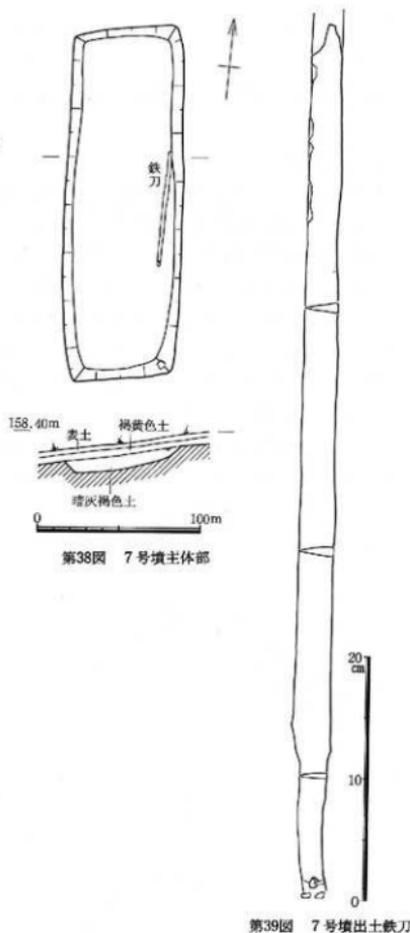


第37図 7号墳平面図

〔出土遺物〕（第89図）

鉄刀は、棺内の南西部分に棺に平行して置かれていた。刃先は北に向けられ、刃部を外側に向けてあった。

鉄刀は、刃先と基部の端を欠いている。現存長70cm、刀身中央部での厚さ8mm、幅3cmである。茎部の厚さは5mm、幅2cmで、目釘穴が二カ所みとめられる。



第38図 7号墳主体部

第39図 7号墳出土鉄刀

## 7. 8号墳

### [位置]

8号墳は東西にのびる第1尾根の西へ下降する斜面に立地しており、1号墳と9・10号墳の中間に位置している。

### [墳丘] (第41図)

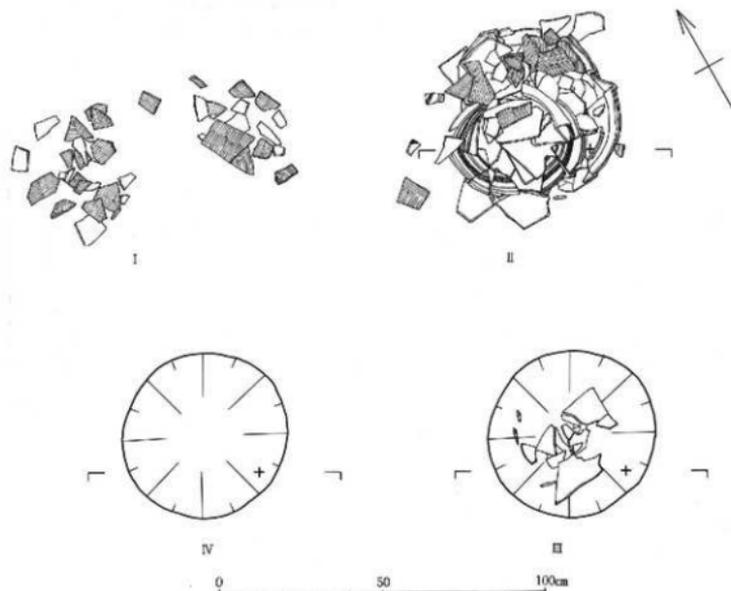
調査前の墳丘は、東西径8.0m、南北径8.5m、墳丘高は、北裾から1.3m、西裾から2.6m、南裾から0.3mを測る。東裾は、後世の堆積土や流入土のため、墳頂部より逆に40cm程高位を示した。

堆積土を除去した結果、墳丘径は、東西が7.2m、南北径は南裾が削平されて明確ではないが、復原すれば9.0m前後になると思われる。封土については、主体部の東側で75cm、西側で65cm、北側で40cm、南側で60cm程が残存しているのが確認できた。封土の状況は、旧地形の斜面地を利用しているため、古墳築造の際、地形の低い西側に盛土をして水平な面を作り、その上へ封土をほぼ水平に積みあげ墳丘を形成していると考えられる。

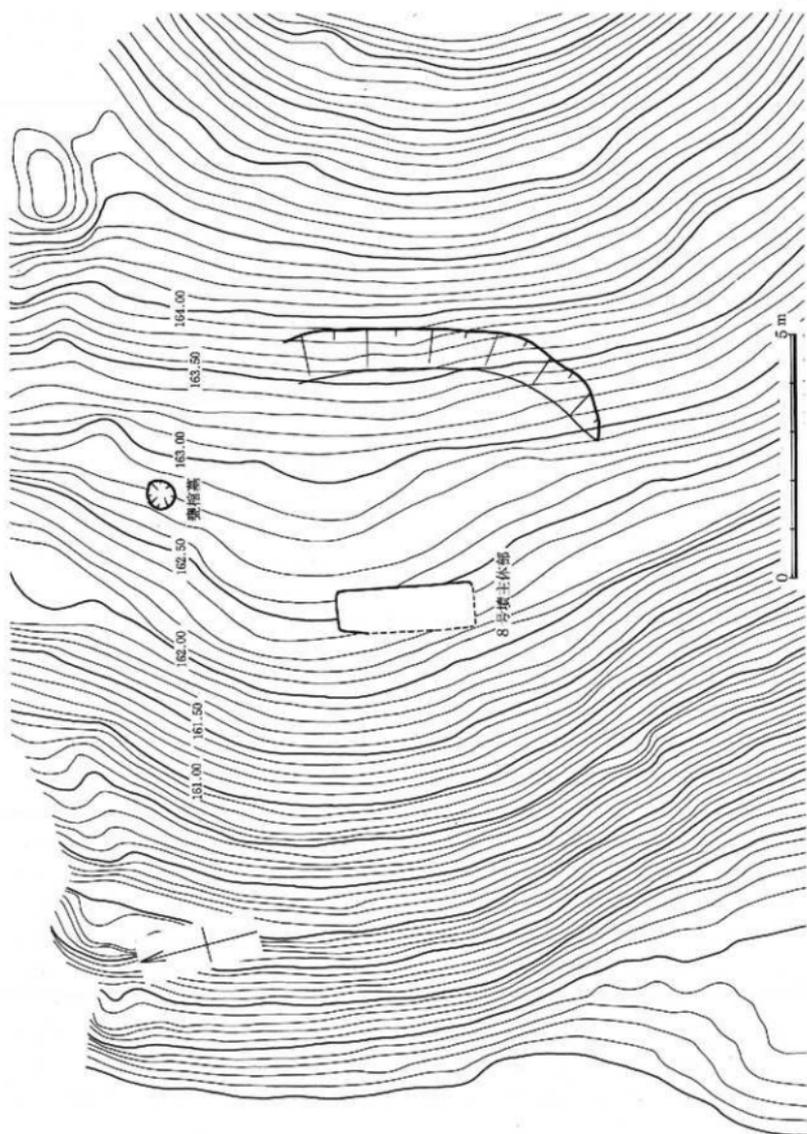
また、周溝は墳丘背後にめぐる形になっており、東側に形成されている。

### [埋葬施設] (第42図)

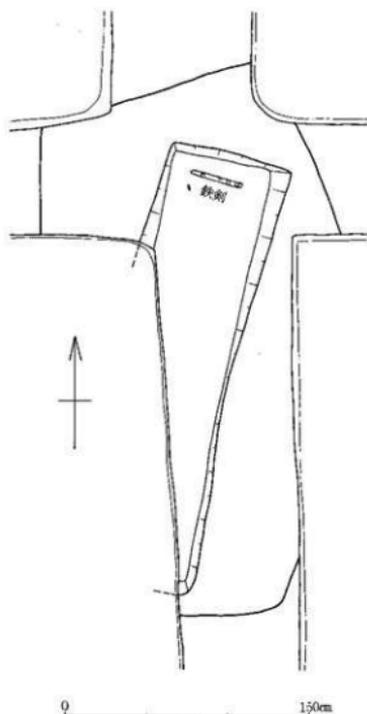
現地表面より約50cmの後世の堆積土を除去すると墳丘封土となり、この面において木棺の痕跡を確認できた。その位置は墳丘中央部の西よりにあたる。箱形の組合せ式木棺になると思われ、全長2.75m、北北東幅75cmを測



第40図 8号墳變遷出土状況



第41图 8号填土体图



第42図 8号墳主体部

り、南南西幅は削平をうけ不明である。深さは15cm程度残存していた。木棺にともなう墓壇の痕跡は明確には出来なかった。封土の残りぐあいや木棺の残存状況からみて、後世にかなりの削平をうけたものと考えられる。

墳丘の北東部の周溝内から、底部を穿孔された須恵器の大甕が出土している。底が安定するぐらいの深みを掘り、そこに正位置に置かれていたものである。伴出遺物もないが、埋葬施設の甕棺墓と考えられる。

〔出土遺物〕(第43図)

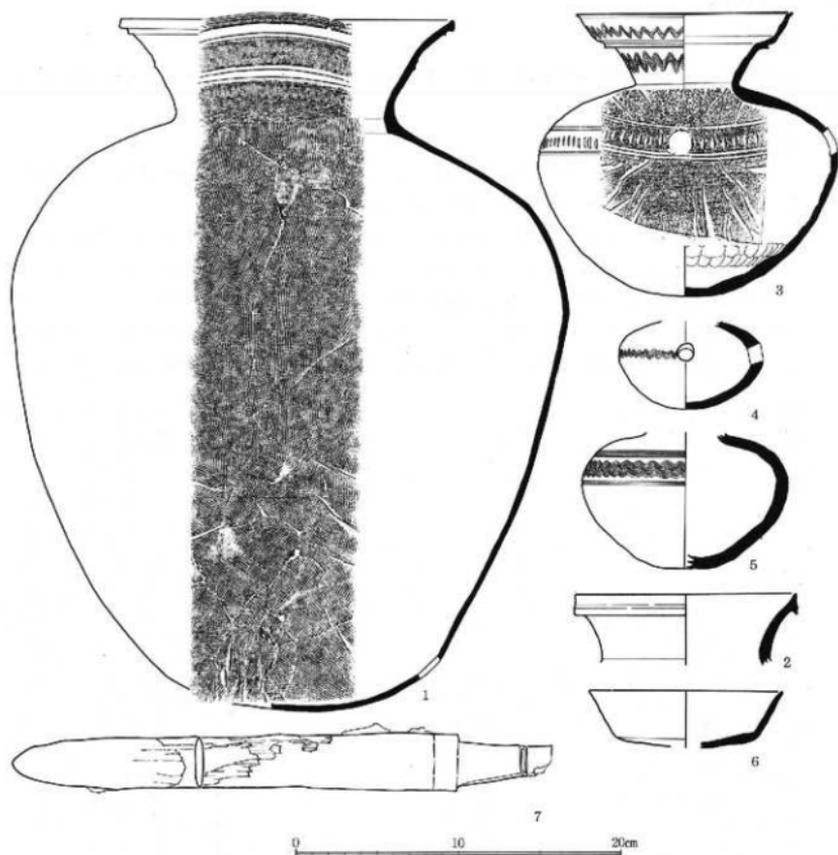
墳丘内の主体部上面より $\text{No.}3$ 点、棺内より鉄剣1点、流土内より甕1点、坏1点が出土している。

甕(1) 口径48.0cm、器高85.8cm、口縁部は大きく外反して立ち上り、口端部は外側に面を作る。口端部下方に1条、口縁部中程に2条の断面三角形の凸帯びを巡らし、上方に7本を1単位とする2組の櫛描波状文、下方に9本を1単位とする櫛描波状文をそれぞれ巡らす。胴部最大径は $\frac{1}{2}$ より上方にくる長胴の大型甕で、底部やや上方に焼成後に円孔を開ける。口縁部内外面は横ナデ、胴部外面は一部格子叩きはあるが主に平行叩き、内面は丁寧にスリ消し、色調青灰色、胎土精良、焼成硬。

甕(2) 口径13.6cm、口縁部は外反して立ち上り口端部は外側に面を作る。内外面共に横ナデ調整を行い自然軸が付着している。色調淡灰色、胎土1mm位の微砂を含む、焼成やや軟。

甕は、大型(3)と小型(4・5)の二種ある。(3)

口径13.2cm、器高17.6cm、口縁部は「逆八の字」状に外上方に立ち上りは端部はつまみ上げるようにして丸くおさまる。口縁部と口頸部との境には鈍い断面三角形の段がつく。口縁部に5本、口端部に8本を1単位とする櫛描波状文を巡らす。頸部は細くしまり、胴部は扁平な球体で最大径は $\frac{1}{2}$ よりやや上方にくる。最大径よりやや上に外上方より内下方へ1つの円孔が開けられ、円孔の上下にそれぞれ2本の沈線が入り、その間に刺突文が入る。口縁部外面及び内面胴部中程より上は横ナデ調整、胴部外面 $\frac{1}{2}$ 以上は回転盤削り、下方は一部スリ消しの平行叩き、内面下方は指おさえが残る。外面沈線以上及び口縁部内面は自然軸が付着。色調淡青灰色、胎土精良、焼成硬。(5)は扁平な球体で胴部最大径は $\frac{1}{2}$ 位のところにある。最大径のところにも2本の沈線とその上に6本の櫛描沈線文が巡り、その間に12本を1単位とする櫛描波状文を巡らす。外面上方に自然軸が付着。外面は鋭削り、内面は横ナデ調整、色調淡黒灰色、胎土2mmの微砂を含む、焼成硬。(4)は扁平な球体で胴部最大径は中程よりやや上方にくる。外面最大径のところにも6本を1単位とする櫛描波状文を巡らし、外上方より内下方へ円孔を開ける。外面は回転盤削り、内面上方は横ナデ、下方は指おさえが残る。外面上方に自然軸が付着。色調青灰色、胎土精良、焼成硬。



第43図 8号墳出土遺物

坏(6) 口径11.8cm、底部と口縁部との境は明確でない。口縁部は外反ぎみに立ち上り口端部は丸くおさまる。底部外面は篋削り、他の内外面は横ナデ調整、色調淡青灰色、胎土精良、焼成硬。

8号墳出土の土器は2時期あり、本墳に直接関係のあるのは須恵器の坏身を除く他の須恵器で陶色編年I-2・3と考えられる古墳時代中期後半と考えられる。また坏身は、白鳳時代頃のものであろうと思われる。

鉄剣(7) 現存長33.2cmを測り、剣身部は27.3cmで、中央部の厚さ5mm、幅3.1cmである。剣身部と基部の間には3.5cmの関部がある。基部の現存長は5.9cm、幅1.9cm、厚さ4mmを測る。関部には幅1.4cmの装具が挿入された痕跡がある。

## 8. 9号墳

### 〔位置〕

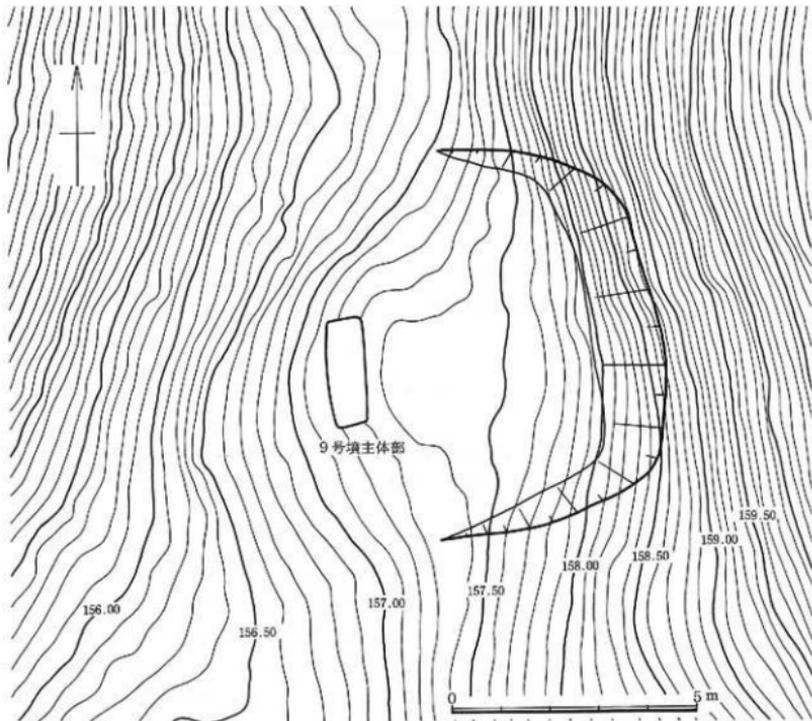
9号墳は第1尾根の西へ下降する斜面に立地し、8号墳から南西約10mのところ、また、10号墳の溝をはさんで南隣に位置している。

### 〔墳丘〕 (第44図)

調査前の墳丘は、東西7.5m、南北8.0mを測り、墳丘高は、北裾から60cm、西裾から90cm、南裾から50cmを測った。そして、東裾は堆積土や流出土のため、墳頂部とほぼ同じ高さを示していた。

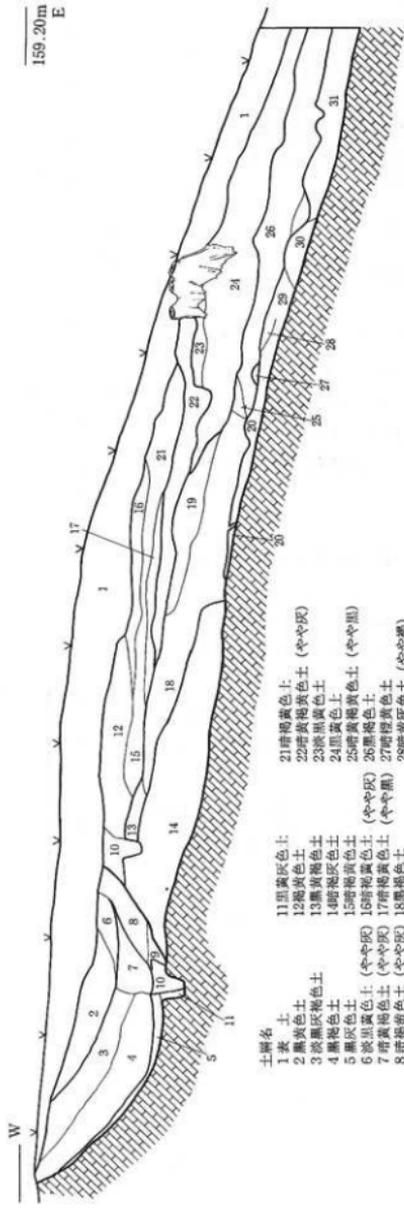
発掘調査の結果、墳丘の規模は東西径7.0m、南北径7.2mの円墳になった。封土については、約40cmの残存がみられた。封土の状況は、墳丘断面図(第45図)によって判明するが、地山の上に約60cmの自然堆積土がのっている旧地形を利用し、その上へ細かく水平に土を積み、墳丘を形成していることが知られる。

また、周溝は完周せず、墳丘背後に周溝がめぐるとい形になっており、北から東・南へかけて、半円に形成されている。北側は10号墳の溝との接点部分で、断面図から判断して、10号墳の溝が自然に埋まったものか、人



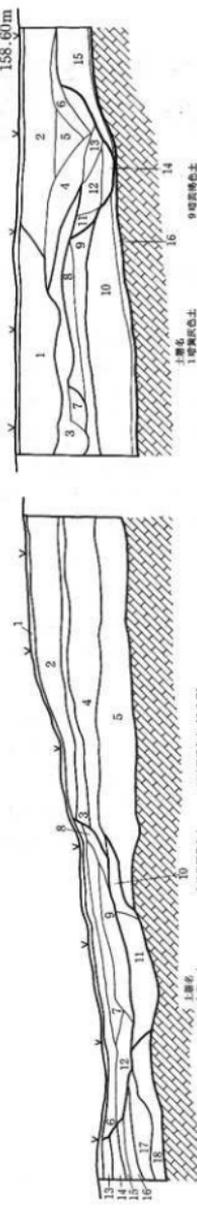
第44図 9号墳平面図

159.20m  
E



- 土層名
- 1 黄土
  - 2 黄褐色土
  - 3 深黄褐色土
  - 4 黑褐色土
  - 5 黑褐色土
  - 6 深灰色土 (やや灰)
  - 7 暗灰色土 (やや灰)
  - 8 暗褐色土 (やや灰)
  - 9 暗褐色土 (やや黄)
  - 10 灰の混入少?
  - 11 暗灰色土
  - 12 暗灰色土
  - 13 暗褐色土
  - 14 暗褐色土
  - 15 暗褐色土
  - 16 暗褐色土 (やや灰)
  - 17 暗褐色土 (やや灰)
  - 18 暗褐色土
  - 19 暗褐色土
  - 20 暗灰色土
  - 21 暗褐色土
  - 22 暗褐色土 (やや灰)
  - 23 暗褐色土
  - 24 暗褐色土
  - 25 暗褐色土
  - 26 暗褐色土 (やや黄)
  - 27 暗褐色土 (やや灰)
  - 28 暗褐色土 (やや灰)
  - 29 暗褐色土
  - 30 暗褐色土
  - 31 暗褐色土

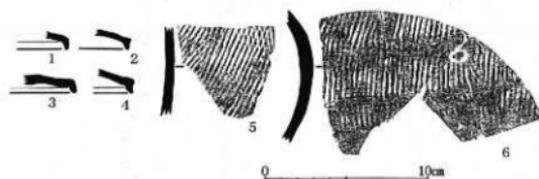
158.60m  
S



- 土層名
- 1 暗褐色土
  - 2 暗褐色土
  - 3 暗褐色土
  - 4 暗褐色土
  - 5 暗褐色土
  - 6 暗褐色土
  - 7 暗褐色土
  - 8 暗褐色土
  - 9 暗褐色土
  - 10 暗褐色土
  - 11 暗褐色土 (やや黄)
  - 12 暗褐色土 (やや灰)
  - 13 暗褐色土 (やや灰)
  - 14 暗褐色土 (やや灰)
  - 15 暗褐色土 (やや黄)
  - 16 暗褐色土 (やや黄)

0 2 m

第45図 9号堤断面



第46図 9号墳出土遺物

為的に埋めたものかは判断しかねるが、10号墳の溝の上面に9号墳の溝がかさなっている。

〔埋葬施設〕

現地表面より約40cmの表土を除去すると墳丘封土となり、この面において主体部の存在を確認した。棺はほぼ墳丘中央部に位置し、主軸をN4°Wに配し、ほぼ磁北をさす。全長2.15m、幅60cm、深さ約10cmを測る長方形である。棺内に鉄刀1点を埋葬していた。封土とともにほとんど流失され、かろうじて底部が残るのみで、正確な棺の大きさはつかみがたい。また、棺ともなる墓壇も明確にはできなかった。おそらく、木棺直葬になると思われる。棺の底の高さもほとんど変わらず、頭部の位置も不明である。

〔出土遺物〕(第46・47図)

9号墳検出に係る遺物は、棺内に鉄刀1点、須恵器片1点、墳丘内に須恵器片数点、10号墳との間の溝から須恵器の甕片2点が出土している。

鉄刀は棺の中ほど東側にそって置かれていた。そして、棺の南東の隅で出土した。また、墳丘を掘り下げる最中にも、須恵器片が数点出土している。他に、9号墳の北側溝上面より、須恵器の坏蓋4点を検出した。

坏蓋の4点は、内面のかえりが消滅し、口縁部はほぼ真直におり口端部は丸くおさまる。口縁部と天井部との境には稜がつく。内外面共に横ナデ調整されている。色調淡灰色系統、胎土精良、焼成硬。時期は奈良時代に比定される。

鉄刀 検出した時は、刀身と茎部の間で大きく曲っていた。復元長は75cmで、刀身は62cmを測る。刀身中央部の厚さは8mm、幅2.5cmである。茎部の厚さは6.5cm、幅1.9cmである。



第47図  
9号墳出土鉄刀

## 9. 10号墳

### 〔位置〕

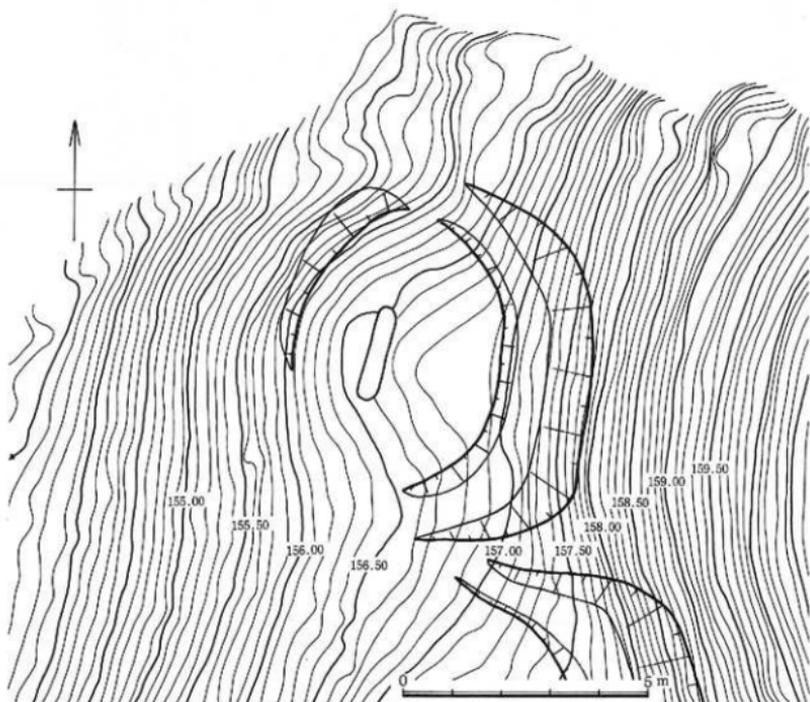
10号墳は、西にのびる第1尾根の西へ下降する斜面に立地し、8号墳の西約10mのところであり、9号墳の北隣に接する。

### 〔墳丘〕(第48図)

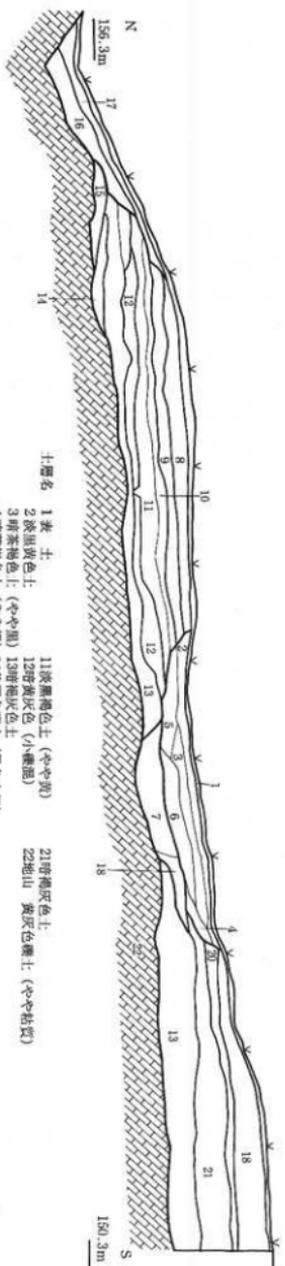
調査前の墳丘は、東西径8.0m、南北径7.5mを測り、墳丘高は、北裾から80cm、西裾から1.5m、後世の堆積土と流出土のため南裾からは10cm程、東裾は逆に70cm程高位を示した。

発掘調査の結果、墳丘の規模は、東西径7.5m、南北径6mの楕円に地かい円墳になった。封土については、約60cmの残存がみられた。封土の状況は、墳丘断面図(第49図)によって知られるが、まず、簡単に成形を加えたとおもわれる地山の緩傾斜面に、土をほぼ水平に積んで、墳丘を形成していることが知られる。

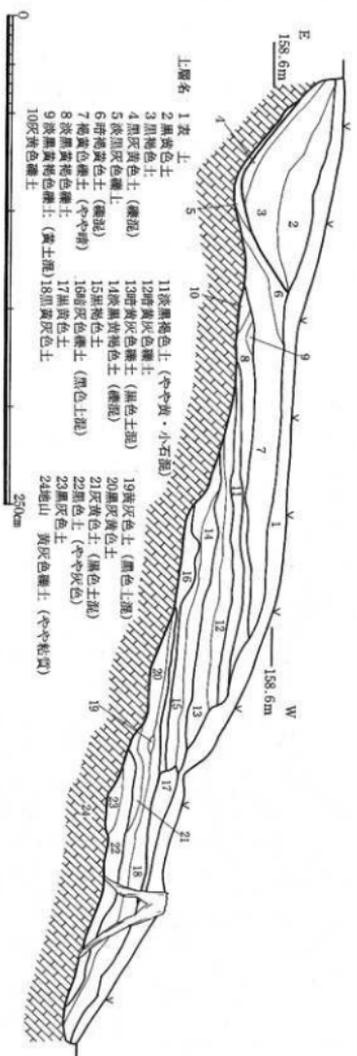
また、溝は完周せず、墳丘背後に周溝がめぐるとい形になっており、墳丘の東半分形成されている。南裾は9号墳の溝との接する地点になっており、断面図から判断して、9号墳の溝下層に10号墳の溝があり、10号墳の方が古い時期に形成されていると考えられよう。



第48図 10号墳平面図



- 土層名
- |               |                   |                    |
|---------------|-------------------|--------------------|
| 1 表土          | 11 淡黑褐色土 (砂・砂質)   | 21 暗褐色土            |
| 2 淡灰褐色土       | 12 暗褐色土 (小礫混)     | 22 粗山 黄灰色壤土 (砂・粘質) |
| 3 暗茶褐色土       | 13 暗褐色土           |                    |
| 4 暗茶褐色土 (砂・砂) | 14 灰褐色土 (黑色土混)    |                    |
| 5 暗黄褐色土       | 15 黄灰色土 (雜混)      |                    |
| 6 淡灰黄色土       | 16 淡黄灰色土 (砂・黄・雜混) |                    |
| 7 淡黄褐色土       | 17 暗褐色土 (雜混)      |                    |
| 8 暗褐色土        | 18 暗褐色土 (砂・黑)     |                    |
| 9 暗褐色土        | 19 暗褐色土 (砂・黑)     |                    |
| 10 淡黄褐色土      | 20 淡黑褐色土          |                    |



- 土層名
- |              |                     |                    |
|--------------|---------------------|--------------------|
| 1 表土         | 11 淡黑褐色土 (砂・砂質・小石混) | 19 黄灰色土 (黑色土混)     |
| 2 黑褐色土       | 12 暗褐色土             | 20 黄灰色土 (黑色土混)     |
| 3 黑褐色土       | 13 暗褐色土 (雜混)        | 21 黄灰色土 (黑色土混)     |
| 4 暗灰褐色土 (雜混) | 14 淡黄褐色土 (雜混)       | 22 暗褐色土 (砂・灰)      |
| 5 淡灰褐色土      | 15 暗褐色土             | 23 暗褐色土            |
| 6 暗褐色土 (雜混)  | 16 暗褐色土 (黑色土混)      | 24 粗山 黄灰色壤土 (砂・粘質) |
| 7 暗褐色土 (砂・砂) | 17 黑褐色土             |                    |
| 8 淡黑褐色土      | 18 黄灰色土             |                    |
| 9 淡黑褐色土      | 18 黄灰色土             |                    |
| 10 黄灰色土      |                     |                    |

第49区 10号横断面図

〔埋葬施設〕

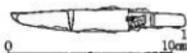
現地表面より約20cmの表土を除去すると墳丘封土となり、この面において主体部の存在を確認した。棺は墳丘中央部より西よりに位置している。棺は両端が削平されているため正確な大きさは不明であるが、棺幅は30cm程が残っていた。また、棺にともなう墓壇も明確にはできなかった。おそらく木棺直葬になると思われる。

〔出土遺物〕

10号墳検出に係る遺物は、棺内に鉄刀1点、刀子1点、墳丘内に須恵器の破片数点が出土している。

鉄片は、棺内の西よりに置かれたものであるが、棺が損傷されたのにもない両端が欠損しているため、正確な大きさはつかみがたい。刀子も鉄刀のすぐ東隣に検出されたが、向きなど動いていると思われるため、正確な位置は、不明である。

墳丘内からは、掘下げていく段階で須恵器の破片を検出した。



第51図 10号墳出土刀子

鉄刀(第50図) 現存長76.7cmで、刀身の現存長は61.5cmを測る。刀身の先を失っており、刀先の形状は不明である。刀身部での厚さは1.1cm、幅3cmである。茎部の厚さは9.5cm、幅2.3cmである。

刀子(第51図) 現存長10.4cm、刀身部の現存長6.9cm、茎部長3.5cmで、刀身の厚さは4mmである。



第50図  
10号墳出土鉄刀

## 10.11号墳

### 〔位置〕

11号墳は、西にのびる第1尾根の西へ下降する斜面の最も端に立地し、12号墳の南隣に位置する。

### 〔墳丘〕（第52図）

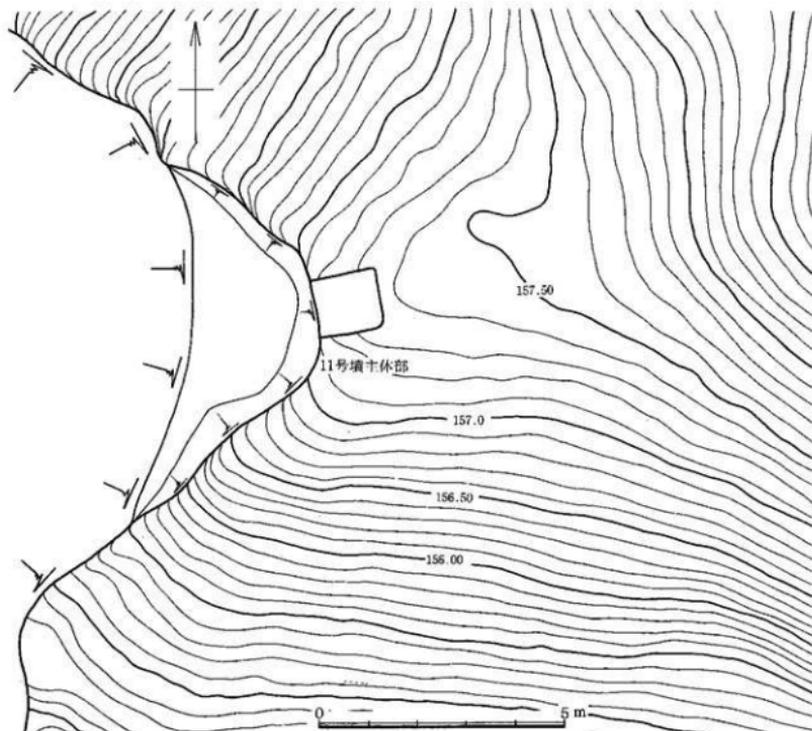
調査前にはごくわずかな高みが認められたものの、本古墳の西側は急な崖になっており、このような現状からは古墳の存在することは予想していなかった。崖の断面をしらべたところ、木棺の痕跡が認められたため、古墳の存在が明らかになった。

調査の結果、封土はほとんど失われ、裾部がはっきりしないため、墳形・墳丘の大きさなど明確ではない。

また、周溝を伴っていたかどうか不明である。

### 〔埋葬施設〕

前述したとおり、崖の断面に木棺の痕跡を認めたため調査したところ、墓壇及び木棺の存在が明らかになった。半分程が損壊をうけ消滅しているため、墓壇及び棺の正確な規模については不明である。墓壇は主軸を東北東に



第52図 11号墳平面図

配し、幅1.2m、全長216m程の長方形になると推定される。深さは60cm程を測る。墓壙の中央に木棺を安置しており、棺の主軸方向は墓壙とほぼ同じ軸になる。

木棺の大きさは、推定の長さ2.0m、幅50cmになり、箱形の組合せ式木棺になると考える。頭部の位置は不明である。

〔出土遺物〕(第53図)

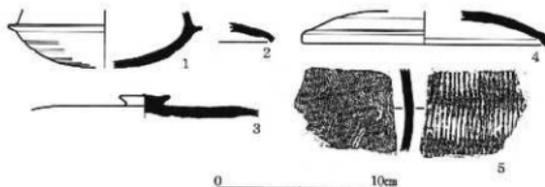
埋葬施設内に遺物は残存していず、11号墳検出に係る直接遺物が出土していないため、時期を明確にしにくい。他に墳丘・調査中に須恵器5点が出土している。

坏蓋は恐らく3点共聚宝珠様のつまみがつくものと思われる。(4)、口径14.9cm、天井部と口縁部との境の稜は明確でなく、口縁部はほぼ真直におり口縁部は丸くおさまる。内面及び外面天井部中程まで横ナデ調整、他の外面は篋削り。(3)は外面篋削り、内面ミズビキ形成。3点共に色調淡青灰色、胎土精良、焼成硬。

坏身(1)は立ち上り部がやや内弯し、受部はやや上り気味である。外面は丁寧に回転篋削り、受部付近及び内面は横ナデ調整、色調淡灰色、胎土精良、焼成硬。

(5)は壺の胴部と思われる。色調青灰色、胎土精良、焼成硬。

11号墳出土の土器は2時期あり、直接本墳に関係のあるのは須恵器の坏身で陶色編年I-4、5と考えられ古墳時代中期末と思われる。他の須恵器の坏蓋は恐らく白鳳から奈良時代のものと思われる。



第53図 11号墳出土遺物

## 11. 12号墳

### [位置]

12号墳は、第1尾根の西へ下降する斜面の端に立地し、11号墳の北隣に位置する。

### [墳丘] (第54図)

調査前は、9・10号墳の西裾がなだらかな広がりを出しており、墳丘らしきものはなく、外見からは古墳の存在は予想していなかった。調査により周溝が検出され、12号墳の所在が明らかになったものである。

堆積土や流出土を除去した結果、墳丘はすでにほとんど失われており、封土は約40cm程を残すのみである。検出された周溝は、外縁が明確に残っており、よく残っているところで溝幅1.4m、深さ80cmを測る。復原すると、周溝は墳丘背後にめぐるといふ形をとると思われ、墳丘径7.0mの円墳になると考えられる。

### [埋葬施設]

12号墳の埋葬施設は墳丘と共に失われ、明確ではない。おそらく木棺直葬であったと思われる。

### [遺物]

古墳造営時に係る遺物は全く認められず、時期を明確にし得ない。



第54图 12号填平面图

## 12. 13号墳

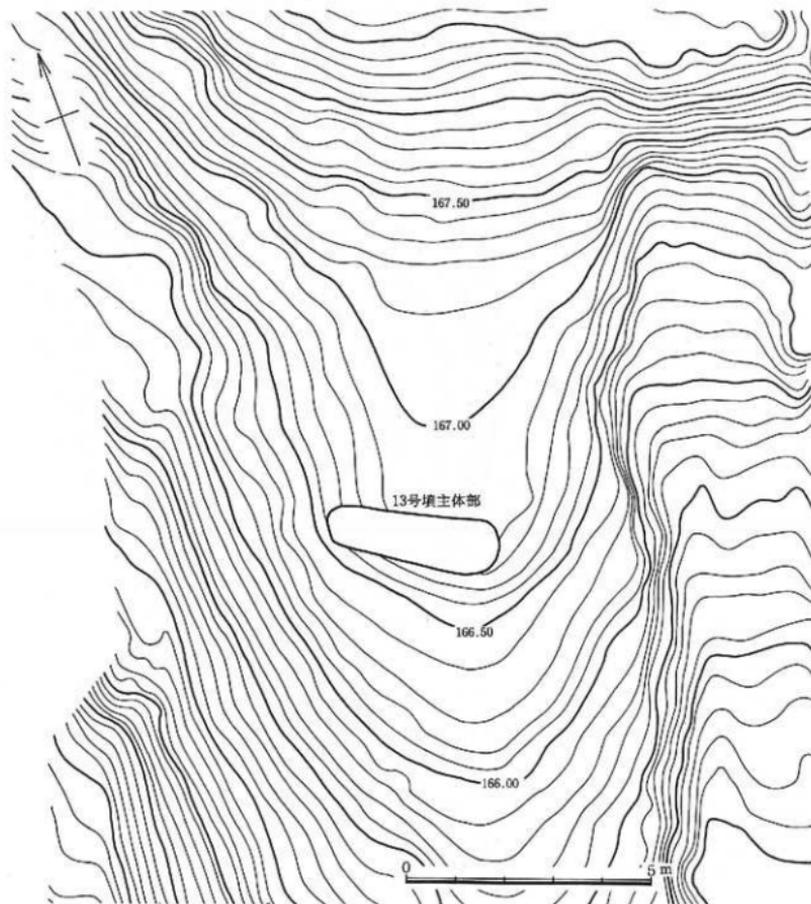
〔位置〕

13号墳は、2号墳の南側の南にのびる第2尾根に立地し、2号墳から約15mのところの位置する。

〔墳丘〕 (第55図)

調査前においては、若干の平坦部が認められたものの、古墳が存在することは予想されていなかった。調査されてはじめて古墳が明らかになったものである。

墳丘は後世の削平などにより、ほとんど消失している。このため封土もほとんど失ない、20cm程が残っている



第55図 13号墳平面図

にすぎない。墳丘断面図（第60図）によって、地山の緩傾斜面に土を積み、墳丘を形成したことが推定できる。

また、溝は、墳丘背後になる北側と、反対の南側に作られており、地山を掘り下げた溝の底部が残っているにすぎない。復原すると南北径は9.2m、東西径は尾根の幅からみて8.0m程になる。

〔埋葬施設〕（第56図）

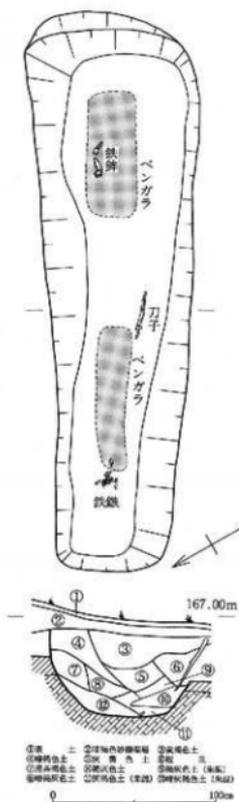
現地表面より約10cm程の堆積土を除去すると、棺の痕跡が認められた。棺は中央部に位置している。全長3.45m、東南幅1.0m、北西幅0.65m、深さ約35cm程が残存している。木棺に伴う墓蓋の痕跡は明確に検出できなかった。棺の長さや断面の状況からみて、割竹形木棺になる可能性が考えられる。棺底の高さは、東南端の方が北西端に比べて約5cm程高くなっているし、棺幅も東南幅の方が広いことなどから、頭部を東南に置いていたものと考えられる。また、棺底部には、ベンガラの痕跡もみられた。

〔出土遺物〕（第57図）

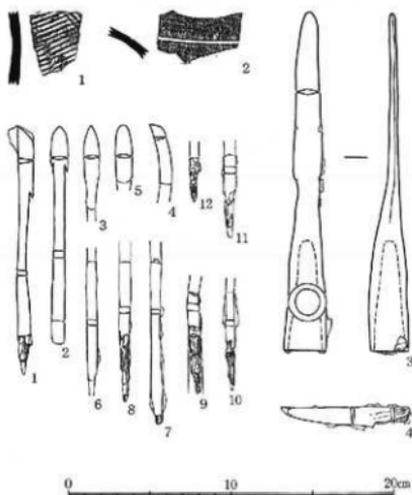
13号墳検出に係わる遺物は、棺内に鉄製品14点、墳丘内に須恵器片2点が出土している。

棺内の鉄製品については、鉄鍔12点、刀子1点、鉄針1点である。鉄鍔は北西より東にして置かれた状態で、足元にあたる。刀子は棺の半ほど南側に置かれており、左腰ぐらいの位置になる。鉄針は、先を東南に向け、棺の北側にそって置かれた状態である。いずれも、棺内にベンガラがまかれた後に、被葬者の横と足元に置かれたものであろう。

墳丘内の須恵器片は、甕片1点、壺か壺のどちらかになると思われる破片1点である。



第56図 13号墳主体部



第57図 13号墳出土遺物

(2)は壺か壺の胴部で波線が入る。(1)は壺の胴部と思われる。色調淡灰色系統、胎土精良、焼成硬。

鉄鉢(3) 長さ21.1cmで穂部の形状は短剣に近く、断面は菱形を呈す。刃部下端における幅は1.7cm、厚さ4mmである。刃部の長さは10cmある。袋部と胴の間は斜めにゆるやかに移行してとおり、袋部中央の厚さは2.3cmである。

刀子(4) 現存長7.5cm、刃部現存長5.2cmで厚さは2mmを測る。

鉄鏃(表-10)

完形品は2本で、他は鏃先が3点と細根が7点あり、本来は9本であったと考える。形式は片刃矢式が2本と形式が1本、柳葉式が2本で、他は不明である。

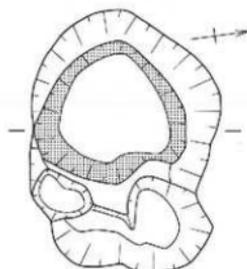
【その他の遺構】(第58、59図)

北側の周溝内から方形にちかい焼土坑3基が検出された。規模は直径1m程で周溝の西端・半ほど・東端に穿たれている。そして、穿たれちのは切り合い関係から周溝が作られた後である。土坑の壁面は焼けているが、中からは遺物の出土はない。3基が同時期になるのかどうかは、不明である。

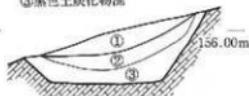
表-10 13号墳出土鉄鏃一覽

(単位mm)

No	現在長	鏃長	刃長	刃厚	矢柄径	形式
1	147.2	-	44.4	3.4	8.3	片刃矢式
2	136.5	-	27.0	1.9	-	三角式
3	52.9	-	33.0	2.1	-	柳葉式
4	39.4	-	-	2.1	-	片刃矢式
5	36.1	-	33.0	2.6	-	柳葉式
6	75.3	-	-	-	-	不明
7	102.3	-	-	-	-	〃
8	82.0	-	-	-	-	〃
9	36.4	-	-	-	7.2	〃
10	61.1	-	-	-	-	〃
11	52.0	-	-	-	-	〃
12	27.6	-	-	-	-	〃

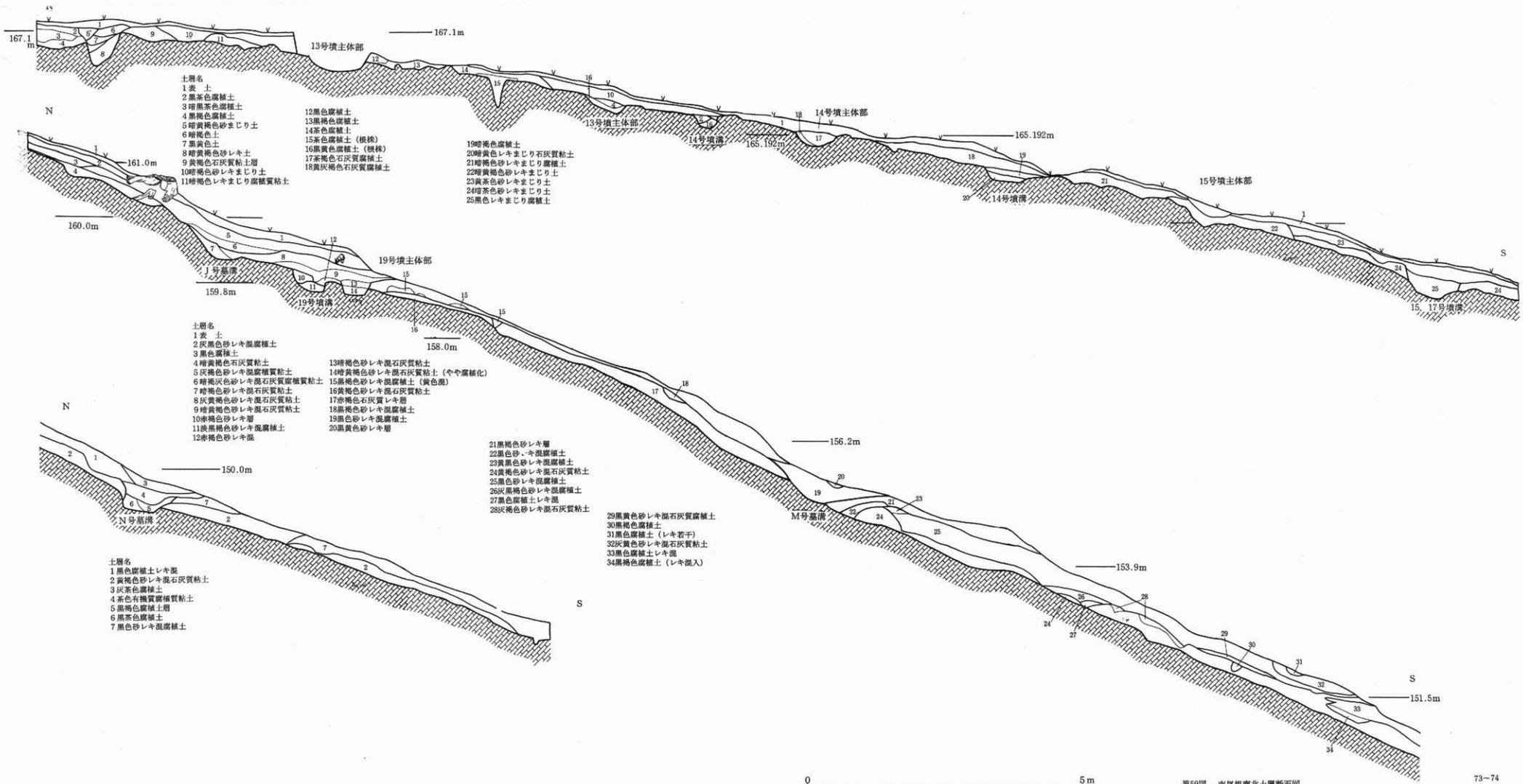


- ①黒黄色土
- ②黒色土(やや黄色)炭化物混
- ③黒色土炭化物混



0 1 m

第58図 13号墳 焼土坑



- 土層名
- 1 表土
  - 2 黒茶色腐植土
  - 3 暗黒茶色腐植土
  - 4 黒褐色腐植土
  - 5 暗黄褐色砂まじり土
  - 6 暗褐色土
  - 7 黒黄色土
  - 8 暗黄褐色砂レキ土
  - 9 黄褐色石灰質粘土層
  - 10 暗褐色砂レキまじり土
  - 11 暗褐色レキまじり腐植質粘土

- 12 黒色腐植土
- 13 黒褐色腐植土
- 14 茶色腐植土
- 15 茶色腐植土 (根株)
- 16 黒黄色腐植土 (根株)
- 17 茶褐色石灰質腐植土
- 18 黄灰褐色石灰質腐植土

- 19 暗褐色腐植土
- 20 暗黄色レキまじり石灰質粘土
- 21 暗褐色砂レキまじり腐植土
- 22 暗黄褐色砂レキまじり土
- 23 黄褐色砂レキまじり土
- 24 暗褐色砂レキまじり土
- 25 黒色レキまじり腐植土

- 土層名
- 1 表土
  - 2 灰黒色砂レキ混腐植土
  - 3 黒色腐植土
  - 4 暗黄褐色石灰質粘土
  - 5 灰褐色砂レキ混腐植質粘土
  - 6 暗褐色砂レキ混石灰質腐植質粘土
  - 7 暗褐色砂レキ混石灰質粘土
  - 8 灰黄褐色砂レキ混石灰質粘土
  - 9 暗黄褐色砂レキ混石灰質粘土
  - 10 暗褐色砂レキ混
  - 11 淡黒褐色砂レキ混腐植土
  - 12 赤褐色砂レキ混

- 13 暗褐色砂レキ混石灰質粘土
- 14 暗黄褐色砂レキ混石灰質粘土 (やや腐植化)
- 15 黒褐色砂レキ混腐植土 (黄褐色)
- 16 黄褐色砂レキ混石灰質粘土
- 17 赤褐色石灰質レキ混
- 18 黒褐色砂レキ混腐植土
- 19 黒色砂レキ混腐植土
- 20 黒黄色砂レキ混

- 21 黒褐色砂レキ混
- 22 黒色砂レキ混腐植土
- 23 黄褐色砂レキ混腐植土
- 24 黄褐色砂レキ混石灰質粘土
- 25 黒色砂レキ混腐植土
- 26 灰黒褐色砂レキ混腐植土
- 27 黒色腐植土レキ混
- 28 灰褐色砂レキ混石灰質粘土

- 29 黒黄色砂レキ混石灰質腐植土
- 30 黒褐色腐植土
- 31 黒色腐植土 (レキ若干)
- 32 灰黄色砂レキ混石灰質粘土
- 33 黒色腐植土レキ混
- 34 黒褐色腐植土 (レキ混入)

- 土層名
- 1 黒色腐植土レキ混
  - 2 黄褐色砂レキ混石灰質粘土
  - 3 灰茶色腐植土
  - 4 茶色有機質腐植質粘土
  - 5 黒褐色腐植土層
  - 6 黒茶色腐植土
  - 7 黒色砂レキ混腐植土

0 5m

第59図 南尾根南北土層断面図



13号填 填土填平面图

### 13. 14号墳

#### 〔位置〕

14号墳は第2尾根に立地し、13号墳の南約15mのところであり、15号墳とは溝をはさんで隣接する。

#### 〔墳丘〕(第61図)

調査前の地形は緩やかな斜面地であり、古墳が存在することはまったく予想していなかった。調査によって溝と埋葬施設が検出され、古墳が明らかになったものである。

墳丘は、後世の削平や流出により、まったく消滅している。このため封土の状況など不明であるが、墨根筋の一部分を周溝をめぐるすことによって切断し、墳丘の一部として利用していることがかんがえられよう。

溝は地山まで切り込んで作られているが、底部の20cm程を残すのみである。墳形は復原すると、直径6m程の円墳になると思われる。



第61図 14号墳・15号墳平面図

〔埋葬施設〕

現地表面より約20cm程の堆積土を除去すると地山があらわれ、この面において棺の痕跡を検出できた。棺は北側の溝と南側の溝との中間に位置しており、主軸は東に配されている。後世の削平のためか輪部ははっきりせず、長さ3.0m、幅1.1mの長方形を呈すると思われる。断面を調べてもはっきりとしなが、割竹形木棺になる可能性もあり、明確ではない。棺に伴う墓壇もはっきりとしなかった。

〔出土遺物〕(第62図)

14号墳に伴う遺物は、棺内に鉄剣1本と鉄鏃17点が検出された。

鉄剣(1) 現存長34.5cmを測り、剣身部は22.2cm、中央部の厚さ5mm、幅2.1cmである。剣身部と茎部の間には2.3cmの関節がある。茎部は現存長7.1cm、幅1.5cm、厚さ3mmで、目釘穴が2ヵ所ある。茎部に顕著な木質錆着がみられ、把木の可能性を示す。

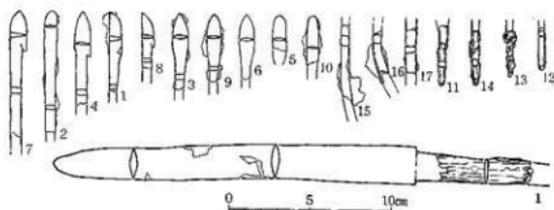
鉄鏃(表-11)

鏃先が10点、細根が4点出土している。形式は片刃矢式が4点、柳葉式が6点である。

表-11 14号墳出土鉄鏃一覧

(単位mm)

No	現在長	鏃長	刃長	刀厚	矢柄径	形式
1	49.8	-	26.2	3.2	-	片刃矢式
2	76.0	-	27.0	1.3	-	柳葉式
3	47.5	-	20.0	2.2	-	片刃矢式
4	58.4	-	27.9	1.7	-	"
5	23.6	-	-	1.9	-	柳葉式
6	40.0	-	21.3	1.8	-	"
7	78.3	-	24.9	3.1	-	片刃矢式
8	34.6	-	21.5	2.2	-	"
9	42.1	-	25.9	1.7	-	柳葉式
10	31.1	-	31.1	1.1	-	"
11	37.4	-	-	-	4.9	不明
12	26.1	-	-	-	4.5	"
13	29.5	-	-	-	3.7	"
14	33.6	-	-	-	5.1	"



第62図 14号墳出土鉄器

## 14. 15号墳

### 〔位置〕

15号墳は、第2尾根の北から南へ下降する斜面の肩部に立地している。西側から南側にかけて、16・17・18号墳によって削平をうけている。

### 〔墳丘〕

調査前については、緩やかな斜面が見られるだけで、古墳の存在などまったく予想していなかった。調査によって埋葬施設が認められ、古墳になることが判明したのである。

墳丘は、後世の削平や流出のため、まったく消滅している。また、西から南へかけて、16・17・18号墳によって削られているため、墳丘の規模及び墳形についても明確にし得ない。

溝については、北側にめぐる溝は14号墳と共有するものと考えられる。南西の17号墳の溝についても、15・17号墳の共有と考えられる可能性もある。

### 〔埋葬施設〕

現地表面より約40cmの堆積土を除去した結果、地山の面があらわれ、棺の痕跡を検出することができた。棺は14号墳共南溝と17号墳の溝との中間に位置している。封土の流出などにより棺の輪郭はあまりはっきりとしないが、断面から判断すると、箱形の組合せ式木棺になると考えられる。また、棺に伴う墓壇もはっきりとは検出できなかった。

### 〔出土遺物〕

埋葬施設内に遺物は残存していず、15号墳造営時の遺物もなく、時期を明確にしにくい。

## 15. 16号墳

### 〔位置〕

16号墳は、第2尾根の北から南へ下降する斜面の西側に位置している。15号墳の西裾を削りとり形成されている。

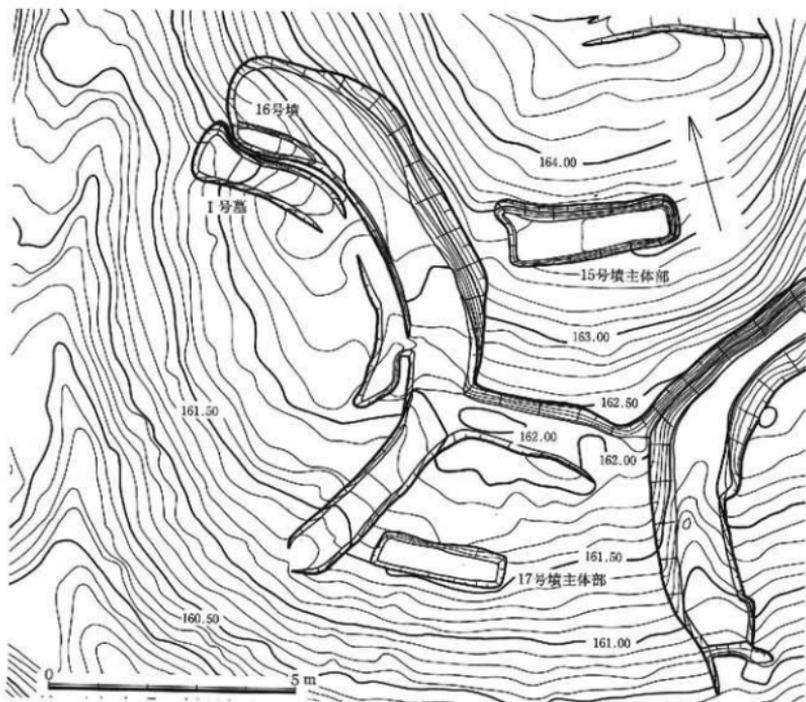
### 〔墳丘〕(第63図)

調査前については、尾根の西斜面が見られるだけで墳丘などの高まりは認められず、古墳など予想していなかった。調査によって溝が確認され、古墳と判明した。

墳丘についても明らかなマウンドは認められず、ほとんど流失したものと考えられる。かろうじて溝の西層で約30cmの封土が確認できたにすぎない。

古墳造営時には、西側にかなりの盛土をしたものと考えられ、マウンドが流失した後地山まで切り込んだ溝のみが検出されたものであろう。

溝は、幅が1.0～1.5m程あり、半円にめぐっている。深さは地形に合わせて、東側が深く南へ下がるにつれ浅くなっている。



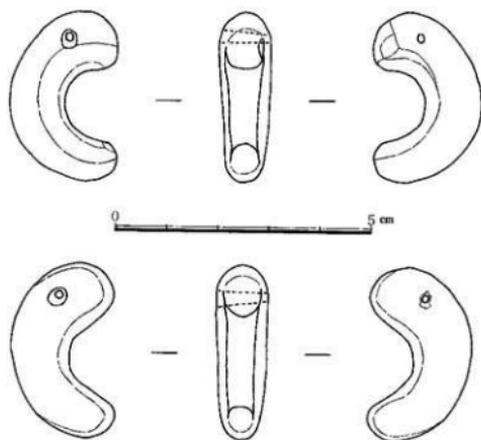
第63図 16号墳・17号墳・I号墓平面図

[埋葬施設]

前にも述べたとおり、墳丘流失に伴い埋葬施設も失われたものと考えられる。おそらく木棺直葬であったろう。西側に隣接して溝が認められるが、この溝は後で述べるように、J号墓の溝と考える。

[遺物]

16号墳の南斜面で須恵器の甕片が出土しているが、おそらく墳丘流失の際流れおちたものであろう。他に勾玉2点（第64図）が出土した。



第64図 16号墳出土勾玉

## 16. 17号墳

### (位置)

17号墳は、15号墳の南西に溝をはさんで隣接しており、16・18号墳に裾を削平されている。

### (墳丘)

調査前については、尾根の南へ下降する斜面地であり、墳丘など認められず、古墳の存在は予想していなかった。調査によって溝と埋葬施設が認められ、古墳になることが判明したのである。

墳丘は後世の削平や流出により、ほとんど消失している。また、西側は16号墳によって、東側は18号墳によって削平をうけているため、墳丘の規模及び墳形についても明確にし得ない。

溝については、北側に15号墳と共有するものと考えられる溝が検出できたのみである。それも、地山を掘り込んだ溝の底部が残存しているにすぎなかった。

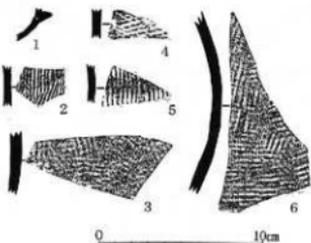
### (埋葬施設)

現地表面より約50cmの堆積土を除去すると、すぐ地山の面になる。この面において棺の痕跡を検出することができた。溝から約2mのところに位置している。封土の流失により残存深度は約20cm程であるが、長さ2.7m、幅80cmを測る。おそらく木棺直葬になると思われる。なお、棺に伴う墓壇は、明確に検出し得なかった。

### (出土遺物) (第65図)

主体部周辺から須恵器片6点が出土した。

(1)の坏身を除けば全て甕の胴部と思われる。(1)は受部がほぼ平行に延び内外面共に横ナデ調整、甕の胴部外面は一部スリ消し叩き、内面はスリ消し、共に色調は淡灰色系統、胎土精良、焼成硬。



第65図 17号墳出土遺物

## 17. 18号墳

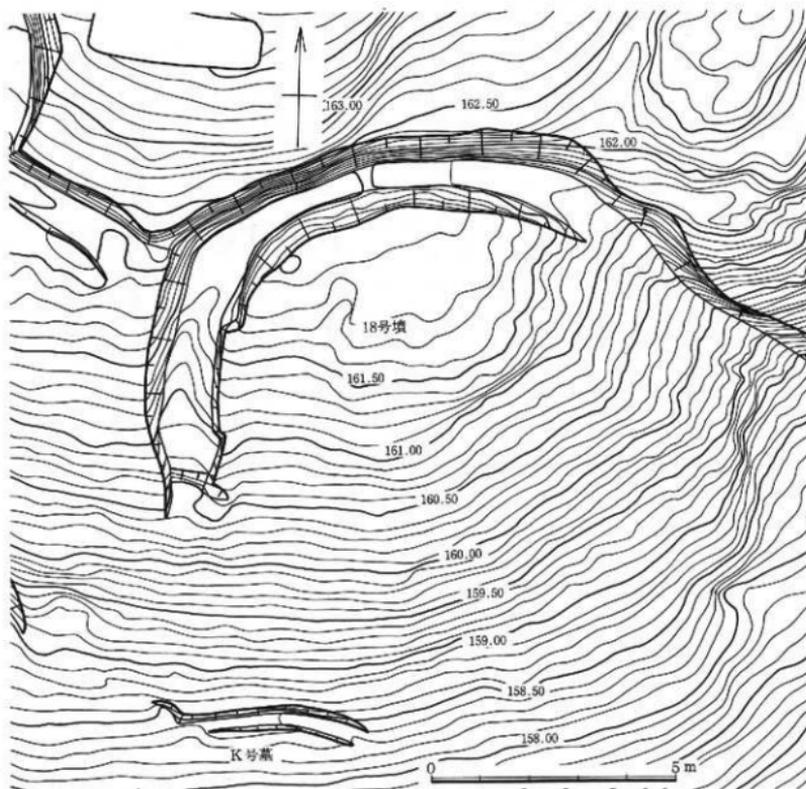
### 〔位置〕

18号墳は、第2尾根の北から南へ下降する斜面の肩部東側に位置している。15号墳の南裾を削り、17号墳の東裾を削平して形成されている古墳である。

### 〔墳丘〕〔第66図〕

調査前については、緩やかな斜面が見られるだけで、全くその表徴は現れていず、古墳など予想していなかった。調査により周溝が検出され、はじめて18号墳の所在が明らかになったものである。

墳丘は、後世の削平や流出のためまったく消滅しているため、封土などについては知る手懸りはない。地形などからみて、古墳築造時には低い南側にかかなりの盛土をして、埋葬施設等を設けたと考えられよう。



第66図 18号墳平面図。

検出された周溝は、墳丘背後にあたる北側の斜面を穿って形成されており、半円形にめぐっている。溝幅は1.5 mで、最も深いところで深さ1 m程が残っている。

复原すると墳丘径9.5mの円墳になるとされる。

〔埋葬施設〕

すでに述べたように、墳丘が流失し封土も存在しないところから、埋葬施設も流失したと思われる。従ってその様子は詳らかにできないが、周囲の古墳の状況からみて、木棺直葬であったと推定できる。

〔出土遺物〕

18号墳検出に係る遺物は全く認められず、時期を明確にし得ない。

## 18. 19号墳

### 〔位置〕

19号墳は、第2尾根の南へ下降する斜面地にあり、17号墳から南西約7mのところと位置している。

### 〔墳丘〕(第67図)

調査前は緩やかな斜面がみられるだけで、墳丘などの表徴は認められず、古墳の存在などまったく予想していなかった。調査の結果、溝、埋葬施設が検出され、古墳になることが判明したのである。

墳丘は、後世の削平や地形による流出のためか、ほとんど失われている。かろうじて主体部の周囲に認められる程度であった。古墳造営時には、地形の低い南西側に土を盛って、墳丘を形成したと考えられよう。そして、墳丘が流失した後、地山まで掘り込まれた溝と埋葬施設が検出したものであろう。

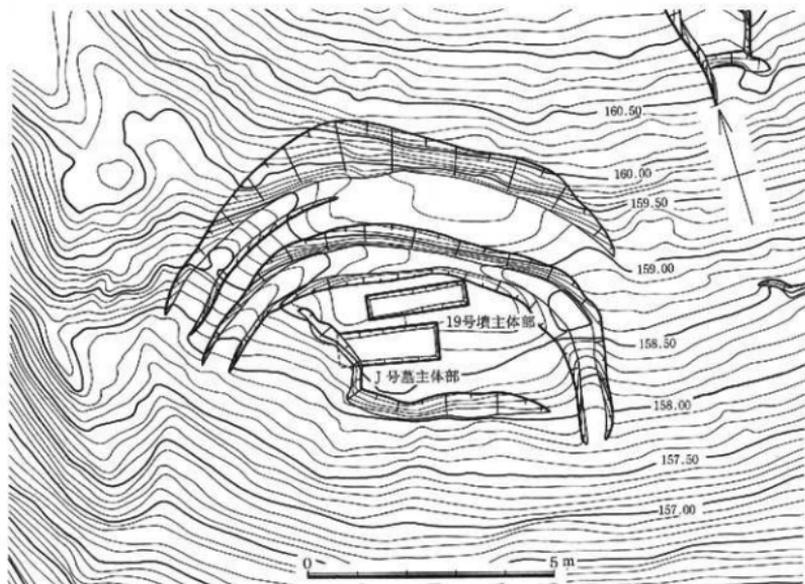
なお、別に溝と埋葬施設が1基ずつ検出されたが、これは後述するようにJ号墓として説明したいと思う。

古墳の溝は、残存しているところで幅1.0mを測り、急斜面を穿っているため、その平面形は、溝の肩の最も高いところの幅が広がっている形をしている。そして、墳丘背後にめぐる配置になっていると考えられよう。

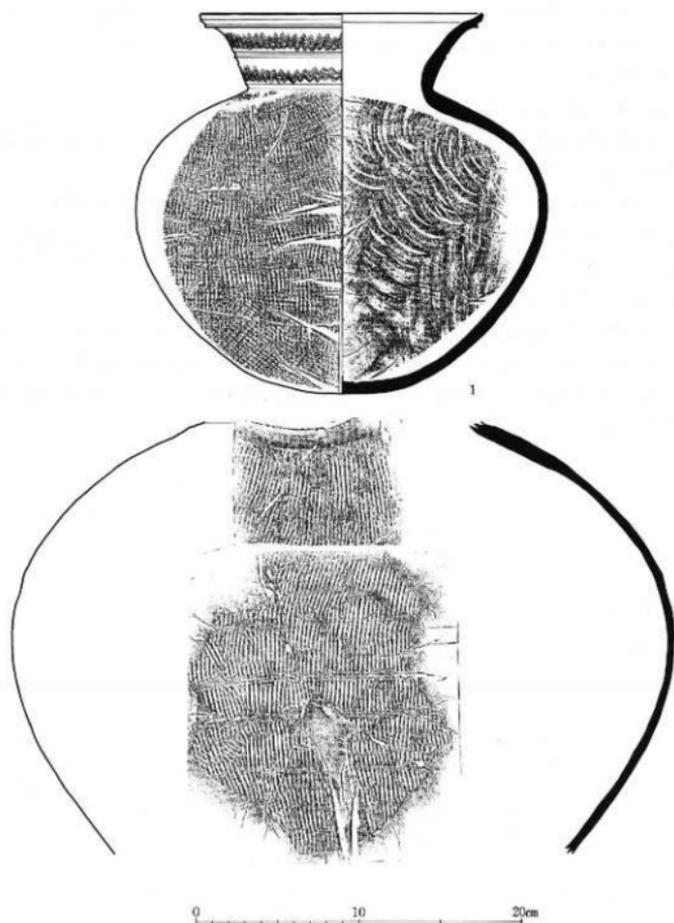
復原すると、墳丘径8.5mの円墳になると思われる。

### 〔埋葬施設〕

現地表面より約60cmの堆積土を除去すると、薄い封土の層が残存しており、この面において棺の痕跡を確認できた。棺は墳丘中央部よりやや北側に位置している。棺の大きさは、全長2.05m、東幅45cm、西幅50cm、深さは



第67図 19号墳・J号墓平面図



第68図 19号墳出土遺物

10cm程を測った。封上とともにほとんど流失され、かろうじて底部が残るのみで、正確な棺の大きさはつかみがない。棺の底の高さもほとんどかわらず、頭部の位置も不明である。また、棺ともなう墓壇も明確にはできなかった。おそらく木棺直葬であったと思われる。

この棺のすぐ南隣に、西端を損消しているが、残存長2.0m、幅70cm、深さ1cmの埋葬施設と考えられる遺構を検出した。この遺構については、後に述べるJ号墓に係るものとして説明したいと思う。

〔出土遺物〕(第68図)

19号墳検出に係る遺物は墳丘流土内に須恵器の甕2点である。

堆積土を除去すると、棺を検出した地点の上面に一かたまりになって出土した。これは、19号墳の墳丘が流れた折、一緒に押されたものと考えられる。

甕(1)、口径17.25cm、器高23.75cm、口縁部は外反して立ち上がり口端部はやや上方に屈曲させて丸くおさまる。口縁部中程に1条の沈線が巡り、その上下に各々10本を1単位とする櫛状波状文が巡る。胴部最大径は中程に位置しほぼ球体である。口縁部内外面及び胴部内面上方は横ナデ調整、胴部外面上方は一部スリ消しを含むが平行及び格子叩き、胴部内面は円弧文の叩き、色調淡青灰色、胎土精良、焼成硬。

甕(2)は口縁部と底部を欠いているが、胴部最大径が中程にくる球体と思われる。外面上方は半スリ消し、下方は平行叩き後カキ目を巡らしている。内面はスリ消し、色調淡青灰色、胎土精良、焼成硬。

19号墳出土の須恵器の甕は、その形態及び内外面の2次調整より陶邑編年のI-4、5と考えられ古墳時代中期末のものと思われる。

## 19. 20号墳

### 〔位置〕

20号墳は、第2尾根の南へ下降する斜面の西端に立地する。19号墳の南西約10mのところに位置する。

### 〔墳丘〕(第70図)

調査前においては、全くその表徴をとどめていなかった。さらに、周囲は傾斜地であり、遺構の存在は認めがたく思われた。20号墳は調査により明らかになったものである。

墳丘は、後世の削平や流出のため、まったく消滅している。このため封土の状況など不明であるが、地形からみて低い南西側に盛土をして水平な面を作り、その上へ封土をほぼ水平に積みあげ墳丘を形成していると考えられよう。

溝については、前述したように封土が消失しているため、地山を掘り込んだ溝の底部が残存しているにすぎない。また、溝は完周していず、墳丘背後にめぐるといふ形になっている。

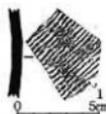
### 〔埋葬施設〕

20号墳の埋葬施設は墳丘と共に失われており、明確ではない。おそらく木棺直葬であったと思われる。

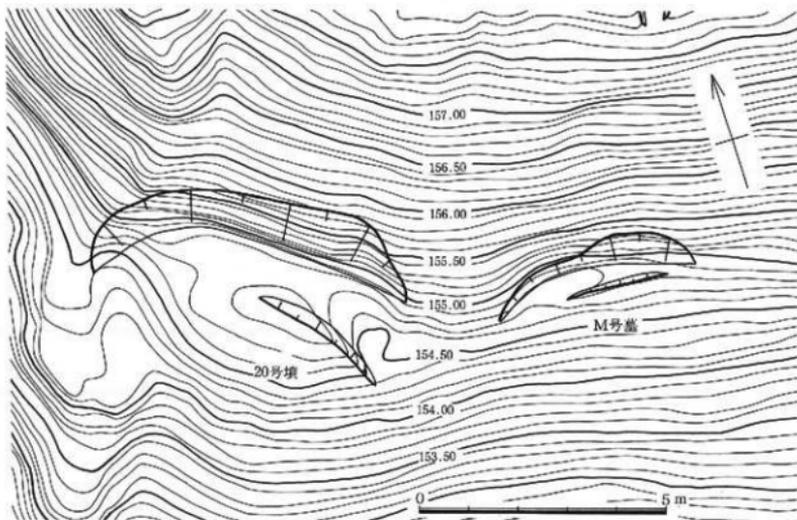
### 〔出土遺物〕(第69図)

調査中に須恵器片1点が出土した。

甕の胴部と思われる。外面平行叩き、内面はスリ消し、色調淡灰色、胎土精良、挽成硬。



第69図 20号墳出土遺物



第70図 20号墳・M号墓平面図

## 20, 21号墳

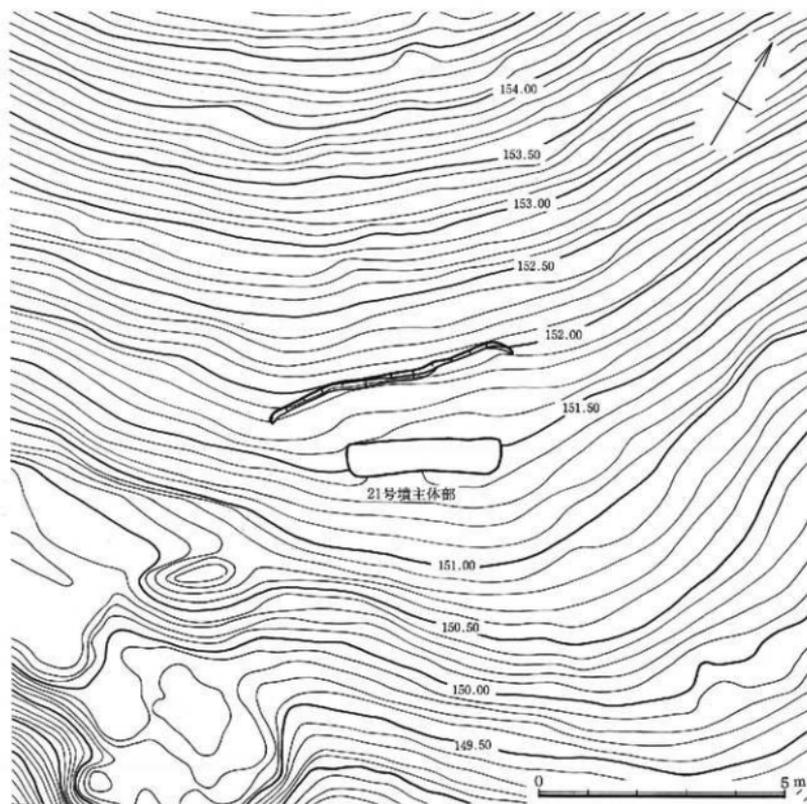
### 〔位置〕

21号墳は、第2尾根の南から東へ広がる斜面地の東端に位置している。19号墳から東南約30m、渠石遺構から南へ約15mのところにある。

### 〔墳丘〕（第71図）

調査前については、尾根の東側の斜面裾が見られるだけで、墳丘などの表徴は認められず、位置も他の古墳とは離れているため、遺構の存在は予想していなかった。

墳丘についても、明らかなマウンドは認められず、ほとんど流失したものと考えられる。そのため、封土などについても知る手だてもなく、墳丘の規模及び墳形についても明確にし得ない。おそらく、地形の低い東南側へかなりの盛土をして墳丘を形成したと考えられ、墳丘が流失したため、地山まで掘り込まれた溝と埋葬施設が検



第71図 21号墳平面図

出されたものであろう。

周溝は、山側の肩部しか残存していないが、地形の等高線に平行に掘り込まれている。

〔埋葬施設〕

溝の肩から約2m程東南に離れた地点で検出した。長さ3m、幅60cmを測る長方形を呈している。残存の深さは約20cmである。等高線と平行に穿たれており、主軸をN52°Eに配している。かなりの削平をうけているため正確な大きさはつかみがたく、また、棺に伴う墓壇も明確には出来なかった。

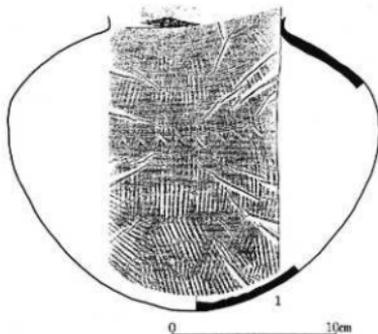
〔出土遺物〕(第72図)

21号墳検出に係る遺物は、墳丘流土内に須恵器の壺1点が出土している。

堆積土を除去すると、棺を検出した地点から約50cm程南東のところ、一かたまりになって出土した。これは、21号墳の墳丘が流れた際、一緒に動いたものと考えられる。

壺は口縁部が欠けている。胴部最大径は上方1/3の所にあり扁平な球体である。頸部に波状文を巡らし、胴部外面最大径やや上方の位置に9本を1単位とする櫛状波状文を巡らす。胴部外面上方は半スリ消し、下方は平行叩き、内面上方はスリ消し、下方には指おさえが残る。色調淡青灰色、胎土精良、焼成硬。

21号墳出土の須恵器の壺は、その形態より陶器編年Ⅰ-2、3と考えられ古墳時代中期後半と思われる。



第72図 21号墳出土遺物

## 第4章 黒田永山墳墓群の調査

### 1. A号墓

#### 〔位置〕

A号墓は、第1尾根に立地する3号墳の直下に存在する。

#### 〔墳丘〕(第74図)

調査前は墳丘の高まりは割合に明確であり、遺構が存在するのはすでに予想していた。調査の結果、墳丘とみられていた高まりは、前述した3号墳に伴う墳丘であることがわかった。そして、3号墳の直下に方形周溝の存在が明らかになった。

発掘調査の結果、盛土はほとんど削平され、かろうじて西側と北側で約10cm程認められるにすぎない。そして、地山まで掘り下げて周溝と主体部が検出されたのである。

周溝は、軸を北西に向けた方形をなし、東西辺の中央部より東側には溝が掘り込まれているが、西側に向うほど不明瞭になり、西側・南側は、わずかな窪みが認められるにすぎない。北西の溝は、幅1.1m、深さ約30cmを測り、北東の溝は、幅1.1m、深さ約50cmを測る。

#### 〔埋葬施設〕(第73図)

東西辺の中心より東側に検出された。主軸はN21°Wに配されている。地山面まで掘り下げてはじめて検出されたため、棺の規模については正確につかめない。残存していたのは両小口板の痕跡で、内法は1.8mを測る。また、棺材の厚さや棺底の有無についてはとらえることができなかった。

#### 〔出土遺物〕(第75図)

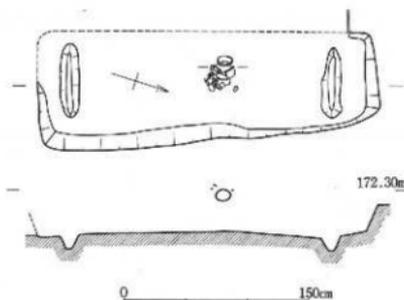
A号墓に関する遺物は、棺上面と、周溝内、盛土内で検出された。

棺上面の遺物は壺1点でほぼ完残している。棺を密封した後上に置いた土器が、棺が朽ちた際落ちこんだような状態で出土した。

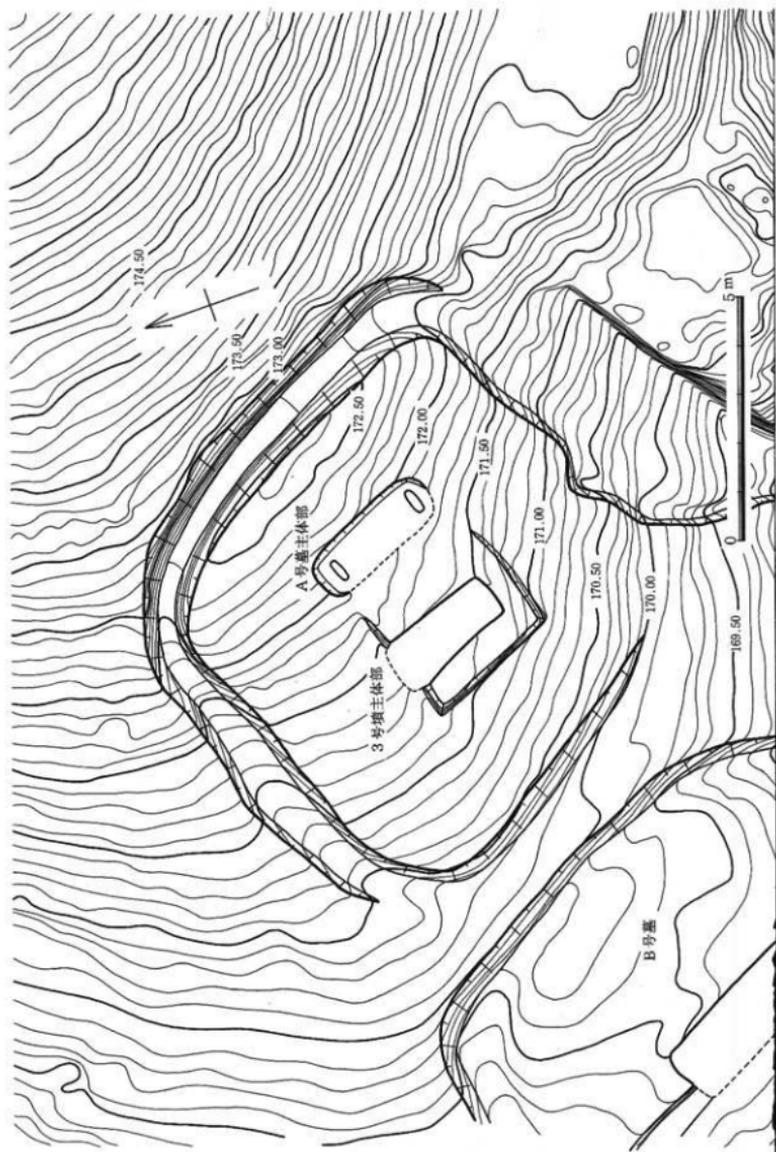
周溝内からは、北東隅底面に壺1点が、これもほぼ完残して検出された。また、東溝の中ほど底面に、高杯2点が検出されているが、墳丘からころげ落ちたものか、最初から溝底におかれたものかは判定しがたい。他に周溝内から壺の破片と高杯の破片が出土している。

盛土内からは、蓋の破片と高杯の破片が検出された。

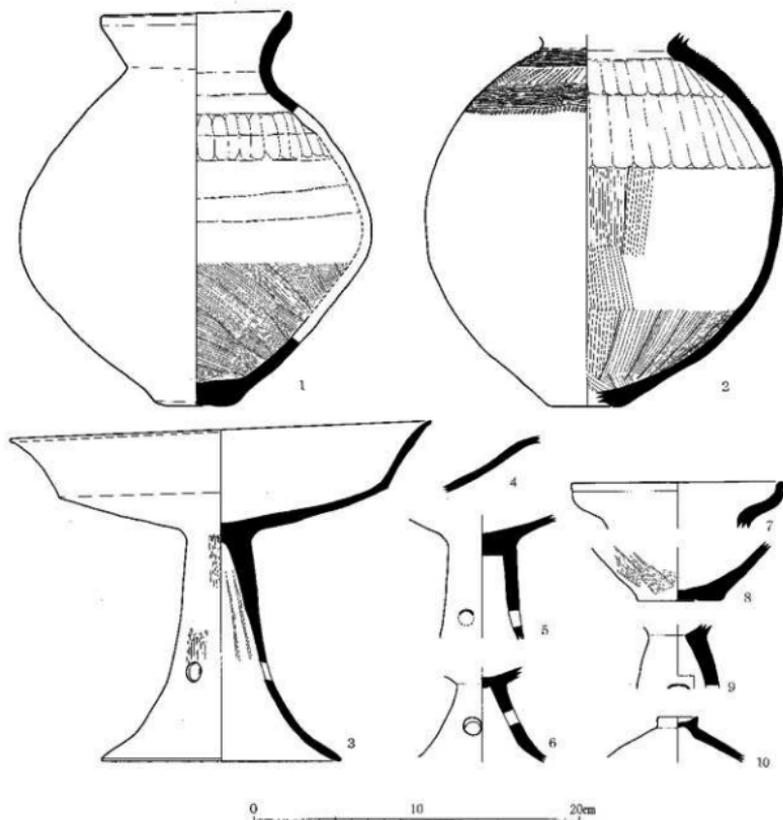
壺(2)は口縁部を欠いている。胴部は長楕円形で胴部最大径は中程に位置する。底部は窪み底である。頸部下方に10本を1単位とする櫛描波状線を2朱巡らし、その間に刺突列点文を巡らし、下方沈線の下にきざみ文を巡らす。外面は摩滅のため調整方法は不明、内面上方はナデ、下方は刷毛調整、色調淡黄白色。胎土2mm位の微砂を含む。焼成やや軟



第73図 A号墓主体部



第74图 A号墓平面图



第75図 A号墓出土遺物

壺(1)、口径11.5cm、器高24.4cm~24.7cm、口縁部は外反して立ち上り、口端部でやや内弯し丸くおさまる。頸部はよくしまり、胴部は算盤玉状で平底である。外面は摩滅が激しく調整方法は不明、胴部中程に藁の付着がみられる。口縁部内面はナデ、胴部内面下方は刷毛調整、色調淡黄褐色、胎土精良、焼成軟

壺(7・8)、口径12.7cm、口縁部と底部のみで胴部を欠いている。口縁部は外反し立ち上り、中程で2度内弯をくり返し口縁部は丸くおさまる。底部はほぼ平底で、胴部は直線的に外上方に開く。口縁部内外面はナデ、胴部外面は刷毛調整、底部外面は不調整、色調淡茶褐色、胎土1mm位の微砂を含む、焼成やや硬。

壺(10)は笠状の天井部に中央が凹んだつまみがつく。内外面共に摩滅が激しく調整方法は不明、色調淡黄褐色、胎土1mm位の微砂を含む、焼成軟。

高坏(3)、口径25.8cm、底径14.8cm、器高20.1cm~21.2cm、坏部はやや内弯して開く底部より外反する口縁部がつき口端部は丸くおさまる。脚柱部は「八」字状に開き、裾部でその度合が大きくなり口端部は丸くおさまる。脚部中程やや下方に外下方より内上方に3つの円孔が開けられている。坏部は摩滅が激しく調整方法は不明。

脚部外面には磨きが残る。色調淡赤黄色、胎土精良、焼成軟。他の高杯の脚柱部は円柱状のもの（5）、大きく「八の字」状に開くもの（6）、中実になるもの（9）の三種あり、主に外上方より内下方にむけて3つの円孔が開けられている。いずれも内外面共に磨減が激しく調整方法は不明、色調は赤褐色系統、胎土1mm位の微砂を含む、焼成軟、

A号墓出土の土器は、その形態より弥生時代後期後半のものと思われる。

## 2. B号墓

### 〔位置〕

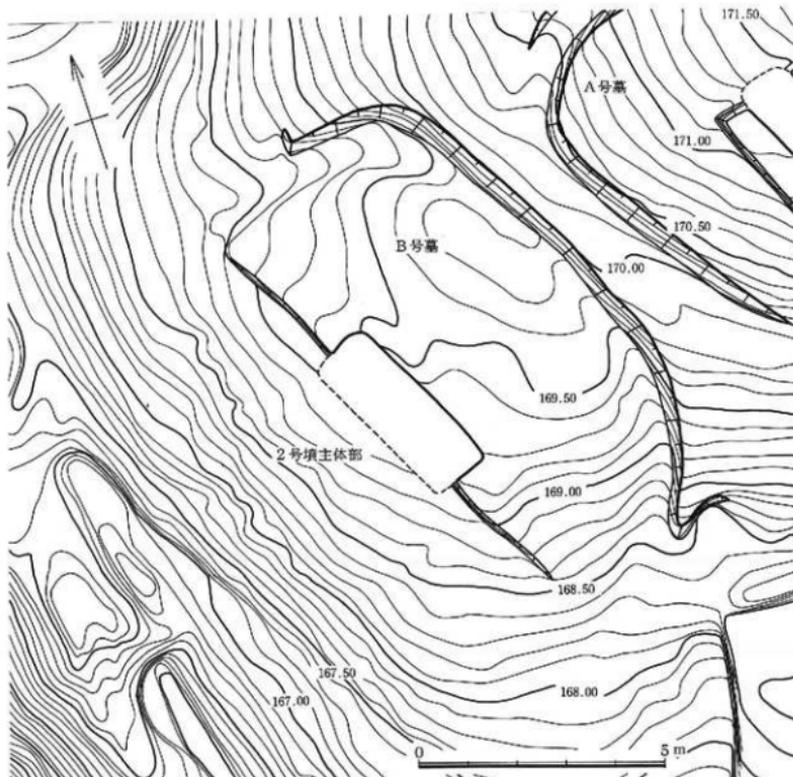
B号墓は、第2尾根のつけ根部分に立地する2号墳の直下に存在する。

### 〔墳丘〕(第76図)

調査前は、墳丘の表徴は割合に明確であり、遺構が存在することはすでに予想していた。調査の結果、墳丘とみられていた高まりは、前述した2号墳にともなう墳丘であることがわかった。そして、2号墳の直下に方形周溝墓の存在が明らかになった。

発掘調査の結果、盛土はほとんど削平されており、墳丘の規模及び墳形について明確にし得ない。地山まで掘り込まれた周溝底部がかろうじて検出されたにすぎない。

周溝は、北側から東側へめぐっており、西辺はくずれてはっきりしない。幅は復原すると、1m前後になると



第76図 B号墓平面図

思われる。周溝の軸は北西を向いており、隣接するA号墓とほぼ同じ向きをとる。西側は、地山を整形して、墳丘の肩部を形成している。

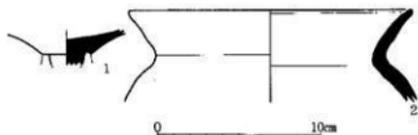
〔埋葬施設〕

B号墓の主体部は、盛土と共に失なわれており、明確ではない。おそらく、木棺直葬であったと思われる。

〔出土遺物〕(第77図)

B号墓検出に係る遺物は、周溝から出土している。

周溝の北端付近から、高坏の破片が1かたまりになって出土した。これは、同一個体になると思われるが、復原不可能であった。周溝の北東隅より、高坏の破片、東側周溝内に甕の破片がそれぞれ検出された。



第77図 B号墓出土遺物

これらの土器は、最初から溝におかれたものか、墳丘からころげ落ちたものかは断定しがたい。

甕(2)、口径17.2cm、口縁部は外反ぎみに立ち上り口端部は丸くおさまる。口端部内面に沈線様の緩い段がつく。胴部は内湾してあまり開かないと思われる。口縁部内外面はナデ、胴部内面は篋削りと思われる。胴部外面は摩滅のため不明、色調淡黄褐色、胎土2～3mmの小石を含む、焼成軟。

高坏(1)は坏底部のみであり、全体の器形は不明である。脚部との接合方法を知る好例であり、脚部さしこみ部として窪んでいる。器壁の摩滅がはげしく調成方法は不明、色調外面淡黄褐色内面淡赤褐色、胎土1mm位の微砂を含む、焼成軟。

2器種共に全体像が不明であり詳しいことはわからないが、恐らく庄内期のものであろう。

### 3. C号墓

#### 〔位置〕

C号墓は、第1尾根の東から西へ下降する斜面の南西側に位置している。そして、8号墳の南側15m、7号墳の南西10mの所に存在する。

#### 〔墳丘〕(第78図)

調査前については、急斜面のみられるだけで、遺構が埋存していることはまったく予感していなかった。

後世の堆積土や流出土を除去した結果、地山に掘り込まれた周溝と主体部の痕跡を確認した。

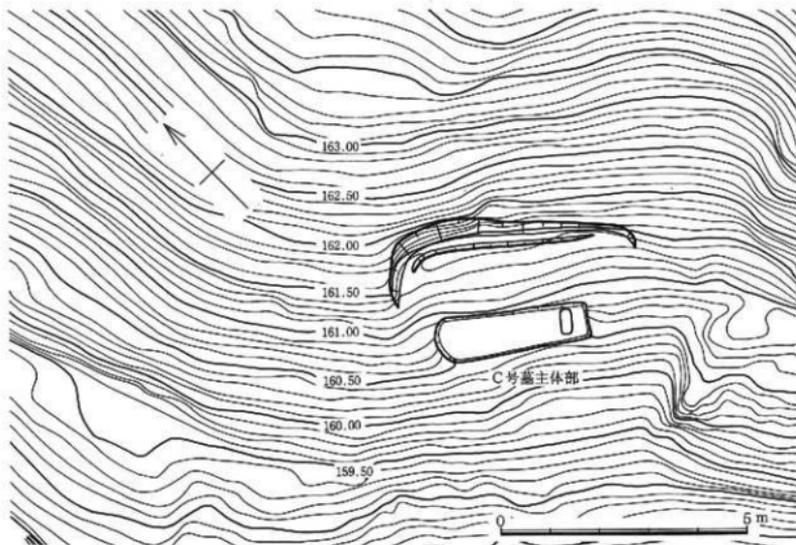
周溝は、その長辺を等高線に平行に配置されており、東辺は地山の旧地形の斜面地を、大きくカットして形成されている。盛土がほとんど削平されているため、墳丘の規模及び墳形については明確にし得ない。

#### 〔埋葬施設〕(第79図)

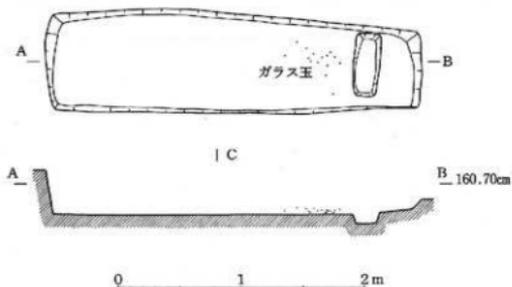
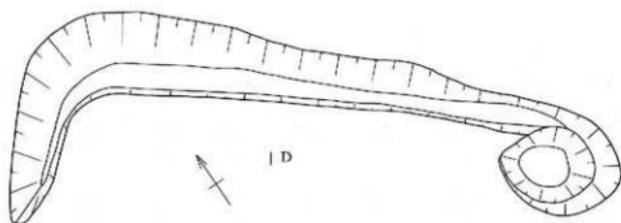
周溝内辺から1.5m程西側で検出された。地山の旧地形を利用しているため、主体部東辺は、大きく地山をカットして壁にしている。全長3.10m、幅70~90cmを測り、東壁の高度は50cmを測る。そして、東南端に小口板の痕跡が検出された。深さ9cm程であった。主体部の西壁は4cm程しか残っていない、かなりの盛土をして棺を収めたものと考えられる。なお、ガラス玉が東南部から検出されているため、頭部を南側に安置したと考えられる。

#### 〔出土遺物〕(第81図)

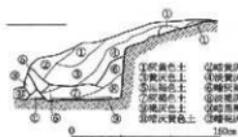
棺の東南部の小口板の北側に、ちらばった状態で、22個のガラス玉が出土した。棺底から2~3cm上の高さであった。装身具になると考えられる。



第78図 C号墓平面図



第79図 C号墓主体部



第80図 C号墓断面図

〔ガラス玉の材料同定〕

C号噴出土のガラス玉の原材料が、ソーダガラスであるのか鉛ガラスあるのか、分析依頼した。まず、ガラス玉をエチルアルコールに浸漬し洗浄後乾燥し、試料とした。分析方法はジョリー比重計による測定法で

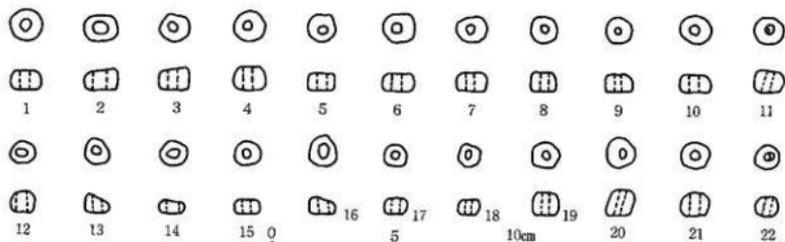
- a : 試料皿をバネに吊した状態の目盛  
 b : 試料皿にガラス玉をのせた状態の目盛  
 c : 試料皿にガラスをのせ、水中に浸けた状態の目盛

$$\frac{\text{比重 } b - a \text{ (重量)}}{b - c \text{ (体積)}} \approx 2.23$$

の結果を得た。

アルカリガラスとしては、多少比重が少ないのは、製作中にガラス玉の中に入り込んだ気泡ないしガスのためと思われる。さらに精度の高い測定を行うためには、破壊により粉末状とすることが必要なため、今回はできなかった。

ガラス玉の色は、やや透明な淡青色と不透明な濃青色のものがあり、これらの色の原因として、銅 (Cu) によるものと思われる。さらに蛍光X線分析等の化学分析により、着色剤の元素分析が望まれる。



第81図 C号紫出土ガラス玉

#### 4. D号墓

〔位置〕

D号墓は、第1尾根の東から西へ下降する斜面の南側に立地し、最も低い位置にある。そして、E号墓の南に隣接する。

〔墳丘〕(第82図)

調査前については、地形的にみても急斜面がみられるだけで、遺構が埋存していることはまったく予想もしていなかった。

後世の堆積上や流出土を除去した結果、地山に掘り込まれた周溝を確認したのである。

周溝は、その長辺を等高線に平行に形成されており、北側の溝しか残存していない。盛土はまったく削平され流失しており、そのため盛土の状況や墳丘の規模及び墳形について明確にし得ない。

〔埋葬施設〕

D号墓の主体部は、盛土と共に失われており、明確ではない。おそらく木棺直葬になるとされる。

〔出土遺物〕

D号墓検出の際、遺物は出土していないため、はっきりした時期を決めることはできなかった。

## 5. E号墓

### 〔位置〕

E号墓は、第1尾根の東から西へ下降する斜面の南側立地している。そして、H号墓の東隣、そしてD号墓の北隣に位置している。

### 〔墳丘〕（第82図）

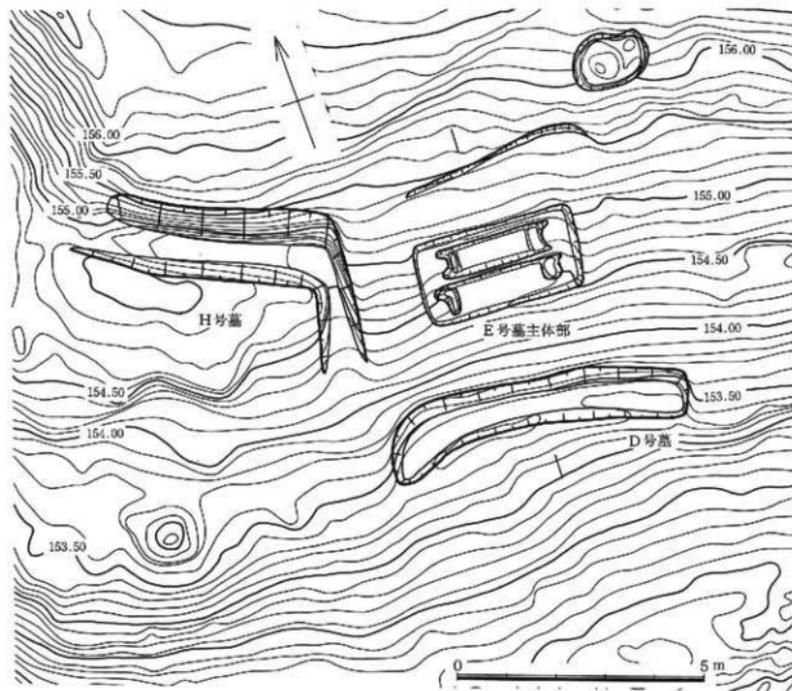
調査前は、地形的にみても急斜面であり、遺構の存在など予想していなかった。

後世の堆積土や表土を除去した結果、周溝の一部と主体部を検出することができた。

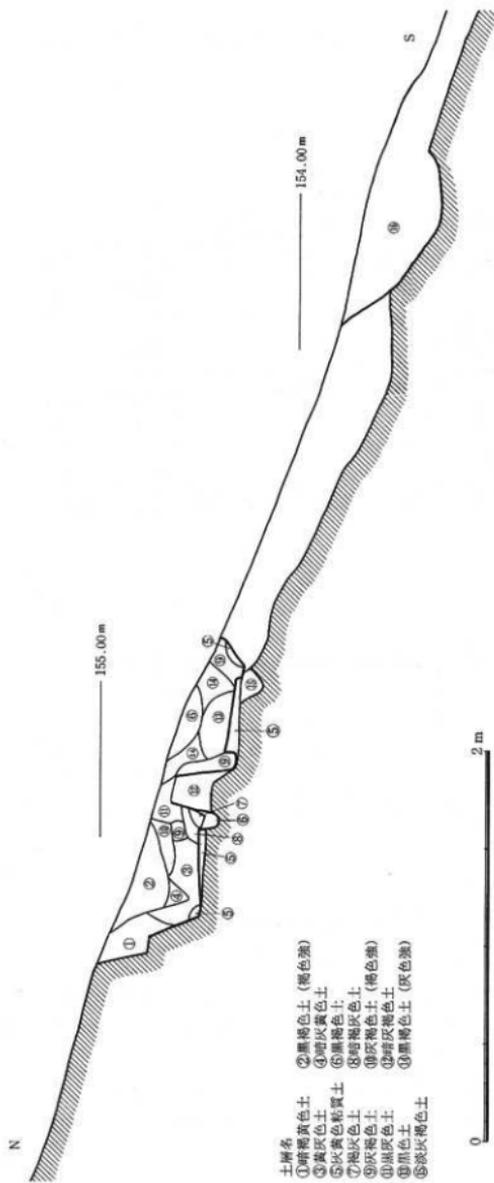
周溝は、長辺になる北側の溝肩が、等高線にほぼ平行に形成されている。かろうじて地山まで掘り込まれた部分しか残っていないため、溝の規模と配置等について明確にすることができない。

### 〔埋葬施設〕（第84図）

周溝から約1m程南側で検出された。墓壇の大きさは、長さ3.3m、幅1.7mを測る長方形で、軸を東に配している。そして、墓壇主軸と同様東に軸をもつ木棺2基が、並置されていた。木棺の埋葬方法は、墳丘中央部に地山まで掘り下げて、墓壇を穿ち、整床し、1号・2号木棺を安置し密封したものである。墓壇内には粘土や礫など

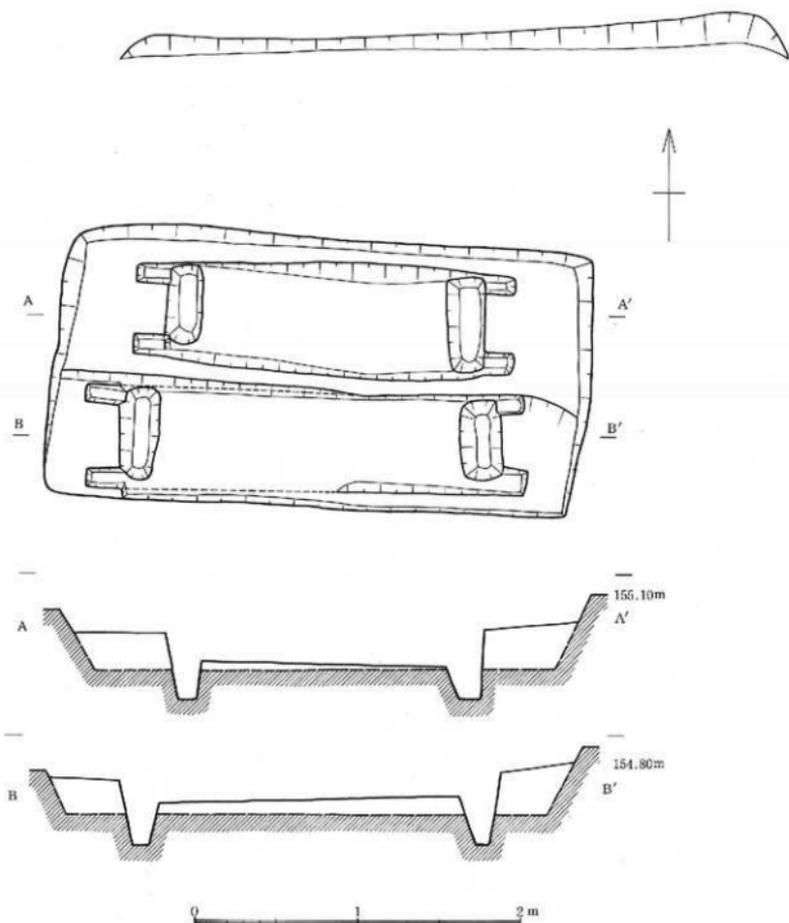


第82図 D号墓・E号墓・H号墓平面図



- 土層名
- ① 暗褐色土 (褐色強)
  - ② 暗褐色土 (褐色強)
  - ③ 灰棕色土
  - ④ 暗灰棕色土
  - ⑤ 暗褐色土
  - ⑥ 暗褐色土
  - ⑦ 暗棕色土
  - ⑧ 暗褐色土 (褐色強)
  - ⑨ 灰棕色土
  - ⑩ 暗褐色土
  - ⑪ 暗褐色土 (褐色強)
  - ⑫ 暗褐色土 (褐色強)
  - ⑬ 暗褐色土 (褐色強)
  - ⑭ 暗褐色土 (褐色強)
  - ⑮ 暗褐色土 (褐色強)
  - ⑯ 暗褐色土 (褐色強)
  - ⑰ 暗褐色土 (褐色強)

第83図 E号横断面図



第84図 E号墓主体部

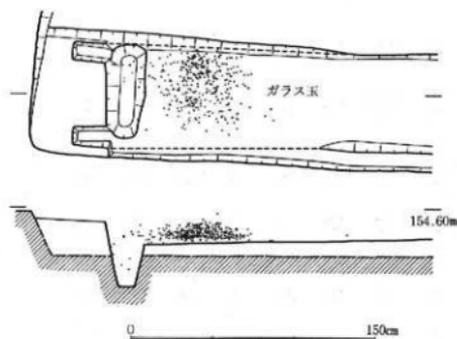
はみあたらず、埋葬は簡単にされたと考える。

1号木棺：墓壇内北側に設けられた埋葬遺構である。全長2.3m、幅70cmで、棺の内法は、長さ1.5m、幅60cm、深さ25cmを測った。両小口板・両側板の掘込みと、木口部に側板の切込みが明瞭に残る。棺材の厚さは10cm前後とられる。副葬品はなにも出土しなかった。

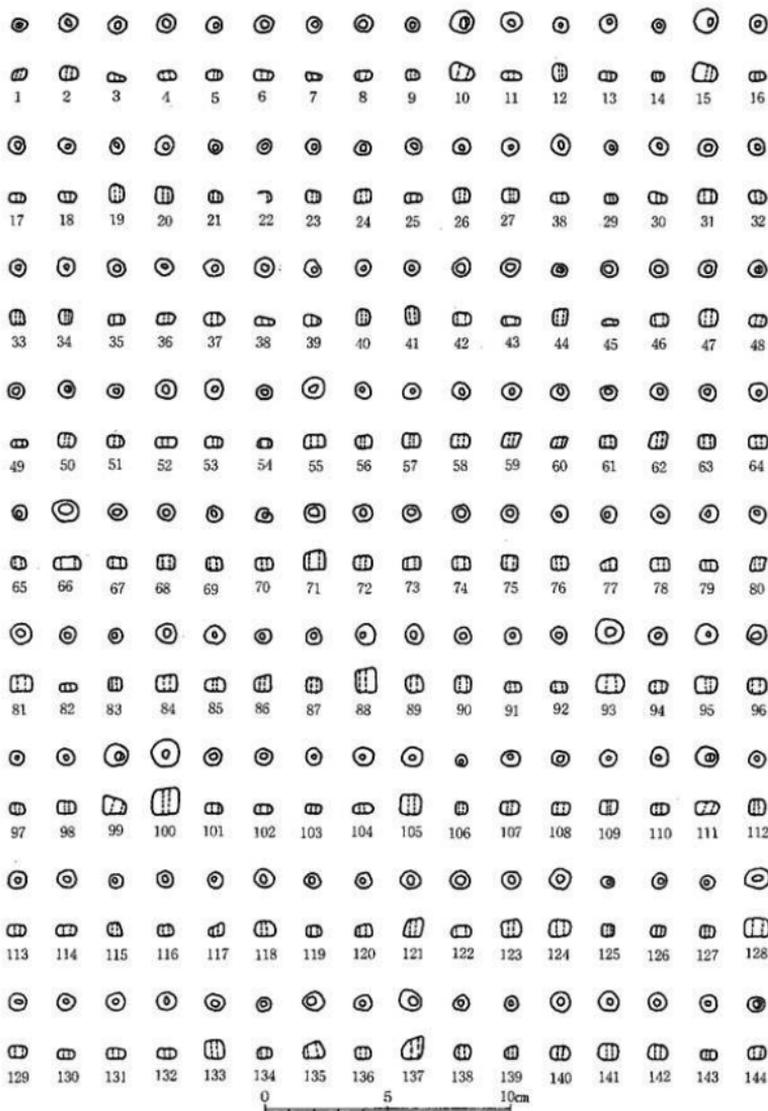
2号木棺：墓壇内南側に設けられた埋葬遺構である。全長2.7m、幅60cmで、棺の内法は、長さ1.9m、幅50cm、深さ20cm程を測った。両小口板、両側板の掘込みと、小口部に側板の切込みが明瞭に残る。棺材の厚さは10cm前後とみられている。

〔出土遺物〕(第86～88図)

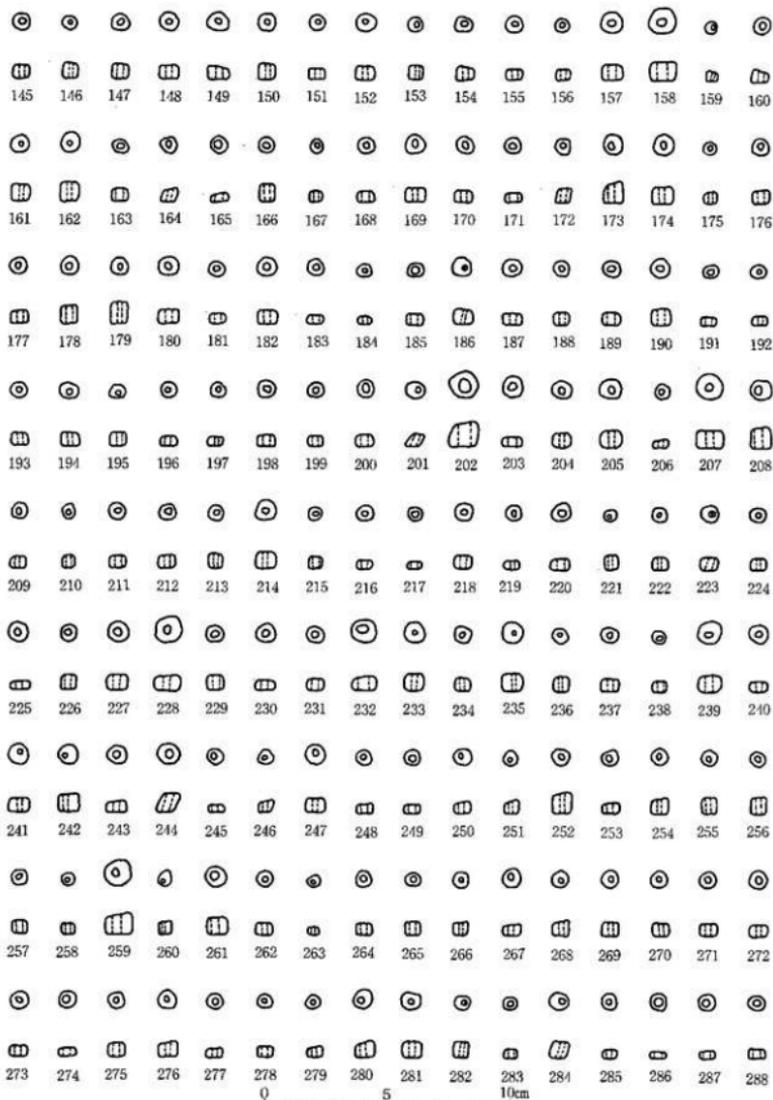
2号木棺の両小口板の東側に、ガラス玉406個が  
たまって出土した(第85図)。装身具になると考え  
られる。



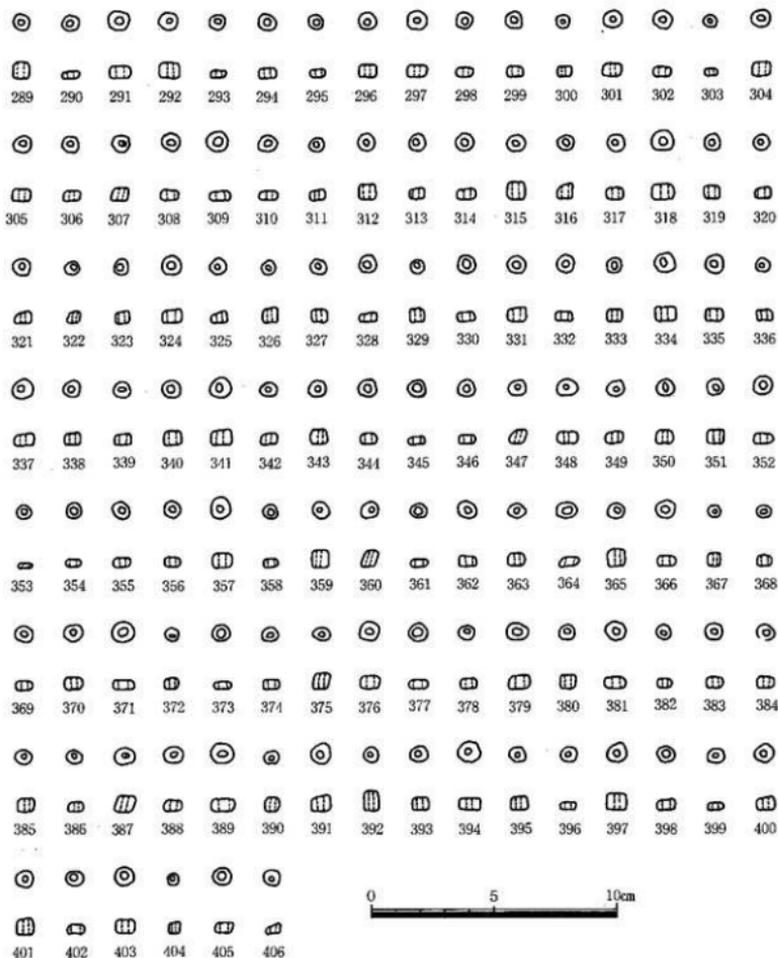
第85図 E号墓主体部玉出土状況



第86図 E号墓出土ガラス玉 (1~144)



第87図 E号墓出土ガラス玉 (145~288)



第88図 E号竈出土ガラス玉 (289~406)

No	長さ (mm)	幅 (mm)	内径 (mm)	色 調	No	長さ (mm)	幅 (mm)	内径 (mm)	色 調
C1	4	6.5	2	スカイブルー	10	3.8	5.0	2.0	新橋
2	4.5	6.8	3	スカイブルー	11	2.0	4.0	1.5	新橋
3	4.8	6.1	1.6	スカイブルー	12	3.8	3.0	0.8	新橋
4	4.8	6.7	1.8	水色	13	2.0	2.7	1.0	新橋
5	3.8	5.6	2	スカイブルー	14	3.9	5.0	1.0	水色
6	3.9	6.5	2	スカイブルー	15	2.0	3.4	1.4	新橋
7	3.9	6.3	1.8	スカイブルー	16	2.1	3.5	1.0	新橋
8	4	5.2	1.9	水色	17	2.0	3.2	1.5	水色
9	3.8	5.9	1.2	アサギ	18	2.1	3.3	1.0	水色
10	3.8	6.3	2	アサギ	19	3.7	3.2	1.0	新橋
11	4.8	6.0	2	サビアサギ	20	3.4	2.9	1.0	新橋
12	4.5	5.0	2.5	スカイブルー	21	2.1	3.0	1.3	水色
13	4.0	5.2	2.0	ナイルブルー	22	2.1	3.0	1.1	新橋
14	2.9	5.5	2.5	スカイブルー	23	2.5	3.1	1.0	水色
15	3.0	5.1	2.0	スカイブルー	24	2.9	3.2	1.0	新橋
16	3.5	6.2	3.0	ナイルブルー	25	2.0	3.5	1.2	水色
17	3.5	4.8	1.8	サビアサギ	26	2.9	3.3	1.0	アサギ
18	3.3	4.8	1.8	サビアサギ	27	3.0	3.5	0.8	水色
19	4.9	5.5	1.6	ナイルブルー	28	2.1	3.1	1.6	水色
20	5.5	5.9	1.5	サビアサギ	29	2.0	3.0	0.9	新橋
21	5.0	5.3	2.0	サビアサギ	30	2.5	3.9	1.0	ナイルブルー
22	4.1	5.0	2.0	紺アイ	31	3.0	3.8	1.7	サビアサギ
E-1	2.3	3.1	1.0	水色	32	2.8	3.4	1.1	新橋
2	2.8	3.6	1.0	新橋	33	3.0	3.4	1.0	新橋
3	1.9	3.8	1.0	新橋	34	3.0	3.6	0.9	新橋
4	2.0	3.7	1.5	新橋	35	2.1	3.5	1.5	新橋
5	2.1	3.1	1.0	アサギ	36	2.1	3.9	1.0	新橋
6	2.0	4.0	1.8	新橋	37	2.8	4.0	1.1	新橋
7	1.8	3.0	1.2	ベビーブルー	38	1.8	4.0	1.5	新橋
8	2.0	3.6	1.5	新橋	39	2.2	3.3	1.3	新橋
9	2.1	3.0	1.0	新橋	40	3.1	3.1	1.0	新橋

表-12 C号墓・E号墓出土ガラス玉(1)

No	長さ (mm)	幅 (mm)	内径 (mm)	色調	No	長さ (mm)	幅 (mm)	内径 (mm)	色調
41	3.7	3.0	1.0	水色	72	2.9	3.9	1.2	新橋
42	2.5	3.8	1.9	水色	73	2.5	3.5	1.5	アサギ
43	1.8	3.8	1.9	新橋	74	2.8	3.5	1.5	新橋
44	3.3	3.0	1.2	新橋	75	3.1	3.2	1.2	アサギ
45	2.7	3.5	1.8	新橋	76	2.8	3.1	1	新橋
46	3.3	3.5	1.5	新橋	77	2.5	3.1	1	新橋
47	3.4	3.5	1.3	新橋	78	2.5	3.9	1	新橋
48	2.2	3.6	1.1	新橋	79	2.1	3.5	1	新橋
49	1.7	3.2	1.2	新橋	80	2.8	3.1	1.1	新橋
50	2.9	3.2	1.0	新橋	81	3.2	4.3	1.7	新橋
51	2.3	3.2	1.2	新橋	82	1.8	3.4	1.2	水色
52	2.1	4.0	1.3	新橋	83	2.8	2.7	1	水色
53	2.2	4.0	1.0	アサギ	84	3.5	4.1	1.2	サビアサギ
54	1.9	3.0	1.5	新橋	85	2.8	4	1	新橋
55	2.5	4.3	1.5	アサギ	86	3.5	3.2	1	新橋
56	2.7	3.5	0.9	新橋	87	3	3	1.1	新橋
57	2.9	3.7	0.7	新橋	88	4.9	4	1.2	スカイブルー
58	2.9	3.5	1.0	新橋	89	3.5	3.7	1.3	水色
59	3	4	1	新橋	90	3.2	3.2	1.3	新橋
60	2.2	3.5	1.2	水色	91	2	3.2	1.2	新橋
61	2.5	3.3	1.3	新橋	92	2.1	3.6	1.3	ナイルブルー
62	3.6	3.8	1.2	ナイルブルー	93	4.8	5.5	2.0	サビアサギ
63	2.9	3.3	1.2	ベビーブルー	94	2.6	3.5	1.3	アサギ
64	2.9	3.8	1	新橋	95	3.2	4.3	0.8	シアン
65	2.3	3	1.2	水色	96	3.0	4.0	1.5	新橋
66	2.8	5.3	2.9	新橋	97	2.2	3.0	0.9	新橋
67	2.4	3.9	1.6	新橋	98	2.6	3.5	1.0	新橋
68	3	3.5	1.5	水色	99	3.8	4.8	1.5	新橋
69	2.5	3.1	1.2	水色	100	5.5	5.5	1.5	ナイルブルー
70	3.8	3.5	1.1	新橋	101	2.1	3.3	1.6	新橋
71	4	4.2	2	ナイルブルー	102	1.9	3.5	1.5	新橋

表-13 E号系出土ガラス玉(2)

No	長さ (mm)	幅 (mm)	内径 (mm)	色 調	No	長さ (mm)	幅 (mm)	内径 (mm)	色 調
103	2.0	3.5	0.8	新橋	134	2.5	3	1.1	新橋
104	2.2	4.1	0.9	新橋	135	3.7	4.4	1.9	水色
105	4.0	4.2	1.3	アサギ	136	2.6	3.2	1.1	スカイブルー
106	2.6	2.4	0.8	新橋	137	4.8	4.6	1.5	新橋
107	2.7	4.0	1.0	新橋	138	2.8	3.3	1.2	アサギ
108	2.5	3.5	1.3	新橋	139	2.8	2.8	1	スカイブルー
109	3.0	3.2	0.8	新橋	140	2.8	4	1.3	紺ジョウ
110	2.1	3.9	1.0	紺アイ	141	3.2	4.1	1.1	新橋
111	2.7	4.6	2.0	新橋	142	3.0	3.8	1.2	新橋
112	3.2	3.2	1.0	新橋	143	2.0	3.5	1.1	新橋
113	2.5	3.5	1.2	スカイブルー	144	4.6	3.3	1.3	新橋
114	2.2	3.9	1.5	新橋	145	2.9	3.6	1.2	新橋
115	2.8	3	1	新橋	146	3.2	3.1	0.8	新橋
116	2.2	3.2	1.2	新橋	147	3.0	3.5	1.3	新橋
117	2.8	3.1	1	新橋	148	3.0	4.0	1.2	新橋
118	3.1	4.4	1.2	ナイルブルー	149	3.8	4.5	1.2	新橋
119	2.2	3.1	1.1	水色	150	4.3	3.8	1.0	新橋
120	2.5	3.4	1.2	水色	151	2.2	3.3	1.1	新橋
121	3.8	4.1	1.1	ナイルブルー	152	3.0	4.0	1.0	新橋
122	2.3	4	2	新橋	153	3.0	3.0	0.9	新橋
123	3.6	4	1.2	新橋	154	3.0	3.7	1.5	水色
124	3.4	4.3	1.3	新橋	155	2.4	3.7	1.5	水色
125	2.5	2.5	0.8	新橋	156	2.3	3.0	1.0	ナイルブルー
126	2.3	3.1	1.2	新橋	157	3.4	4.4	1.5	ナイルブルー
127	2.5	3.0	1.2	新橋	158	4.0	5.5	1.9	サビアサギ
128	3.9	5.2	1.9	新橋	159	2.2	2.5	0.8	アサギ
129	2.5	3.3	1.8	新橋	160	2.7	3.5	1.6	アサギ
130	2.0	3.5	1.1	新橋	161	3.5	3.9	1.2	アサギ
131	2.1	3.9	1.0	新橋	162	4.0	4.3	0.9	アサギ
132	2.0	4.0	1.3	新橋	163	3.7	3.2	1.5	新橋
133	4	4	1.4	新橋	164	2.9	3.6	1.1	ナイルブルー

表-14 E号墓出土ガラス工(3)

No	長さ (mm)	幅 (mm)	内径 (mm)	色 調
165	2.0	3.5	1.5	水色
166	3.7	3.1	1.2	新橋
167	2.3	2.8	1.0	ナイルブルー
168	2.3	2.7	1.4	スカイブルー
169	2.9	4.1	1.2	ナイルブルー
170	2.6	3.8	1.1	新橋
171	2.0	3.7	1.6	新橋
172	3.0	3.3	1.2	スカイブルー
173	4.5	4.0	1.2	新橋
174	3.5	4.5	1.2	新橋
175	2.5	2.8	1.0	水色
176	2.8	3.5	1.3	新橋
177	2.7	3.8	1.1	新橋
178	3.9	3.5	1.5	アサギ
179	4.5	2.5	0.7	水色
180	2.9	3.9	1.2	新橋
181	2.4	3.5	1.3	新橋
182	3.0	4.0	1.2	新橋
183	2.8	3.5	1.2	新橋
184	2.8	2.8	1.0	新橋
185	2.5	3.3	1.6	新橋
186	3.3	4.2	0.8	新橋
187	2.4	4.0	1.5	新橋
188	2.7	3.3	1.2	新橋
189	2.7	3.6	1.8	新橋
190	3.5	4.0	1.6	新橋
191	1.9	3.2	1.3	新橋
192	2.1	3.2	0.9	新橋
193	2.7	3.5	1.0	新橋
194	2.9	4.0	1.0	アサギ
195	2.9	3.2	1.1	紺ジョウ

No	長さ (mm)	幅 (mm)	内径 (mm)	色 調
196	2.0	3.5	1.1	新橋
197	1.9	3.2	1.0	水色
198	2.6	3.8	1.5	新橋
199	2.1	3.1	1.2	新橋
200	2.5	3.8	1.3	水色
201	2.8	4.0	1.1	水色
202	5.0	6.0	2.3	ナイルブルー
203	2.0	4.0	1.8	青磁色
204	3.1	4.0	1.1	新橋
205	3.8	4.4	1.2	新橋
206	1.8	3.1	1.0	ベビーブルー
207	3.9	5.6	1.6	ナイルブルー
208	4.3	4.1	1.3	新橋
209	2.3	3.4	1.0	スカイブルー
210	2.8	2.7	1.1	ベビーブルー
211	2.5	3.5	1.3	アサギ
212	2.7	3.5	1.5	水色
213	3.2	3.2	1.0	スカイブルー
214	3.5	4.2	1.0	スカイブルー
215	2.6	2.9	1.2	新橋
216	1.9	3.5	1.1	新橋
217	1.7	3.0	1.3	新橋
218	3.8	3.7	1.4	新橋
219	1.8	3.2	1.2	新橋
220	2.5	4.0	1.5	新橋
221	3.1	2.7	1.0	新橋
222	2.7	3.1	0.9	新橋
223	2.8	3.7	1.2	新橋
224	2.5	3.4	1.0	新橋
225	1.8	4.1	1.6	新橋
226	3.0	3.5	1.5	新橋

表-15 E号塚出土ガラス玉(4)

No.	長さ (mm)	幅 (mm)	内径 (mm)	色 調	No.	長さ (mm)	幅 (mm)	内径 (mm)	色 調
227	3.2	4.3	1.6	アサギ	258	2.2	2.9	1.1	ベビーブルー
228	3.2	5.5	1.3	ナイルブルー	259	4.5	5.6	1.4	サビアサギ
229	3.0	3.5	1.7	新橋	260	2.9	2.9	0.7	新橋
230	2.1	4.0	1.5	新橋	261	3.5	4.4	1.8	新橋
231	2.5	3.5	1.3	新橋	262	2.9	3.6	1.0	新橋
232	3.0	5.0	2.1	新橋	263	1.9	2.5	0.7	新橋
233	3.5	4.2	1.0	新橋	264	2.5	3.3	1.3	水色
234	2.7	3.3	1.0	新橋	265	2.9	3.2	1.1	スカイブルー
235	3.6	4.2	0.8	スカイブルー	266	2.9	3.1	1.0	ナイルブルー
236	3.1	3.2	0.8	新橋	267	2.3	3.8	1.2	スカイブルー
237	2.5	3.5	1.0	新橋	268	3.2	3.5	0.8	青磁
238	2.5	2.8	1.2	新橋	269	3.0	3.7	1.0	アサギ
239	3.6	4.8	1.5	新橋	270	2.9	3.6	1.1	新橋
240	2.1	3.8	1.5	新橋	271	2.8	3.8	1.1	新橋
241	2.9	4.5	1.0	青磁	272	2.4	4.0	1.2	新橋
242	3.8	4.1	1.0	青磁	273	2.2	3.7	1.4	新橋
243	2.5	4.1	1.3	スカイブルー	274	1.8	3.7	1.3	新橋
244	4.0	5.0	1.5	新橋	275	3.0	3.5	1.2	水色
245	1.7	3.4	1.2	新橋	276	3.2	4.0	1.0	アサギ
246	2.5	3.2	1.1	新橋	277	2.1	3.4	1.1	新橋
247	3.0	4.1	1.1	新橋	278	2.2	3.3	1.2	スカイブルー
248	2.0	3.3	1.1	青磁	279	2.3	3.1	1.0	ベビーブルー
249	2.0	3.3	1.5	新橋	280	3.4	4.0	1.2	水色
250	2.8	3.6	1.0	新橋	281	3.5	4.0	1.5	新橋
251	3.0	3.0	0.8	新橋	282	3.3	3.2	1.1	新橋
252	4.3	4.0	1.0	新橋	283	2.0	2.7	1.2	新橋
253	2.3	3.7	1.2	新橋	284	3.5	4.0	1.2	紺アイ
254	3.6	3.5	1.0	新橋	285	1.9	3.5	1.0	新橋
255	3.4	3.2	1.0	アサギ	286	1.5	3.5	1.5	新橋
256	3.7	3.1	1.0	水色	287	1.8	3.5	1.3	新橋
257	2.8	3.2	1.4	アサギ	288	2.0	3.5	1.6	新橋

表-16 E号墓出土ガラス玉(5)

No	長さ (mm)	幅 (mm)	内径 (mm)	色 調	No	長さ (mm)	幅 (mm)	内径 (mm)	色 調
289	3.5	3.5	1.2	新橋	320	2.5	3.2	1.2	新橋
290	1.6	3.2	1.2	新橋	321	2.8	3.8	1.1	新橋
291	2.5	4.2	1.5	新橋	322	2.4	3.0	1.0	水色
292	3.5	4.0	1.0	新橋	323	2.7	3.0	1.2	水色
293	1.5	3.1	1.4	新橋	324	2.8	4.0	1.7	アサギ
294	2.1	3.5	1.4	新橋	325	2.5	3.2	1.1	新橋
295	1.9	3.0	1.2	新橋	326	3.2	3.1	1.0	新橋
296	2.8	3.7	1.3	新橋	327	2.8	3.1	1.0	新橋
297	2.7	4.0	1.5	新橋	328	2.0	3.8	1.5	青磁
298	2.0	3.5	1.5	新橋	329	2.9	3.0	1.1	新橋
299	2.3	3.5	1.2	新橋	330	2.0	3.8	1.8	新橋
300	2.2	2.8	0.8	新橋	331	3.1	4.0	1.5	新橋
301	2.8	3.9	1.0	新橋	332	2.0	3.7	1.5	新橋
302	2.2	3.9	1.5	青磁	333	2.5	3.2	1.2	新橋
303	1.6	2.8	1.0	青磁	334	2.9	4.3	1.2	新橋
304	3.0	3.9	1.5	紺ジョウ	335	2.8	3.8	1.3	新橋
305	2.8	3.9	1.5	ナイルブルー	336	2.2	3.0	1.1	アサギ
306	2.1	3.2	1.1	ナイルブルー	337	2.5	4.2	1.2	新橋
307	2.9	3.5	1.0	新橋	338	2.6	3.2	1.2	新橋
308	2.2	3.8	1.7	新橋	339	2.4	3.4	1.4	新橋
309	2.0	4.2	1.7	新橋	340	3.0	3.6	1.4	新橋
310	2.0	3.5	1.5	新橋	341	3.3	4.2	1.2	新橋
311	2.3	3.1	1.1	水色	342	2.7	3.3	1.1	青磁
312	3.2	3.5	1.2	新橋	343	3.2	3.5	1.0	新橋
313	2.5	3.2	1.3	水色	344	2.2	3.5	1.7	新橋
314	2.3	3.8	1.5	新橋	345	1.8	3.5	1.8	若葉
315	3.8	3.8	1.5	新橋	346	2.0	3.5	1.4	新橋
316	3.2	3.2	1.5	新橋	347	3.1	3.7	0.8	新橋
317	2.4	3.5	1.4	新橋	348	2.6	4.1	1.2	新橋
318	3.1	4.4	1.3	青磁	349	2.9	3.7	1.2	新橋
319	2.8	3.2	1.3	新橋	350	2.9	3.6	0.9	新橋

表-17 E号墓出土ガラス玉(6)

No	長さ (mm)	幅 (mm)	内径 (mm)	色 調	No	長さ (mm)	幅 (mm)	内径 (mm)	色 調
351	2.9	3.5	1.3	アサギ	382	2.0	2.0	1.0	新橋
352	2.2	3.9	1.7	新橋	383	2.2	3.5	1.5	紺アイ
353	1.1	3.0	1.2	新橋	384	2.5	3.5	1.2	新橋
354	1.8	3.2	1.2	ベビーブルー	385	2.9	3.5	1.0	新橋
355	2.0	3.5	1.2	新橋	386	2.0	3.1	1.0	新橋
356	2.1	3.5	1.2	新橋	387	3.5	4.1	1.2	アサギ
357	3.0	4.2	1.3	アサギ	388	2.5	3.9	1.5	新橋
358	1.9	3.0	1.2	新橋	389	2.8	4.8	1.8	ナイルブルー
359	3.7	3.5	1.0	紺アイ	390	3.2	3.2	1.0	アサギ
360	3.5	3.5	1.0	新橋	391	3.4	4.0	1.2	アサギ
361	1.8	3.2	1.2	ベビーブルー	392	4.1	3.1	1.0	新橋
362	2.1	3.5	1.5	新橋	393	2.8	3.6	1.2	ナイルブルー
363	3.0	3.7	1.3	アサギ	394	2.6	4.5	1.3	サビアサギ
364	2.0	4.0	2.0	新橋	395	2.9	3.4	1.1	新橋
365	3.5	3.5	1.3	アサギ	396	1.8	3.1	1.1	ベビーブルー
366	2.2	3.8	1.7	新橋	397	3.6	4.0	1.0	アサギ
367	3.8	2.7	1.0	新橋	398	2.5	3.8	1.5	新橋
368	2.4	3.0	1.0	新橋	399	1.8	3.3	1.1	新橋
369	2.1	3.4	1.5	新橋	400	2.9	3.9	1.4	新橋
370	3.5	4.0	1.5	新橋	401	3.8	3.7	0.9	アサギ
371	2.0	4.2	1.7	新橋	402	2.0	3.4	1.6	新橋
372	2.3	2.9	1.0	新橋	403	3.0	4.0	1.7	新橋
373	1.8	3.5	1.7	新橋	404	2.8	2.2	1.1	ベビーブルー
374	2.1	3.3	1.2	ナイルブルー	405	2.2	3.9	1.8	新橋
375	3.3	3.5	1.1	アサギ	406	2.1	3.1	1.1	アサギ
376	2.9	4.1	1.5	アサギ					
377	2.0	4.0	1.8	新橋					
378	2.1	3.2	1.0	ナイルブルー					
379	2.9	4.3	1.7	新橋					
380	3.0	3.2	1.2	新橋					
381	2.5	4.2	1.3	新橋					

表 18 E号島州土ガラス(7)

## 6. F号墓

### 〔位置〕

F号墓は、第1尾根の東から西へ下降する斜面に立地し、9号墳の南隣に位置している。

### 〔墳丘〕(第89図)

調査前は、緩やかな斜面地がみられるだけで、遺構の存在については、予想していなかった。

表土や後世の堆積土をとり除くと、地山を掘り込んだ溝と、地山を整形してマウンドに利用した痕跡とが検出された。

周溝は東側に残存しているが、北側は9号墳によって削平され不明である。南側に若干痕跡がみられるが、これも不明である。復原すると、一辺7mの方形になると思われる。

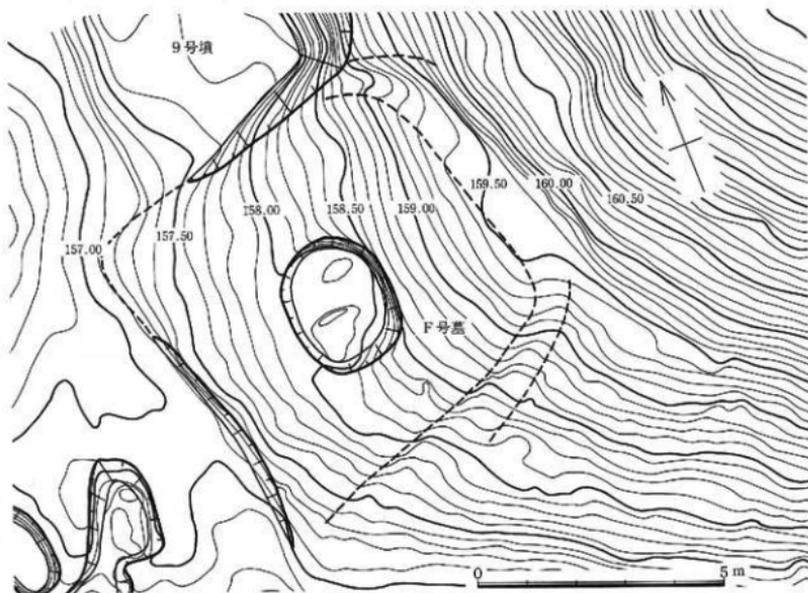
### 〔埋葬施設〕

中央部に長径2.7m、短径2.2mの楕円形の土壇がみとめられたが、これが埋葬施設になるかどうかは断定しがたい。むしろ、盛土とともに流失してしまった可能性の方が強い。

### 〔出土遺物〕(第90図)

溝の北東部で、土師器の壺片、南側の溝痕跡地点でも、壺の破片が出土している。

壺(4)、口径15.2cm、口縁部は外反して立ち上り口端部はやや面を作る。頸部には貼付突帯を巡らす。口端部内外面はナデ、口縁部内外面は刷毛調整、胴部内外面は摩滅のため不明、色調淡黄褐色、胎土1mm位の微砂を含

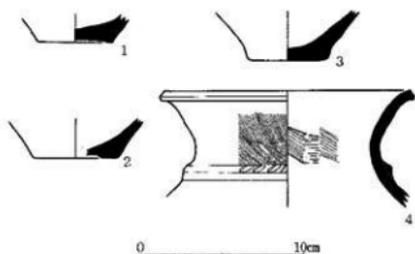


第89図 F号墓平面図

む、焼成軟。

他の3点は壺の底部と思われる。窪み底になるもの(1. 2)、平底になるもの(3)の2種であり、そのいずれもが摩滅がはげしく調整方法は不明、色調は黄褐色系統、胎土精良、焼成やや硬。

F号墓出土の十器は2時期にあり、壺の口縁はその形態により弥生時代中期後半と思われる。又壺の底部は弥生時代後半と思われる。



第90図 F号墓出土遺物

## 7. G号墓

### 〔位置〕

G号墓は、第1尾根の東から西へ下降する斜面に位置しており、H号墓の北西隣、F号墓の西隣に存在する。

### 〔墳丘〕(第91図)

調査前は、9号墳と11号墳にはさまれた緩やかな斜面がみられるだけで、明らかな表徴はなく、遺構の存在など予想していなかった。

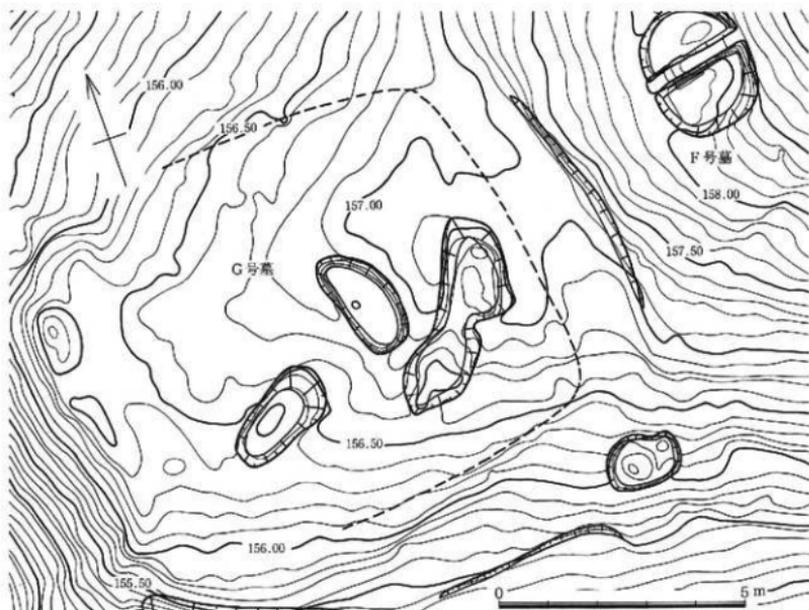
表土や後世の堆積土をとり除くと、地山を整形した痕跡がみられた。F号墓側に30cm程の段がみとめられ、その西側に南北辺5m、東西辺6mの方形の平坦地が検出できた盛土は削平されており、墳丘の規模については明確にできない。この地山を整形した段というのは、周溝の痕跡と思われ、盛り土が流失したために地山を掘り込んだ東肩部が残ったものと考えられよう。

### 〔埋葬施設〕

方形の平坦部に3ヵ所ほど土坑が検出されたが、形が不定形で遺物も含まれていないことなどから、埋葬遺構とは考えがたく、墳丘とともに流れたと考えられる。おそらく、木棺直葬であろう。

### 〔出土遺物〕

東側の周溝部分から土師器片が出土しているが、時期は明確にしがたい。



第91図 G号墓平面図

## 8. H号墓

### 〔位置〕

第1尾根の東から西へ下降する斜面の南西端に立地し、11号墳の南側に位置している。

### 〔墳丘〕（第82図）

調査前は、11号墳の南裾の斜面のみみられるだけで、遺構の存在など予想していなかった。

表土や後世の堆積土をとり除くと、地山を掘り込んだ溝を検出した。周溝は長辺を等高線に平行に形成されており、北辺の溝幅は1.5m、深さ90cmを測る。東辺の溝幅は70cm、深さは30cm程を測った。この周溝の南西側には、一辺5m程の方形のなだらかな平坦地のみみられるが、墳丘の基底部と思われる。盛土が流失しているため、墳丘の規模について明確にすることができない。

### 〔埋葬施設〕

盛土とともに流失しており、不明である。おそらく木棺直葬になるであろう。

### 〔出土遺物〕（第92図）

堆積土をとりのぞき溝の痕跡を検出した面ぐらいで、盛土の流失土と思われる土層の中から、土師質の壺の破片を検出した。

壺の底部（2、3）は共に窪み底で、内外面共に刷毛調整を行ったものと思われる。壺の頸部（1）は8本の櫛描沈線とそのド

に刺突列点を巡し、内面は指おさえが残る。底部は黄褐色、頸部は淡茶褐色、共に胎土は1mm～2mmの微砂を含む、焼成硬。

H号墓出土の土器は、その形態より弥生時代後半のものと思われる。



第92図 H号墓出土遺物

## 9. I号墓

### [位置]

第2尾根の北から南へ下降する斜面の西側に立地しており、16号墳の直下に存在する。

### [墳丘] (第63図)

調査前については、尾根の西斜面が見られるだけで墳丘などの高まりは認められず、遺構の存在など予想していなかった。調査によって溝が確認された。

周溝は2基が切り合って検出されたが、北側の溝は、前述したように16号墳ともなう周溝であり、南側の溝の方が古いことがわかる。それゆえ、南側の溝がI号墓ともなう周溝になると考えられた。

墳丘についても流失しているため規模を明確にすることはできない。

周溝は、幅1.3m、深さ30cm程が残存していたにすぎない。

### [埋葬施設]

盛土流失ともない、埋葬施設も失われたと考えられる。おそらく木棺直葬になると考える。

### [出土遺物]

周溝内から土師質の土器片を検出した。I号墓ともなうものとするが、時期を明確にはできなかった。

## 10. J号墓

### 〔位置〕

J号墓は、第2尾根の北から南へ下降する斜面にあり、19号墳の直下に位置する。

### 〔墳丘〕(第67図)

調査前は、緩やかな斜面がみられるだけで、遺構の存在などまったく予想していなかった。調査の結果、溝・埋葬施設を検出した。

後世の堆積土や流失土を除去すると、地山面に掘り込まれた溝と棺の痕跡を検出した。前述のように、溝・木棺の痕跡とも2基ずつみられ、それぞれ北側に位置している方が、古墳にともなう遺構であった。

J号墓にともなう周溝は、半円にめぐっており、幅1.1m、深さ60cm程を測った。

墳丘が流失しているため、正確な墳丘規模や墳形については、明確にしがたい。

### 〔埋葬施設〕

J号墓にともなう埋葬施設は、南側に位置している方で、西端が欠損している。残存長は1.7m、幅60cm程で、楕形の木棺直葬であろう。

### 〔出土遺物〕(第93図)

周溝内から土師器の破片が検出された。

破の口縁部は、内弯して立ち上り口端部は丸くおさまる。口縁部中程に刺突列点が入る。色調淡赤褐色、胎土精良、焼成やや硬。

J号墓出土の土器は、その形態より弥生時代後期後半と思われる。



第93図 J号墓出土遺物

## 11. K号墓

### 〔位置〕

K号墓は、第2尾根の南へ下降する斜面に立地しており、J号墓の東側約9mのところまに位置する。

### 〔墳丘〕(第94図)

調査前は、緩やかな斜面のみみられるだけで、遺構の存在などまったく予想していなかった。調査の結果、溝を検出した。

後世の堆積土や流出土を除去すると、地山面に掘り込まれた溝を検出した。

周溝は一部しか残存していない。幅50cm、深さ30cmを測る。

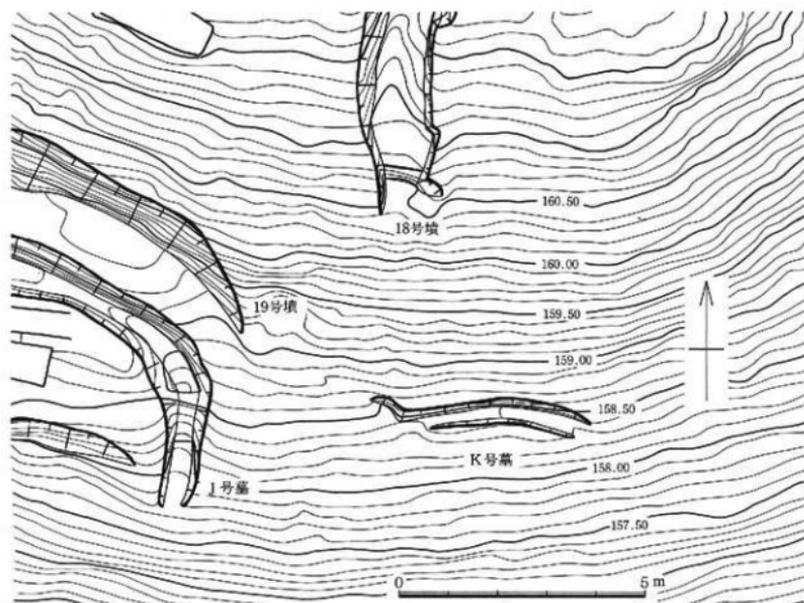
墳丘が流失しているため、正確な墳丘の規模や墳形について明確にしがたい。地形の低に南側にかんりの盛土をして、墳丘を形成したものと考えられる。

### 〔埋葬施設〕

K号墓にともなう埋葬施設は検出されず、墳丘とともに流れたものであろう。おそらく木棺直葬になると考える。

### 〔出土遺物〕

K号墓検出に係る遺物は出土していない。時期を明確にはしがたい。



第94図 K号墓平面図

## 12. L号墓

### 〔位置〕

L号墓は、第2尾根の南へ下降する斜面の南裾近くにあり、K号墓の南約13m下にある。

### 〔墳丘〕(第95図)

調査前は、緩やかな斜面のみられるだけではっきりした表徴はなく、遺構の存在などまったく予想していなかった。調査の結果、溝の一部を検出した。

後世の堆積土や流出土を除去すると、地山面に掘り込まれた溝の北西部が検出された。溝幅50cm前後、深さ20cm前後が残存していた。

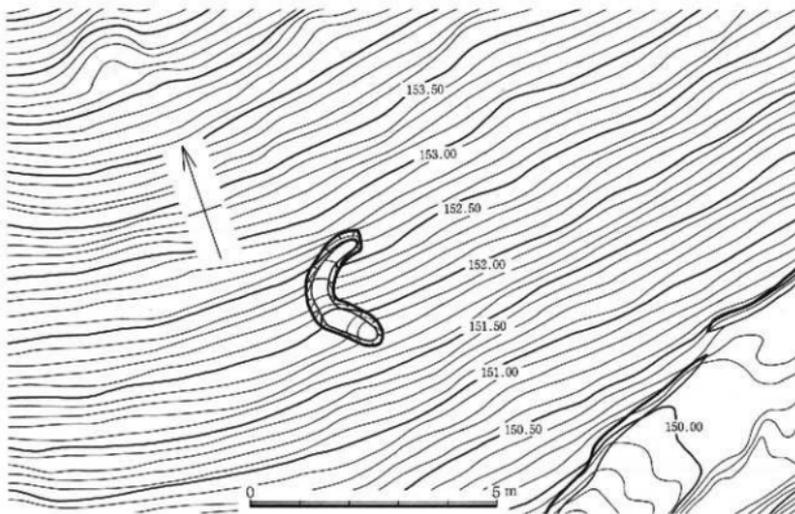
墳丘が流失しているため、正確な墳丘の規模や墳形については、明確にしがたい。

### 〔埋葬施設〕

L号墓にともなう埋葬施設は、墳丘とともに流失しており不明である。おそらく木棺直葬であろう。

### 〔出土遺物〕

L号墓検出に係わる遺物はなく、時期等について明確にしがたい。



第95図 L号墓平面図

### 13. M号墓

#### 〔位置〕

M号墓は、第2尾根の北から南へ下降する斜面にあり、J号墳の約南約7m下方、19号墳の東約7mに位置にある。

#### 〔墳丘〕

調査前は、緩やかな斜面のみみられるだけで、遺構の存在などまったく予想していなかった。調査の結果、溝の一部を検出した。

後世の堆積土や流出土を除去すると、地山面に掘り込まれた北辺の溝を検出した。等高線に平行に掘り込まれており、溝幅0.8~1.0m、深さ50cmを測る。

墳丘が流失しているため、正確な墳丘の規模や墳形については、明確にしがたい。

#### 〔埋葬施設〕

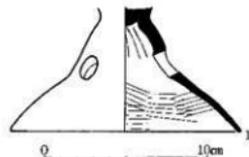
M号墳にともなう埋葬施設は、墳丘流失とともに一緒に流れたものであろう。おそらく木棺直葬になると考える。

#### 〔出土遺物〕(第96図)

M号墓検出に係る遺物は、周溝内から土師質の高坏片が出土している。

底径14.1cm、脚部は中実の脚柱部に「八の字」状の裾部がつき口端部は丸くおさまる。脚柱部と裾部との境に外上方より内下方へ3つの円孔を開ける。内面上方にしぼり痕を残し、下方は刷毛調整、外面は摩滅のため調整方法は不明、色調黄白色、胎土3mm位の小石を含む、焼成やや硬。

M号墓出土の土器は、その形態より弥生時代後期後半のものと思われる。



第96図 M号墓出土遺物

## 14. N号墓

〔位置〕

N号墓は、第2尾根の南へ下降する斜面の南端に立地し、P号墓の東約15m程のところに位置する。

〔墳丘〕(第97図)

調査前は、緩やかな斜面のみみられるだけではっきりした表徴はなく、遺構の存在などまったく予想していなかった。調査の結果、周溝を検出することができた。

後世の堆積土や流出土を除去すると、地山面に掘り込まれた周溝の北辺と西辺の一部、東辺の一部を検出した。北辺はほぼ等高線に平行して形成されており、長さは5.2m、溝幅は70cm、深さ40cm程を削る。

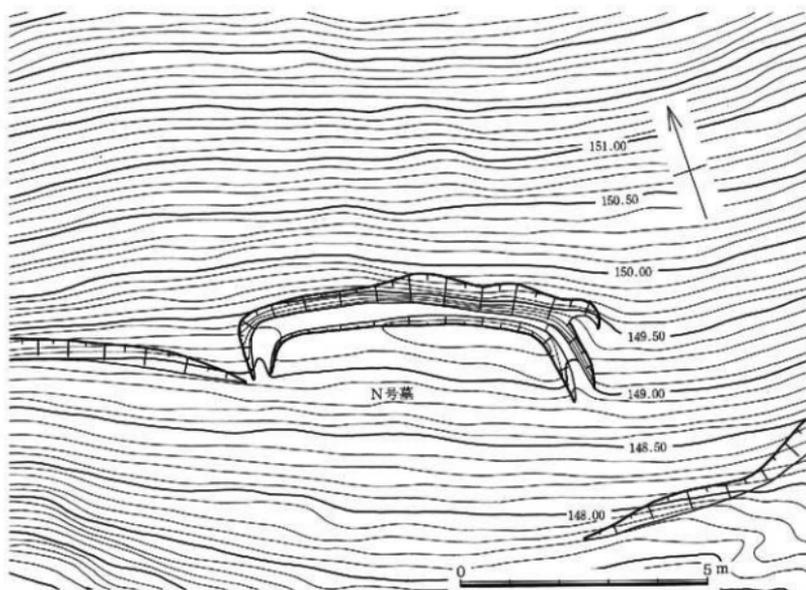
墳丘が流失しているため、正確な墳丘の規模や墳形については明確にしがたい。

〔埋葬施設〕

N号墓にともなう埋葬施設は、墳丘とともに流失しており不明である。おそらく木棺直葬であろう。

〔出土遺物〕

N号墓検出に係る遺物はなく、時期等について明確にしがたい。



第97図 N号墓平面図

## 15. O号墓

### 〔位置〕

O号墓は、第2尾根の南へ下降する斜面に立地し、20号墓の南約7m下方に位置している。

### 〔墳丘〕(第98図)

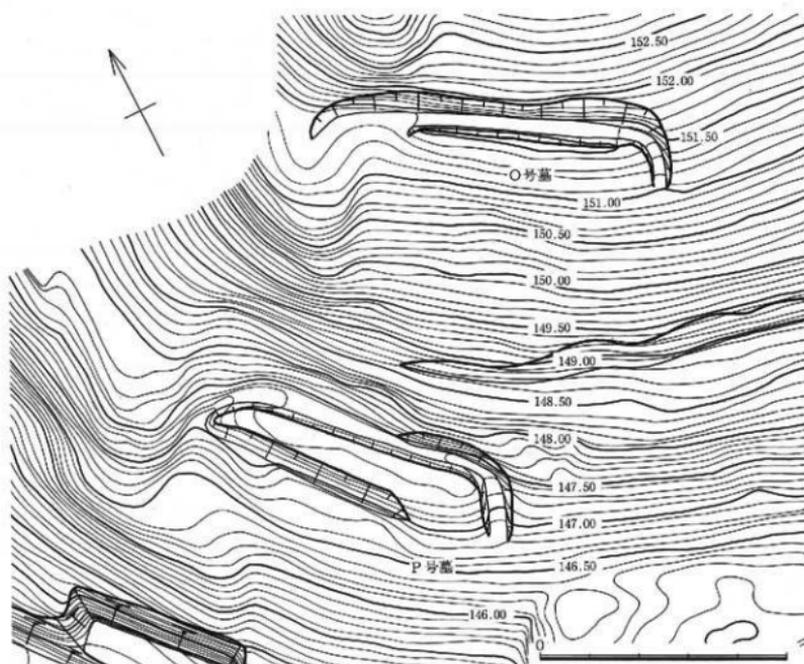
調査前については、斜面地でもあり、遺構の存在などまったく予想していなかった。調査の結果、溝の一部を検出した。

後世の堆積土や流出土を除去すると、地山面に掘り込まれた溝の北辺と東辺の一部を検出した。北辺はほぼ等高線に平行して形成されている。北溝の外縁はほぼ完存しており長さ6.5m程である。北溝の幅は70~90cm、深さ55cm前後が残存している。

墳丘が流失しているため、正確な墳丘の規模や墳形については明確にしがたい。復原すると、内辺5.5m程の方形になると考えられる。

### 〔埋葬施設〕

O号墓にともなう埋葬施設は検出されず、墳丘とともに流失したものと考えられる。



第98図 O号墓・P号墓平面図

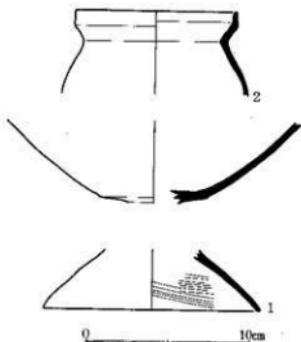
〔出土遺物〕（第99図）

○号墓に関する遺物は、周溝内に土師質の高坏と壺の破片が出土している。

高坏（1）、底径13.1cm、坏部と脚部裾で脚柱部が欠ける。坏部は短い底部に大きく内弯する口縁部がつく。裾部は「八の字」状に開き口端部は丸くおさまる。坏部内面及び裾部外面はナデ調整、裾部内面は刷毛調整、坏部外面は摩滅のため調整方法は不明、色調淡黄褐色、胎土1mm～2mmの微砂を含む、焼成硬。

壺（2）、口径9.7cm、口縁部はやや外反して立上り中程で上方に屈曲し口端部は丸くおさまる。内外面共に摩滅が激しく調整方法は不明、色調淡褐色、胎土1mm位の微砂を含む、焼成軟。

○号墓出土の土器は、その形態より弥生時代後期後半のものと思われる。



第99図 ○号墓出土遺物

## 16. P号墓

### 〔位置〕

P号墓は、第2尾根の南へ下降する斜面の南西部にあり、O号墓の南西約7m下方にある。

### 〔墳丘〕(第98図)

調査前は、斜面地でもありはつきりした表徴はなく、遺構の存在などまったく予想していなかった。調査の結果、溝の痕跡が見つかった。

後世の堆積土や流出土を除去すると、地山面に掘り込まれた周溝の一部を検出した。北辺の内辺の長さは5.5mを測り、北東の隅が残存している。溝幅は60cm、深さ50cm程を測る。北溝の西半分の北側の肩は流れて残っていない。

墳丘が流失しているため、正確な墳丘の規模や墳形については、明確にしがたい。

### 〔埋葬施設〕

P号墓の埋葬施設は検出されなかった。墳丘の流失とともになされたと思われる。おそらく、木棺直葬であろう。

### 〔出土遺物〕

周溝内で、土師器片が出土しているが、器形は不明で、時期も明確にしない。

## 17. Q号墓

### 〔位置〕

Q号墓は、第2尾根の南へ下降する斜面の南西端に立地し、最も低い位置にあたる。P号墓の約7m程下方に存在する。

### 〔墳丘〕(第100図)

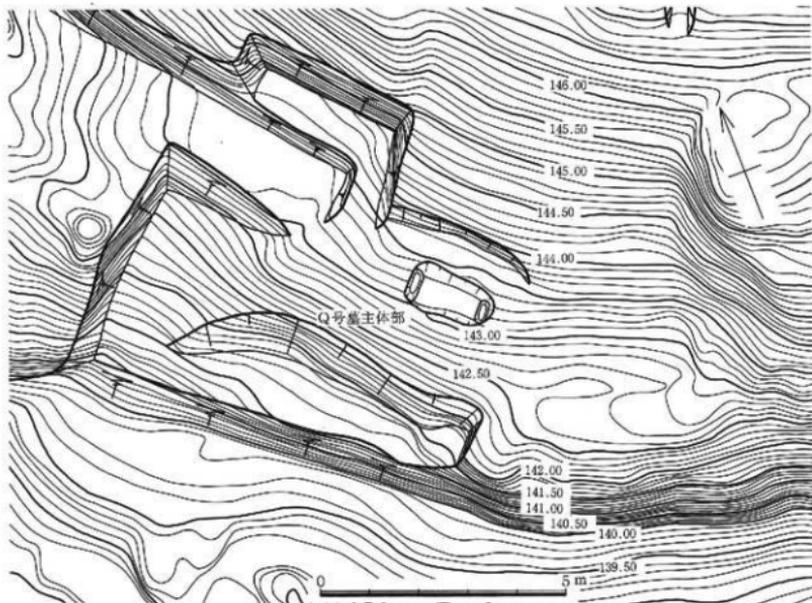
調査前は、斜面の裾にあたり表層もはっきりとしていず、遺構の存在は予想していなかった。調査によって、溝と埋葬施設を検出できた。

周溝は、その長辺になる北辺を等高線に平行に配置されており、地山をカットして北側の肩部を作っている。高さは30cm程残っている。盛土はまったく削平されており、墳形及び盛土の状況は不明である。

### 〔埋葬施設〕(第101図)

溝の肩から約1m程南西に離れたところで、墓壇を検出した。墓壇は主軸をN44°Wに配しており、大きさは、長径1.3m、短径約90cmの楕円形を呈する。墓壇内には、主軸と同じにする木棺が安置されている。両小口の掘込が認められ、両側板・両小口の端を合わせる箱式木棺墓になると考える。内法は、長さ1.25m、幅45cmを測る。深さは地形の高い北東側で15cm、反対の南西側で10cm程残っていた。

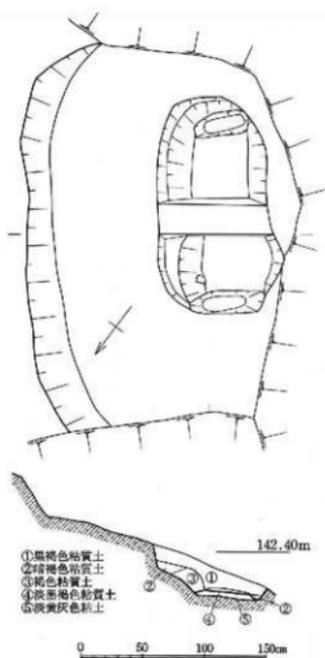
墓壇・木棺とも地山面に掘込まれて形成されている。



第100図 Q号墓平面図

〔出土遺物〕

Q号墓に関する遺物は出土していないため、時期は不明である。



第101図 Q号墓主体部

## 第5章 集石遺構

集石遺構は、第1尾根から分岐して南にのびる第2尾根の、鞍部よりやや下の東側斜面に位置し、標高156.00 mラインに並ぶ。

集石遺構の構造は、斜面を切り取り平坦面を作るが、この法面の高さは最高で約1.5mである。平面は、最大幅約3.5m・長さ約8mであるが、南側の平坦部が20cmほど高くなりふたつの区画に分かれる。南側の区画は、幅1.5m・長さ3.1mで狭く、集石は1ヶ所である。この集石は、最大のもので人頭大の河原石を用いたもので、1.2m×1mの楕円形を成しており、一部の石は火を受けた痕跡を示していた。

一段低い北側の区画は、最大幅約3.5m・長さ5.2mの平坦面に作られており、5ヶ所の集石が作られていたが、東端部の集石は斜面にかかって半円を成す事から、若干動いていると考えられる。この集石部も、一部は火を受けており、焼土・炭等が混っていた。

遺構の特徴を以下にまとめてみる。

- ①地山の成形は、斜面を切り取り平坦部を作っている。
- ②集石は、平坦部全面に広がるのではなく、円形・楕円形に作られている。
- ③火は全面受けているのではなく、全体からみれば極一部であり、焼土・炭等も火を受けた石の周りにしかみられなかった。
- ④遺物は、極少量しか出土せず、土師器・須恵器片、用途不明の鉄製品のみであった。

〔出土遺物〕(第102図)

極少量出土した土師器・須恵器片は、大部分が集石遺構を覆う埋土の中から出土し、土師器の小型甕のみが、最も南側の集石に乗った形で出土した。鉄製品も埋土中より出土している。

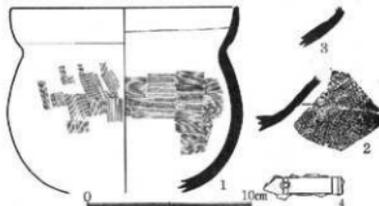
小型甕(1)の口径13.8cm、口縁部は内弯ぎみに立ち上り口端部は丸くおさまる。胴部は扁平な球体で最大径は胴部中程に位置する。口縁部は横ナデ調整、胴部内外面は刷毛調整、色調淡黄褐色、胎土1mm位の微砂を含む、焼成硬。

器形不明(2、3)の2点、(2)は外面中程を上方に沈線が入り、その間に刺突列点文が残る。外面中程より下方は鉋削り、他は横ナデ調整、(3)は外面上方に1条の沈線が入る。内外面に横ナデ調整、色調は共に青灰色系統、胎土精良、焼成硬。

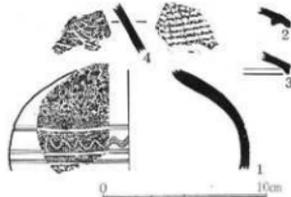
集石遺構出土の土師器の甕は、その形態及び調整方法より奈良時代のものと思われる。

用途不明鉄製品(4) 長方形で、一方が三角状にとがる形をしており、一孔が穿たれている。長さは4.8cm、幅1cm、厚さ4mmである。孔の直径は5mmで、一方向より穿たれている。

他に表探では跡(1)、坏蓋(2、3)、甕腹(4)などがある。

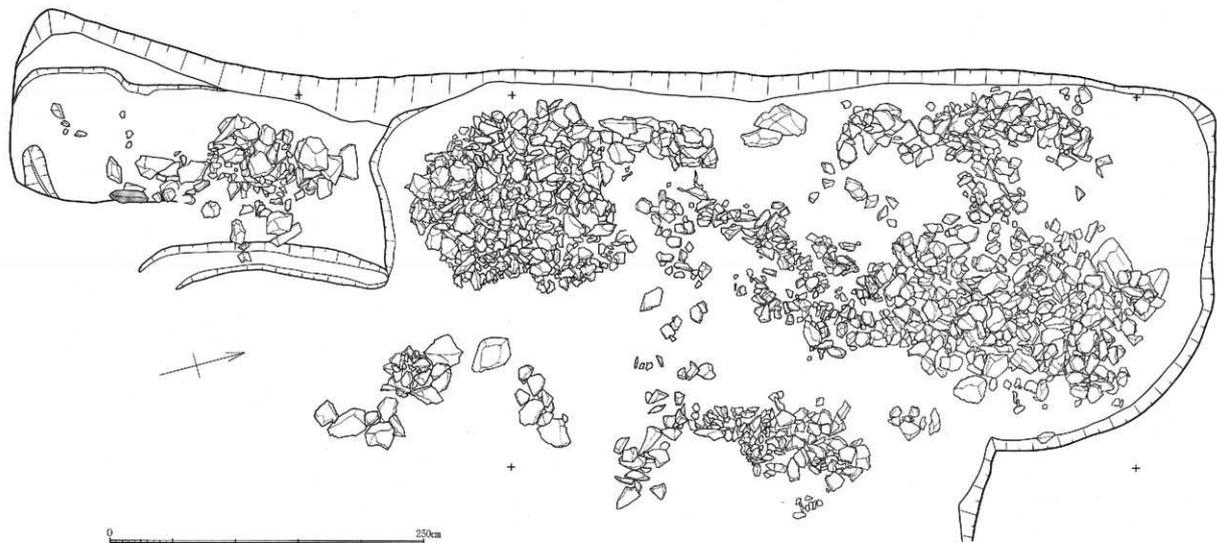


第102図 集石遺構出土遺物

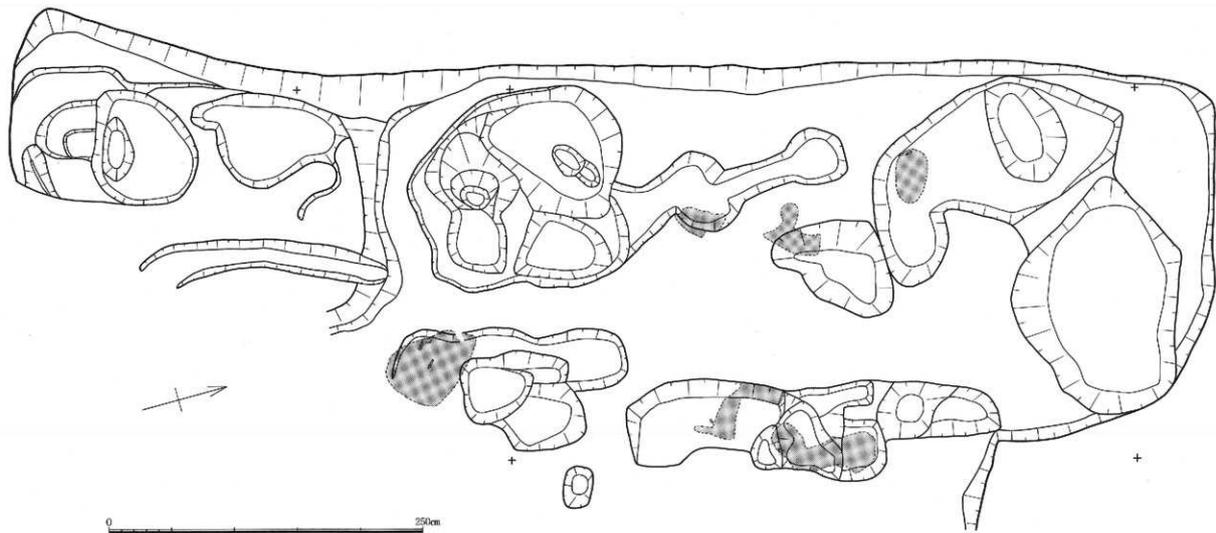


第103図 表探遺物

(1)は、胴部最大径や上方に4本を1単位とする裾描波状文が入り、その上下に1本と2本の沈線を巡らす。内外面共に横ナデ調整、他の表採土器と同様色調青灰色系統、胎土精良、焼成硬。



第104図 集石遺構（上層）平面図



第105図 集石遺構(下層)平面図 (アミは、焼土、炭のあと)

## 第6章 小 結

### 1. はじめに

昭和53年度の調査では、前年発掘された4号墳に続く中期後半から後期初頭（5世紀後半～末）の小古墳群の発掘調査を行った。その結果、当初確認されていた古墳以外にも、墳丘の流出した低平なものも検出した。そのため、古墳群を構成する古墳の数は、当初考えていた以上の数となった。また、墳丘の流出した古墳の調査に伴って、古墳群と重複して弥生時代後期から古墳時代前期を中心とする方形の区画をもつ墳墓群を新たに発見した。この墳墓群は、南尾根に顯著で、尾根西半の南斜面にも認められた。南尾根では封土の流出が著しく、古墳と墳墓の区別の難しいものもあるが、溝内出土の土器、主体部の棺構造の違い（墳墓群の棺は、両小口板を深く立てている）から判別を行った。

こうした調査結果よりみて、長山丘陵は弥生時代後期～古墳時代前期、古墳時代中期後半の二時期にわたる墓山であったことは明白である。

### 2. 黒田長山古墳群

調査した各々の古墳の特色は、外部施設に墓石を周らず盟主墳たる4号墳を除けば、墳丘規模も小さく、埴輪や葺石などの外部施設も無く、主体部として木棺を1棺直葬するだけである。副葬品は武器や武具であるが、やはり4号墳以外はきわめて貧弱である。土器は、棺内や掘方内にはほとんど副葬せず、墳丘上か棺の直上に供献したもので、後期古墳に副葬される須臾器の代表たる環は1点出土しているにすぎない。出土した土器より古墳の構築年代をみると、古墳時代中期後半の5世紀後半から末頃にかけての、きわめて短い期間に次々と尾根上に築造され、古墳群を形成している。このように、横穴式石室を内部主体とする小古墳の群集する古墳時代後半の6世紀中葉以前に、木棺直葬による小墳丘の古墳が群集化する例は、播磨などでも5世紀末から6世紀前半にみられるが、本古墳群はそれよりも早くから造墓されている。

さて、黒田長山古墳群における鉄器の副葬について、その概要をまとめると次のようになる。

#### ○1号墳

鉄刀2振り 刀子2本 鉄鎌一括（3群）

鋤先1点（但し、墳丘内より出土）

#### ○2号墳

〔北棺〕鉄劍3振り 鉄刀1振り 短劍1振り 短甲1領 鉄斧1本 鉄鎌一括 鉄鉢（棺外）

〔南棺〕鉄刀2振り 短甲1領 鉄鎌一括 鉄刀残欠1振り

#### ○5号墳

鉄斧1本

#### ○7号墳

鉄刀1振り

#### ○8号墳

鉄刀1振り

○9号墳

鉄刀1振り

○10号墳

鉄刀1振り 刀子1本

○13号墳

刀子1本 鉄錐1本 鉄鏝一括

○14号墳

鉄剣1本 鉄鏝一括

このように各古墳の副葬品をみると、やはり墳丘規模の卓越した4号墳の内、北棺の被葬者が一番多く、まとものある武器、武具を副葬している。続いて4号墳南棺、1号墳へと副葬品が減少してゆくが、4号墳と1号墳の副葬品の格差は短甲の有無に象徴されよう。また1号墳にくらべても他の古墳の副葬品は格段に少なくなり、墳丘規模と副葬品による群中の序列は明白である。こうした武器中心の状況と、造墓期間の短いことなどから、黒田長山古墳群は4号墳の被葬者を盟主とした、軍事集団の構成員による墓域と考えるのである。湖北北半の余呉川水系における前期から中期の首長墓系列は、東浅井郡湖北町若宮古墳に始まり、西野山の尾根筋に築造された伊香郡高月町古保利古墳群で、中期から後期には高月町涌山古墳群・物部古墳群へと動くようである。黒田長山古墳群の形成は、こうした一貫して造墓され続けた古墳群とは異なり、見掛け上はまさに突然、新たな墓域を占地している。おそらくそうした背景には、軍事力の必要性の代償として、従来の古墳築造者の範囲を越えた層にまで造墓を認めた結果ではなかったろうか。盟主墳たる4号墳が墓石を営くなど中期古墳としての外縁を整えてはいるが、その周囲に築造された小古墳は、墳丘の構築すら思うにまかせられず、尾根上にあつた方形周溝墓の墳丘を再利用したものもすくない。こうしたことからみても、黒田長山古墳群はこれまでの中期古墳の被葬者の枠を越えたものであったかもしれない、やや遅れて同様な造墓の承認が播磨など畿内周辺地域にも及んだのであろう。

黒田長山古墳群を軍事的序列とみた場合、その頂上に立つ人物こそ、墓丘、副葬品からみて4号墳北棺の被葬者である。この北棺の鉄器の中で注意すべきは、鉄斧がただ1本出土していることである。鉄斧は一見、工具のように見えるが、『日本書紀』には天皇が地方に赴任する将軍に斧鉞を授けたという記事が見られる。鉄斧をすべて工具と解さず、接近戦での打撃用の武器と考えれば、軍事権の象徴であることは容易に理解できよう。このようにしてみると、古墳群の位置からみて、越前、あるいはそれを越えての日本海側諸地域に対して、畿内大和政権の軍事的尖兵の役割を果たしていたのであろう。おそらく、これまでの古墳群のあり方とは異なるこの古墳群は、そうした軍事活動の成果に対しての特権として獲得されたものではなかっただろう。

### 3. 黒田長山古墳群

黒田長山の西へのびる尾根上に、17基の方形周溝墓が古墳と重複するようにして確認された。方形周溝墓の残りは必ずしも良くはないが、地山を方形区画に整え、低い墳丘を有していたようである。そして、その分布をみると、墳墓群の最も高所に位置するA、B号墓を分岐点とする形で、西へC～H号墓、また、南へI～Q号墓が形成されている。これらは墳墓群の時期は、供献されている土器からみて、弥生時代後期後半（第V様式後半）から庄内式・布留式にかけてのもので、湖北の前期古墳の登場に先立つものである。これら墳墓群と同質の遺跡は、近江や畿内には無く、むしろ福井県鯖江市の王山・長泉寺山墳墓群や、福井市の原日山墳墓群など北陸地方

に類例を求めることができる。<sup>⑤</sup>

墳墓群の立地を見ると、A、B号墓が二筋の尾根の分岐する基点で、群中の最高所に築造され、南から西に展望の優れた適所にあるが、供献土器以外副葬品をもたない。それに対して主体部よりガラス小玉の検出されたC、E号墓は、西尾根の南斜面という他と異なる特異な立地を示している。ガラス小玉22個の出土したC号墓は、まだ尾根筋に近いものの、ガラス小玉406個を出土したE号墓は、完全に西尾根と南尾根に挟まれた斜面の中腹にあり、ひときわ異貌を誇っている。このD号墓のあり方は、北陸における墳墓群中の副葬品をもつものあり方とも異なったものである。おそらく、主体部を2基持ち、その内の1つにガラス小玉の首飾りを副葬したE号墓については、他の墳墓の被葬者とは異なる特別な地位にあり、それゆえ群を離れた特殊な占地を必要としたのではなかろうか。ただ、占地と副葬品以外、外面上は墳墓群との格差も無いことから、まだ墳墓群を形成した集団内に、卓越した支配権をもった首長の存在をうかがい知ることはできないのである。

#### 註

- ① 都出比呂志「横穴式石室と群集墳の発生」『古代の日本』第5巻 昭和45年
- ② 田中勝弘「湖北地方の前方後円墳」『北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書』Ⅷ 昭和57年
- ③ 末永雅雄『日本七代の武器』(昭和16年)
- ④ 斎藤優ほか『福井県鯖江市壬山・長泉寺山古墳群』(昭和41年)
- ⑤ 吉岡康暢「高志路の展開」『古代の日本』第6巻 昭和45年

圖 版



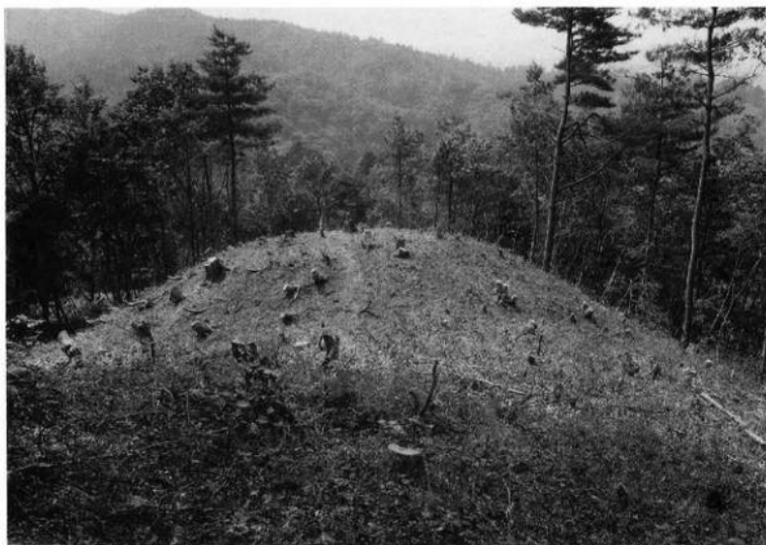
黒田長野より長山を望む（南より）



黒田長山古墳群を望む（北西より）



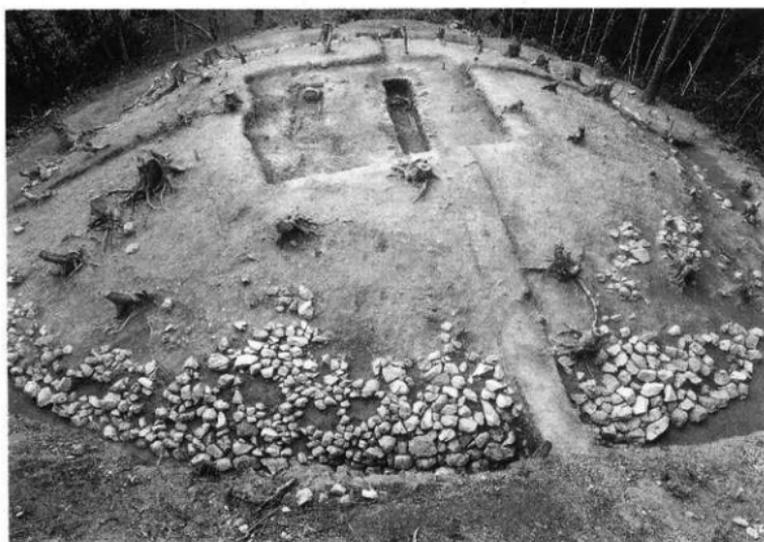
4号墳全景・発掘前（西より）



同・発掘前（東より）



4号墳葬石 (2区・3区)



同 葬石 (1区・4区)



4号墳葬石 (1区)



同 葬石 (2区)



4号墳葬石 (3区)



同 葬石 (4区)



4号墳主体部（北より）



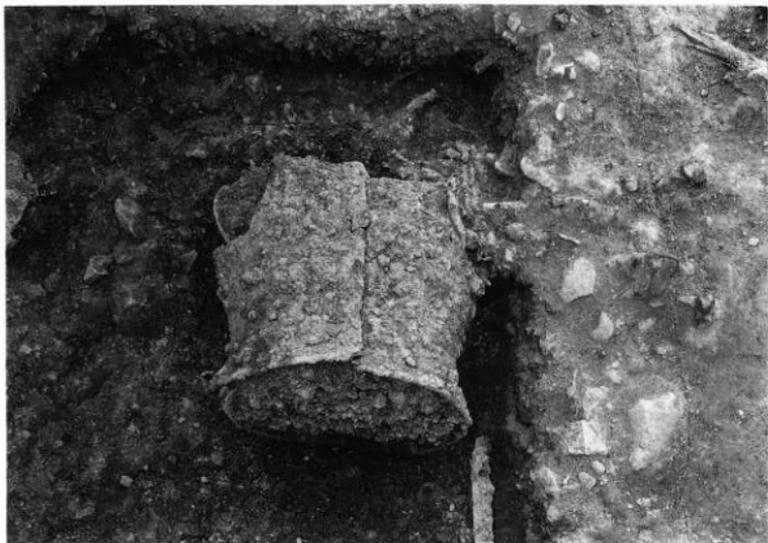
同（西より）



4号墳北棺全景（手前）（北より）



同 南棺全景（北より）



4号墳南棺出土短甲



同 南棺出土鉄刀



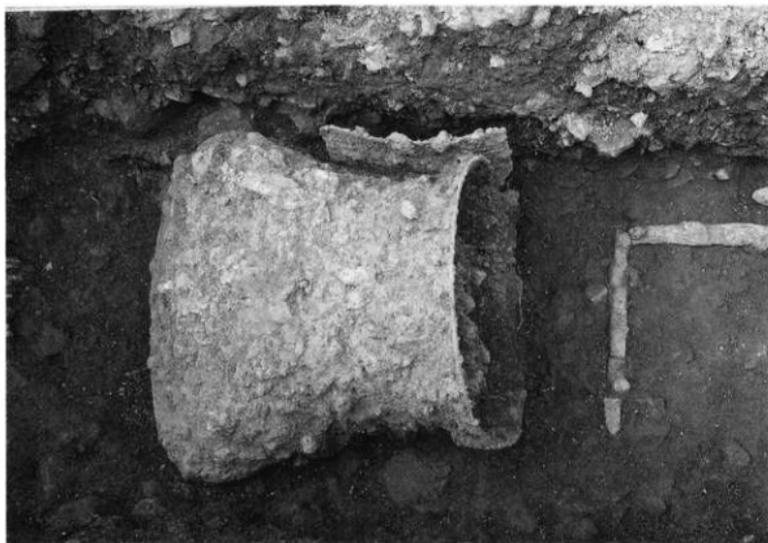
4号填南棺出土铁刀



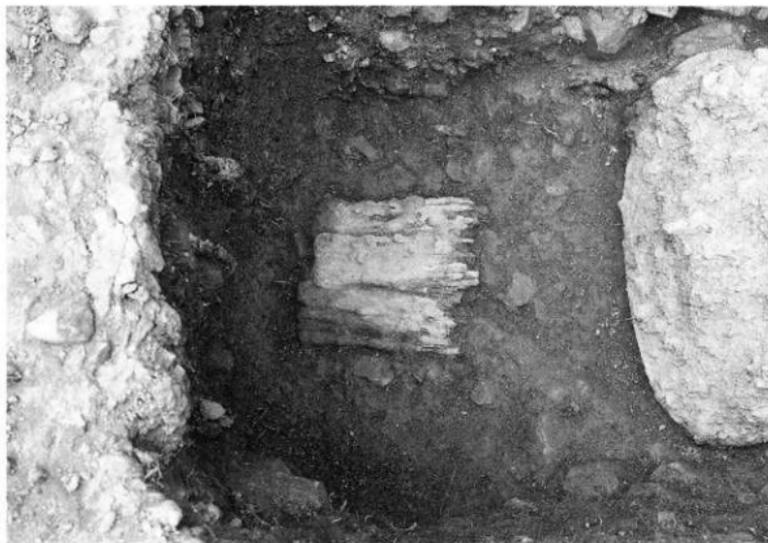
同 南棺上部出土土器



4号墳北棺出土鉄鏝・短甲



同 北棺出土短甲



4号墳北棺出土鉄鍔



同 北棺出土鉄剣・鉄刀



4号墳北棺出土鉄剣・鉄刀



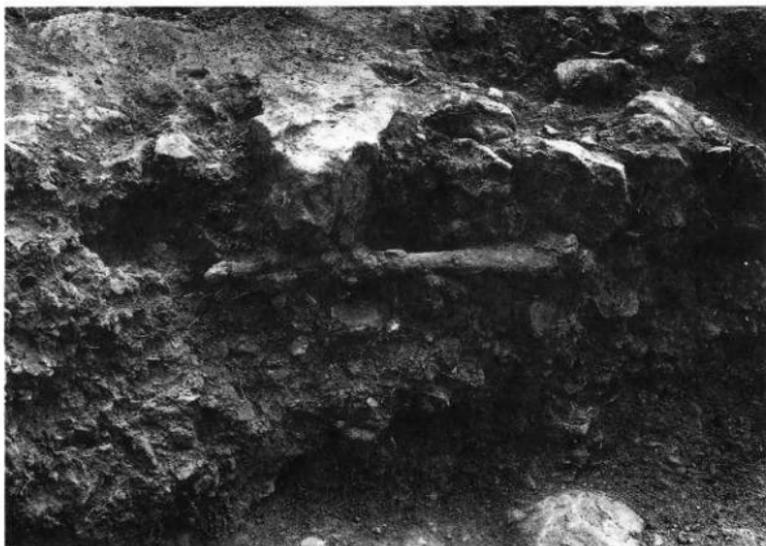
同 北棺出土鉄剣



4号墳北棺出土鉄短剣



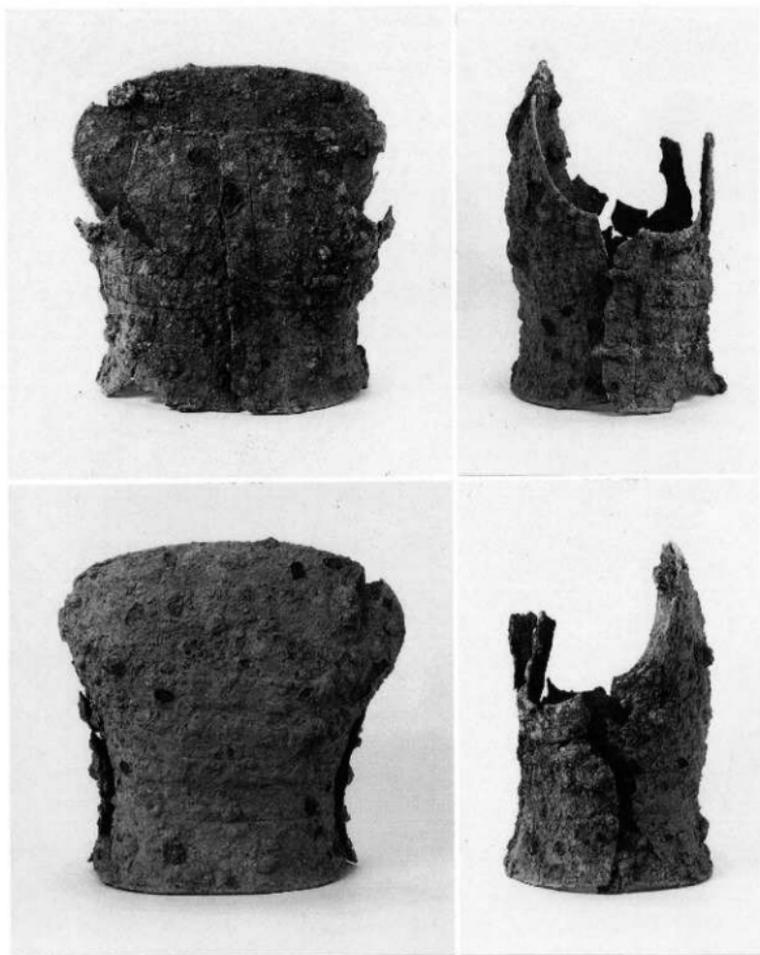
同 北棺出土鉄斧



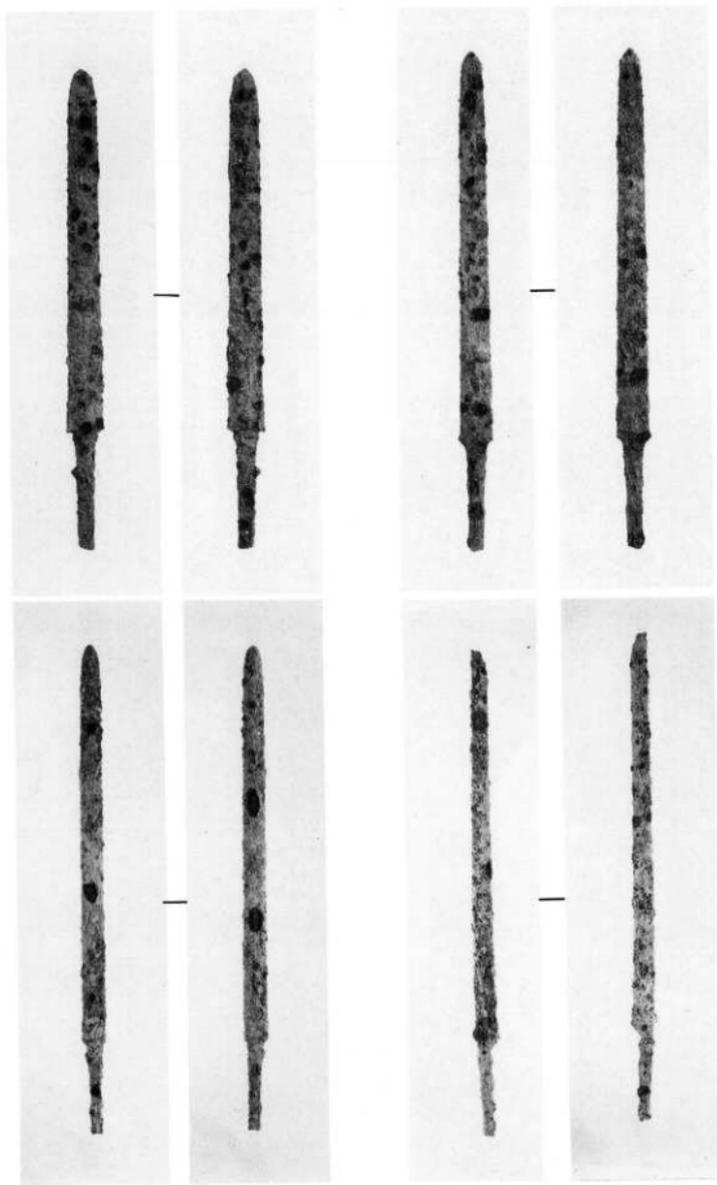
4号墳北棺出土鉄剣



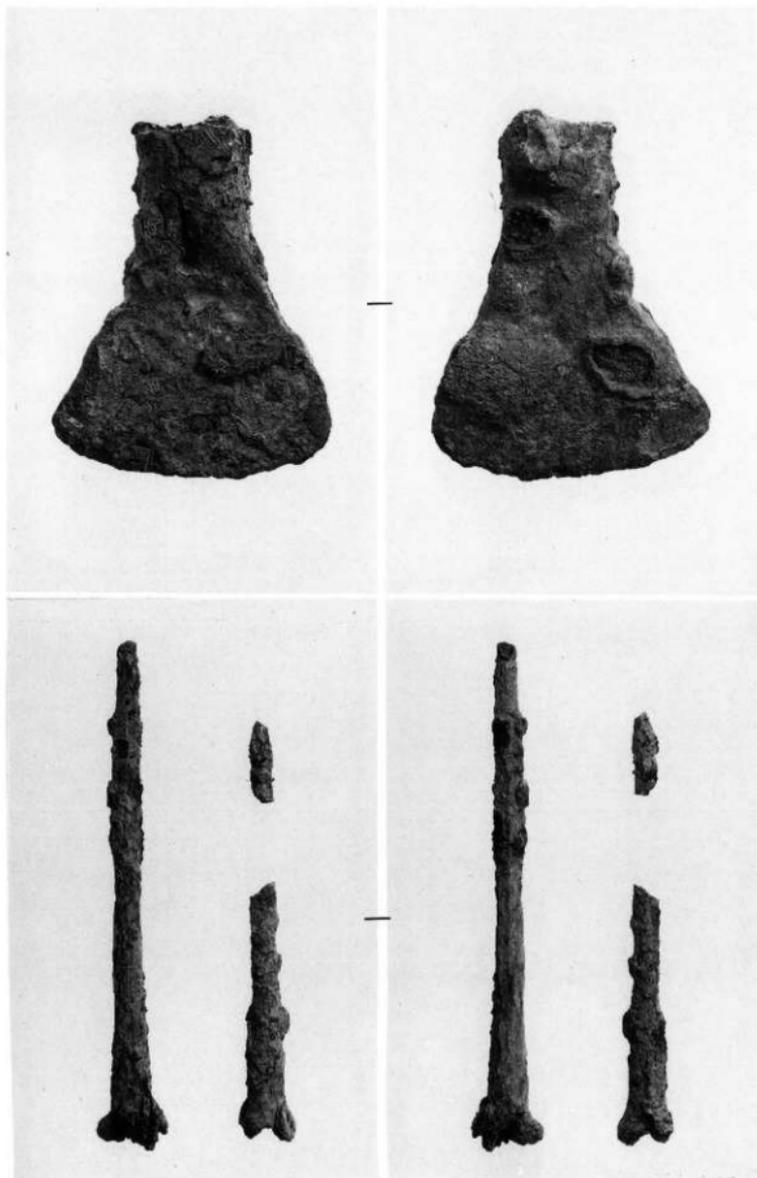
同 北棺上部出土土器



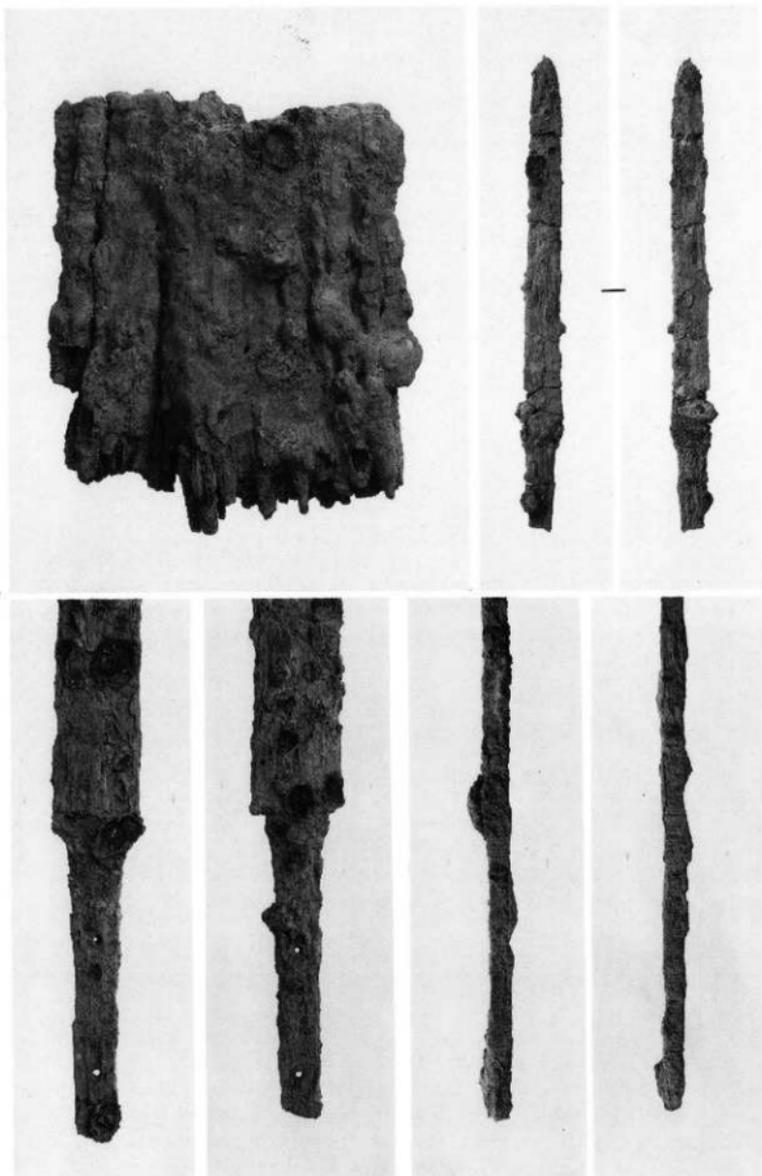
4号墳北棺出土短甲



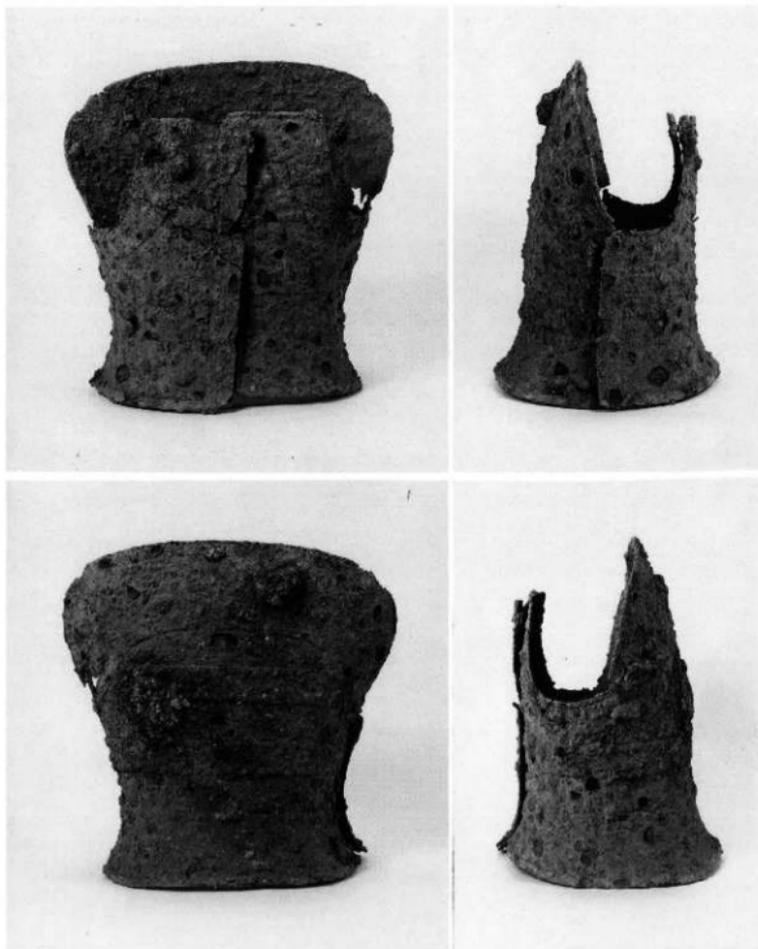
4号墳北棺出土鉄劍・鉄刀



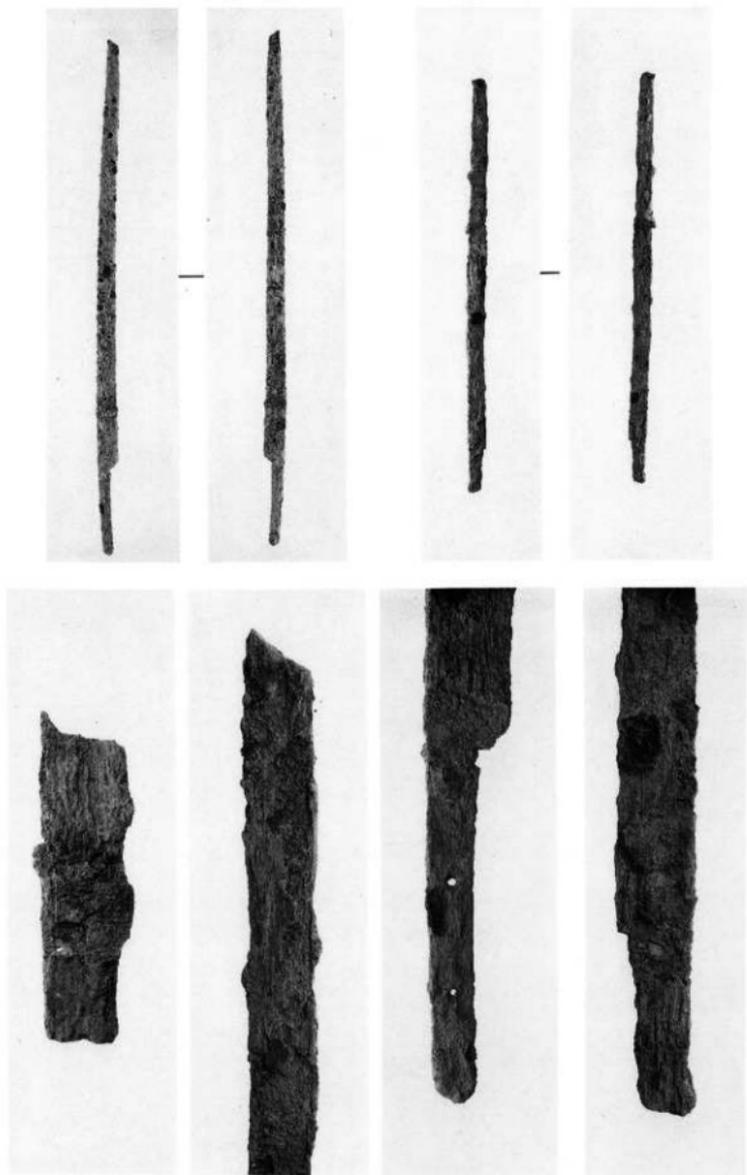
4号墳北棺出土鉄斧・鉄鉞



4号墳北棺出土鉄鏃鉄短剣及び鉄剣（下左）鉄刀（下右）近影



4号墳南棺出土短甲



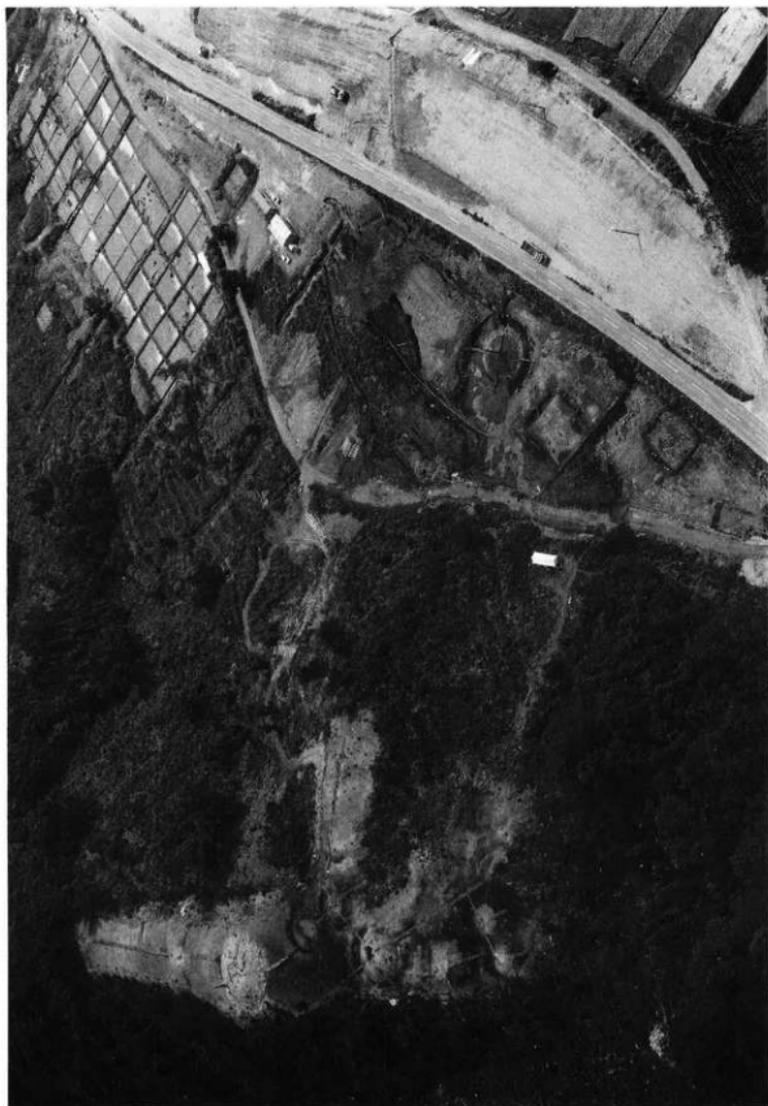
4号墳南棺出土鉄刀及びび近影



黒田長山古墳群全景垂直写真・狹狹前



1～3、8号墳付近垂直写真・発掘前



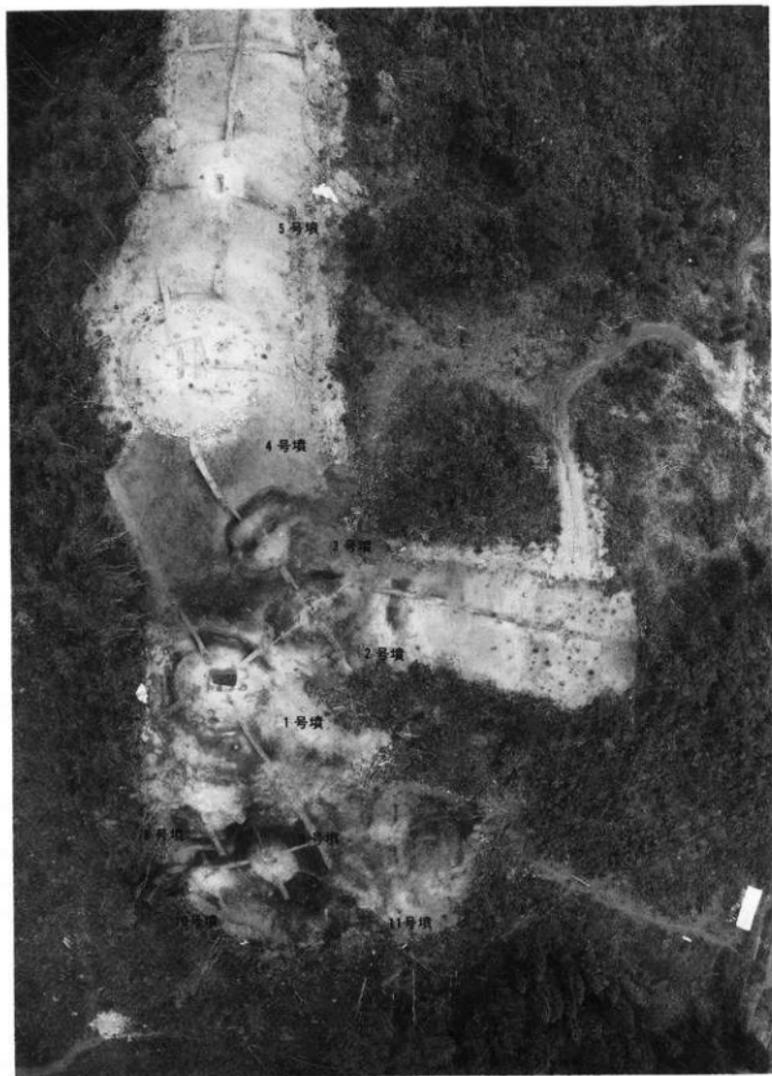
黒田長山古墳群と桜内遺跡



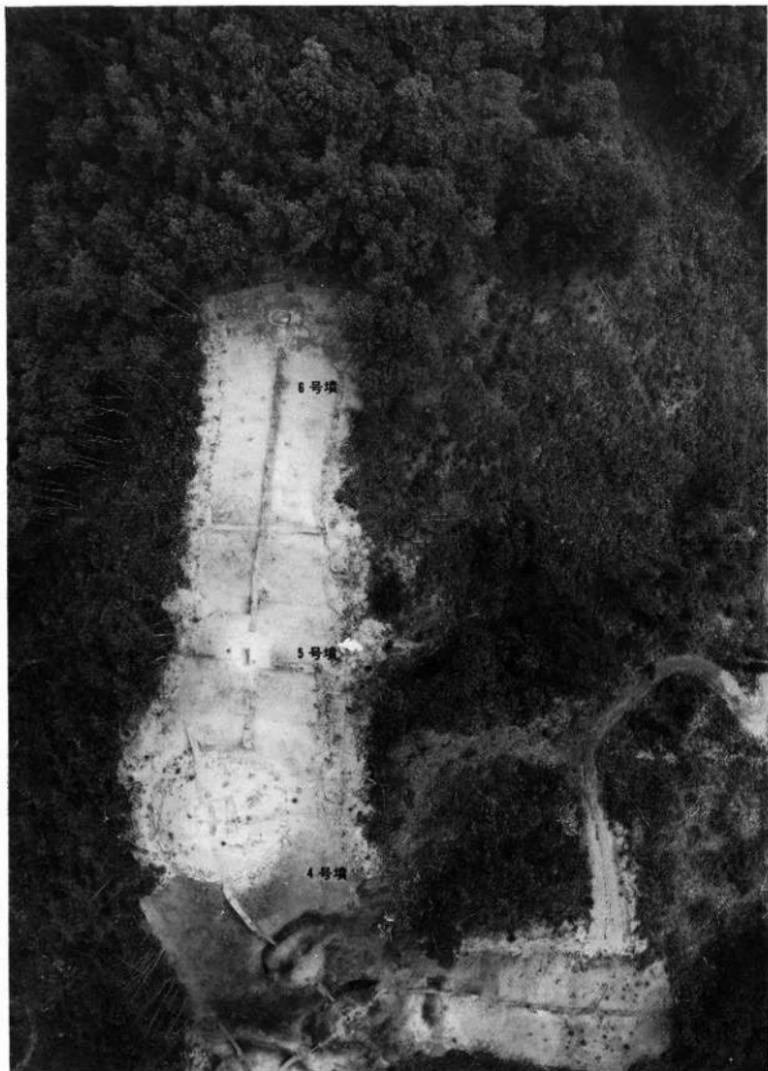
黒田長山古墳群全景（西より）



黒田長山古墳群全景（西より）



黑田長山古墳群尾根西半全景垂直写真



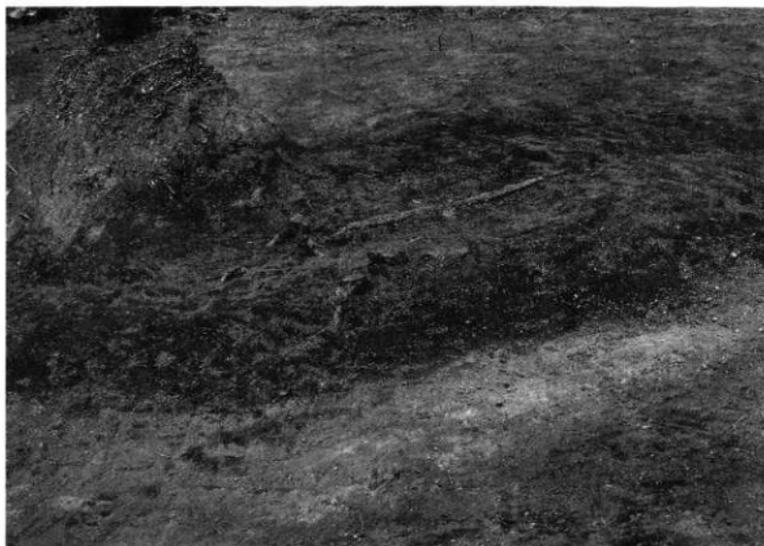
黒田長山古墳群尾根東半全景垂直写真



1号墳全景・発掘前（東南より）



同・発掘前（西より）



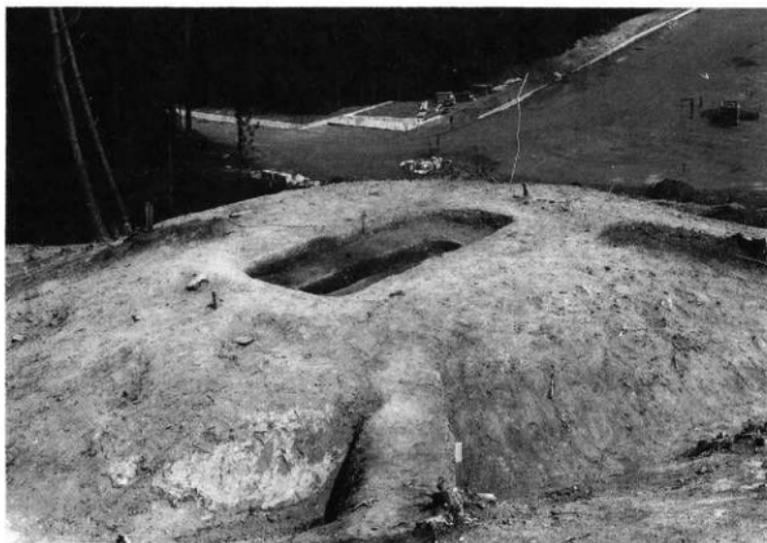
1号墳々丘掘出土鉄刀（東より）



同（北より）



1号墳全景（東より）



同（東南より）



1号墳主体部（北より）



同 棺上部出土土器



1号墳主体部（北より）



同（南より）



2、3号墳全景（東より）



5号墳全景（西より）



5号墳主体部検出状況（東より）



同 棺上部土器出土状況



5号墳主体部（南より）



同 鉄斧出土状況



9号墳全景（東より）



同 主体部鉄刀出土状況（東より）



10号墳全景（東より）



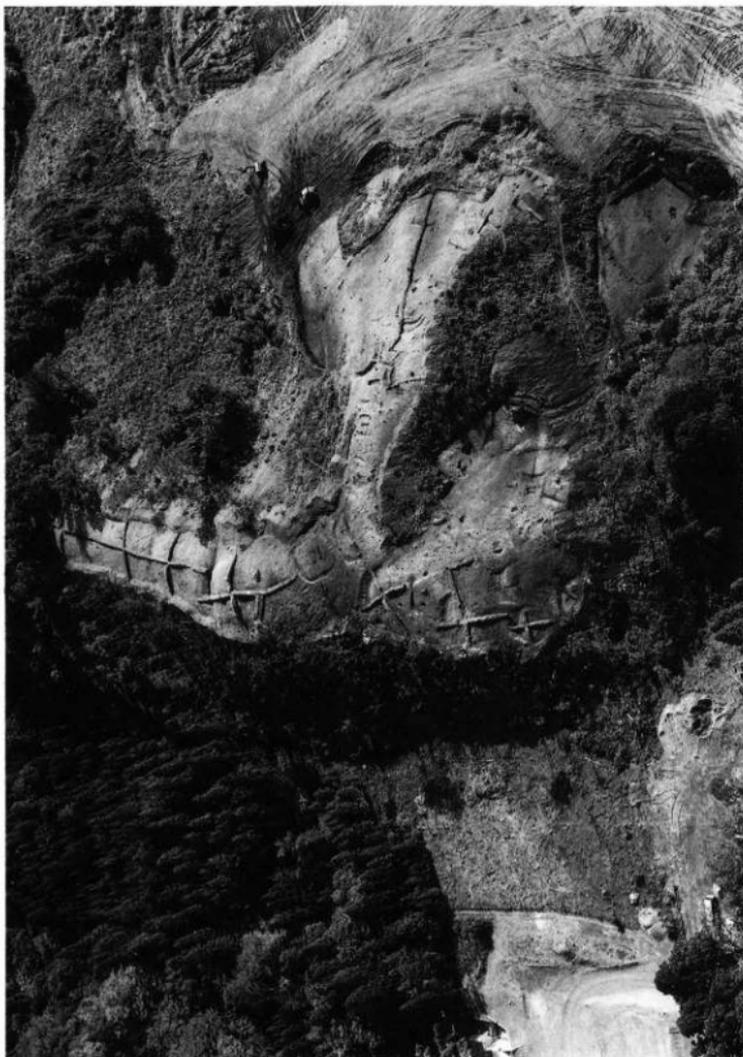
10、11号墳（北東より）



11号墳主体部（南より）



同（東より）



墳丘除去後の黒田長山古墳群・墳墓群全景（西より）



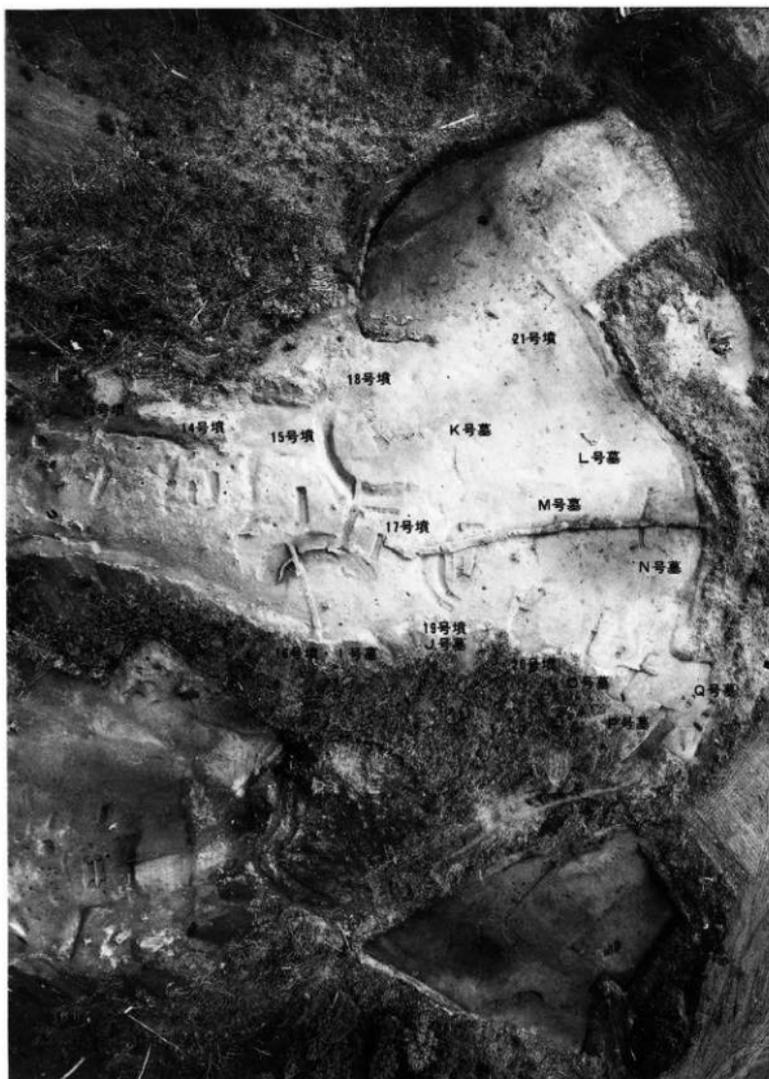
墳丘除去後の黒田長山古墳群・墳墓群全景（北より）



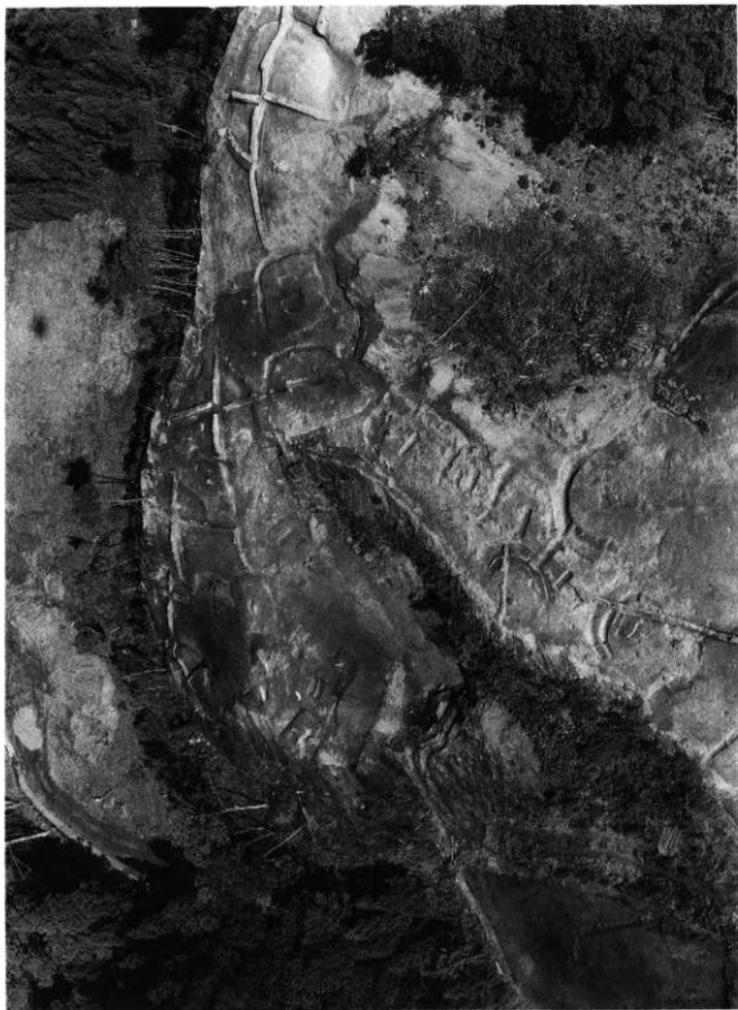
墳丘除去後の尾根東半全景垂直写真



墳丘除去後の尾根西半全景垂直写真



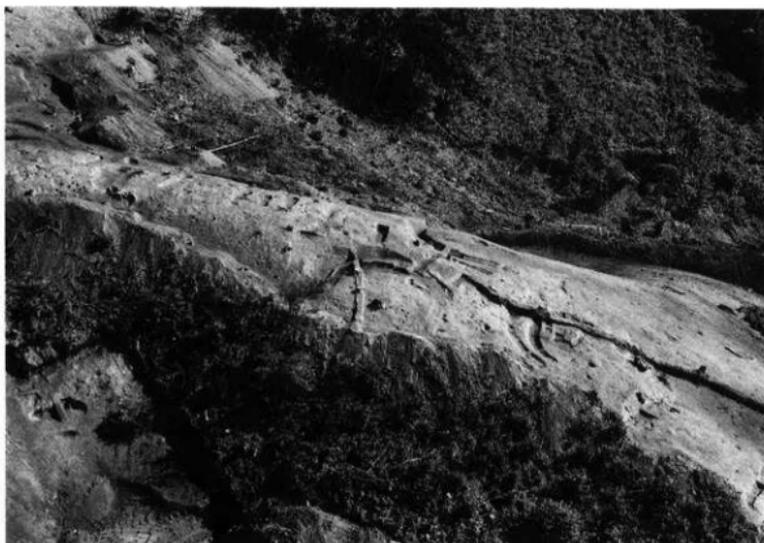
黑田長山古墳群・墳墓群南尾根全景垂直写真



黒田長山古墳群・墳墓群全景（南より）



墳丘除去後の尾根西平（西より）



黒田長山古墳群・墳墓群南尾根（西南より）



E号墓付近（西南より）



黒田長山古墳群・墳墓群南尾根（東より）



A号墓全景（東より）



3号墳主体部（奥）、A号墓主体部（手前）（東より）



C号墓全景 (東より)



同 主体部 (北より)



C号墓全景（西より）



Q、P、O号墓（手前より）全景（南より）



E、F号墓全景



E号墓主体部全景（東より）



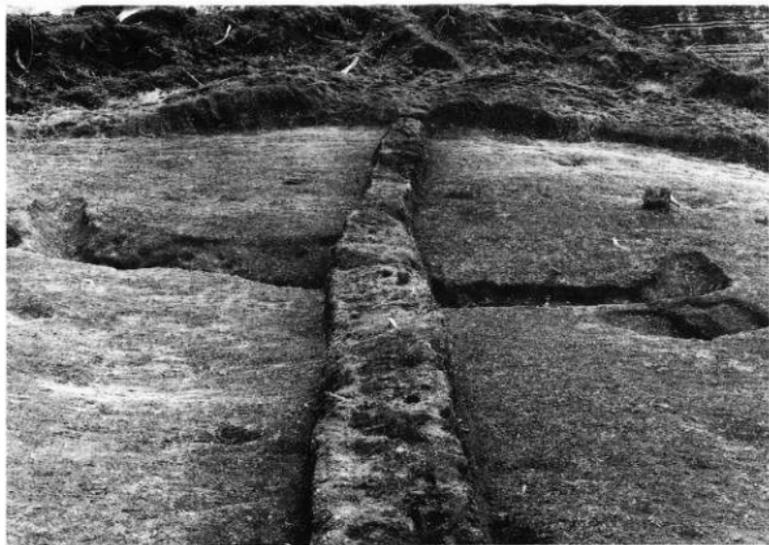
同（西より）



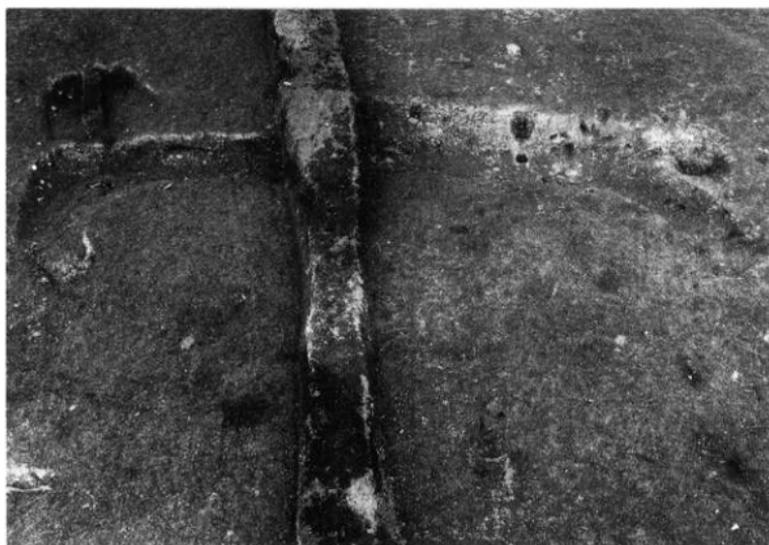
19号墳、J号墓全景（北東より）



20号墳全景（北東より）



N号墓全景（北より）



同（南より）



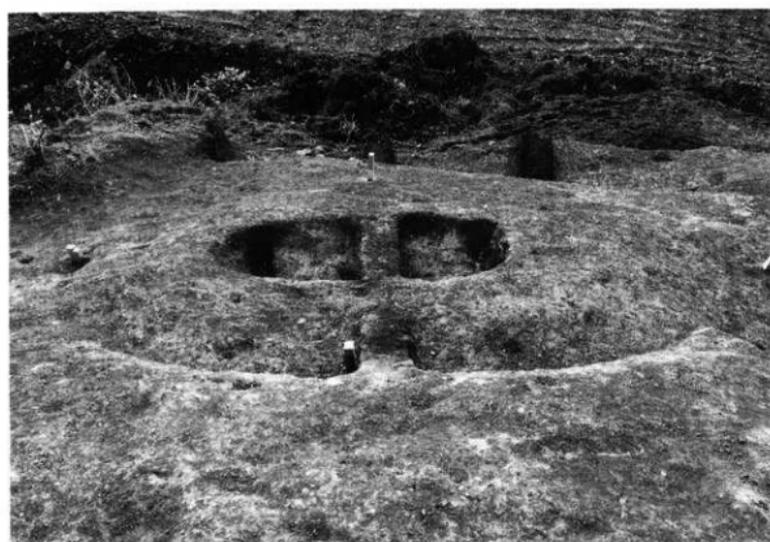
○号墓全景（北より）



21号墳主体部全景（東北より）



P号墓全景（東より）



Q号墓全景（北東より）



· 奠石遺構全景（東より）



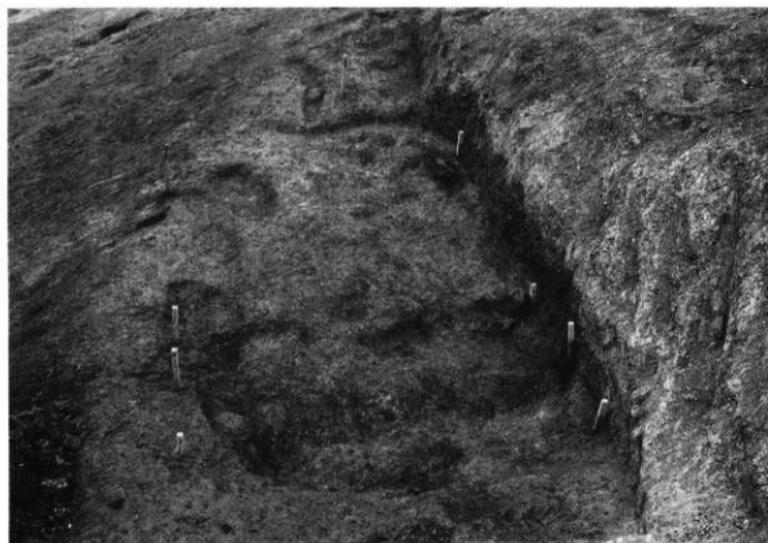
集石遺構 (北東より)



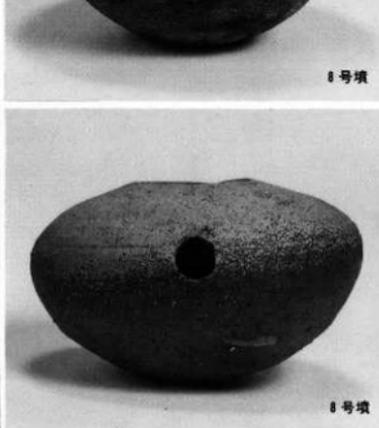
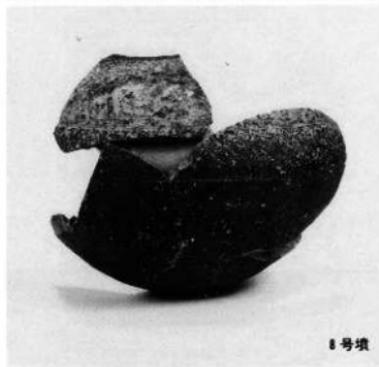
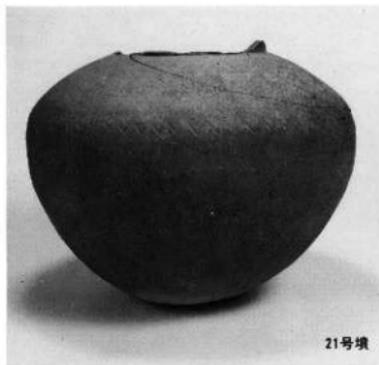
同 (北より)



集石遺構・石除去後（北東より）

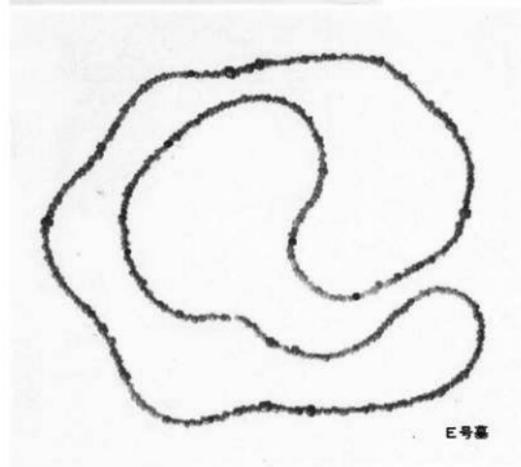
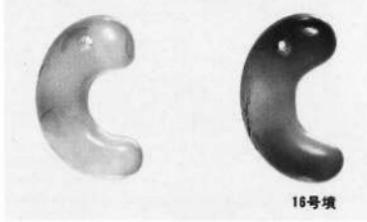


同（北より）











A号墓



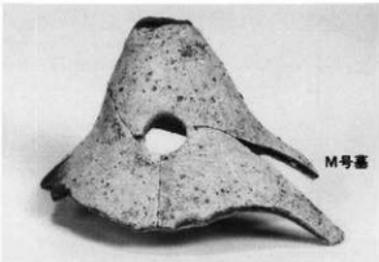
A号墓



5号墳



A号墓



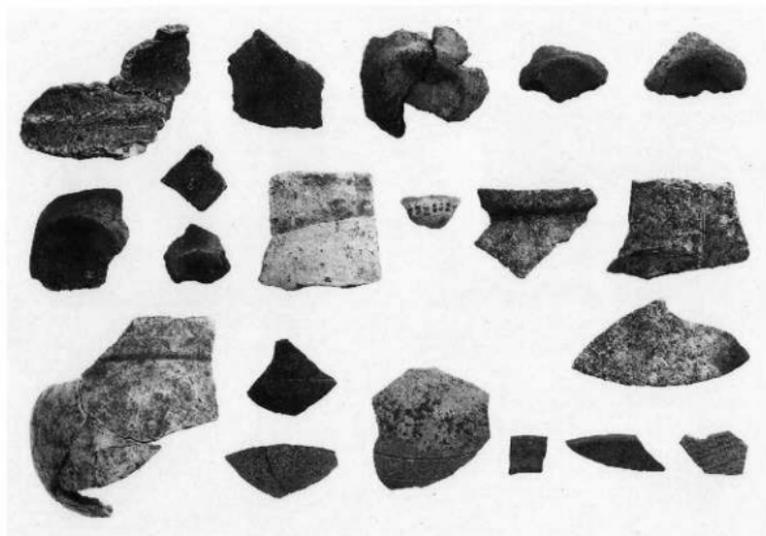
M号墓



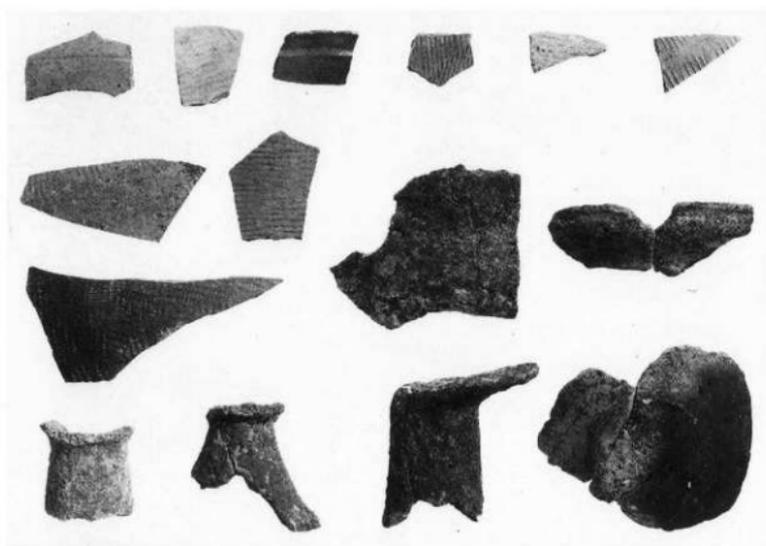
A号墓



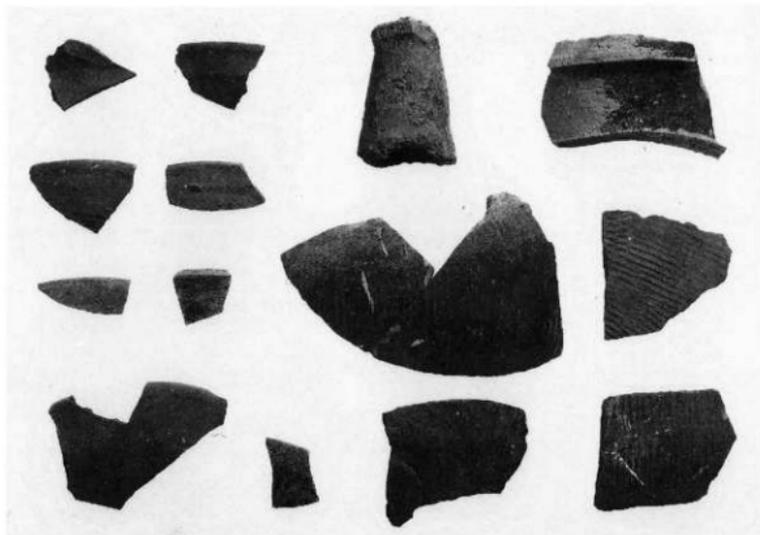
2号墳



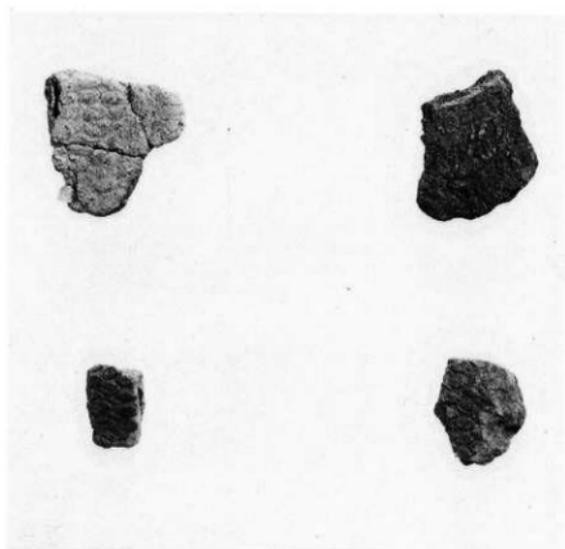
黒田長山古墳群、墳墓群出土土器



同上



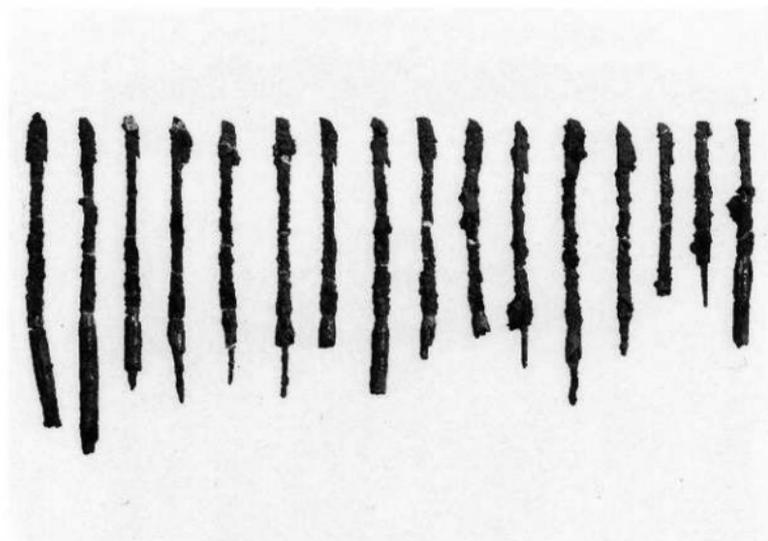
黒田長山古墳群、墳墓群出土土器



押形文土器



1号墳出土鉄鏃



同上



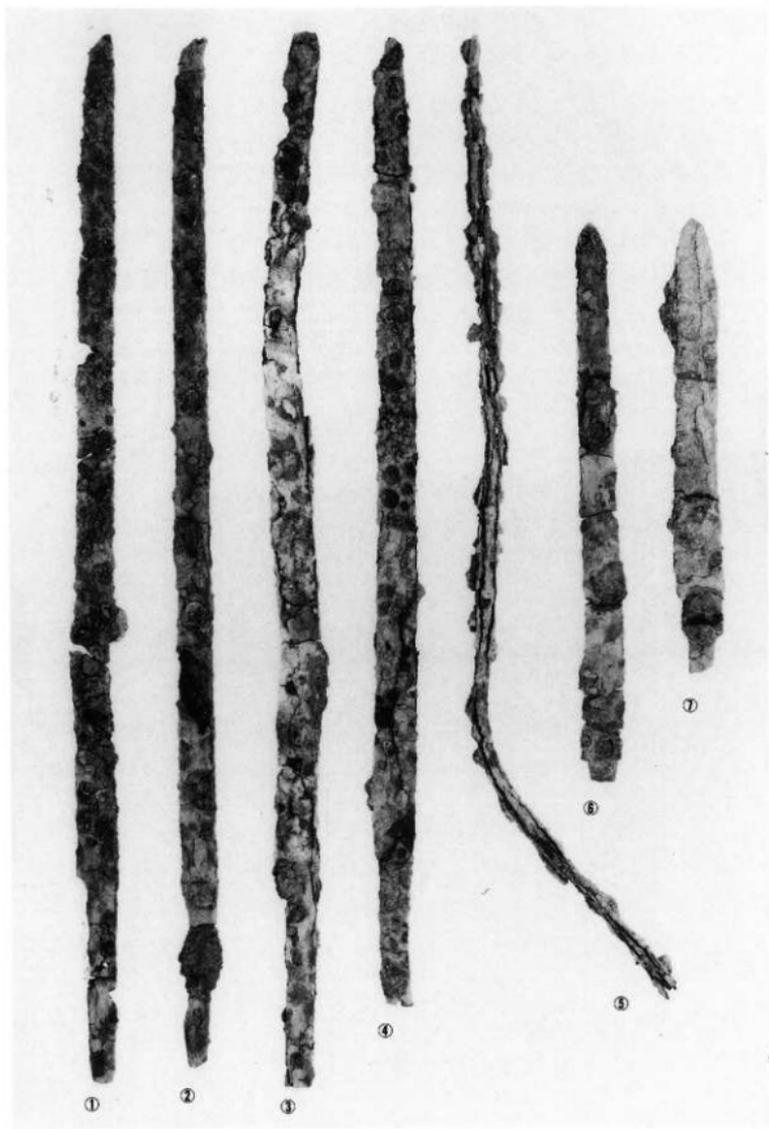
1号墳出土鉄鍔



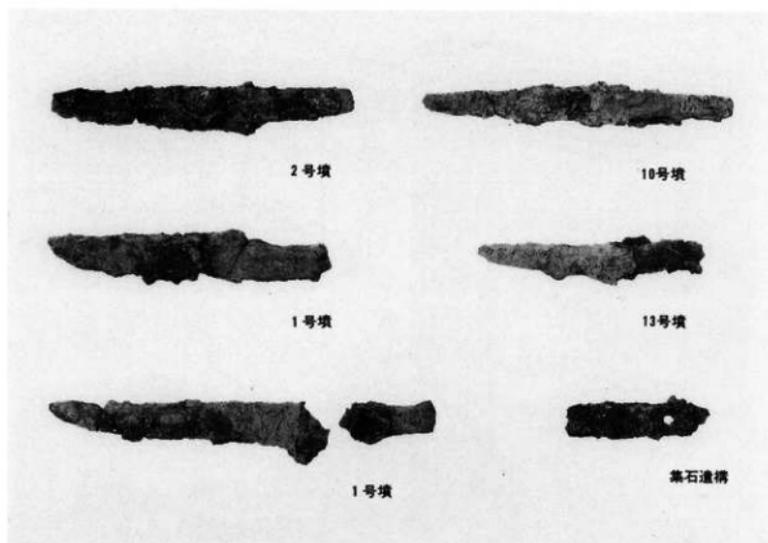
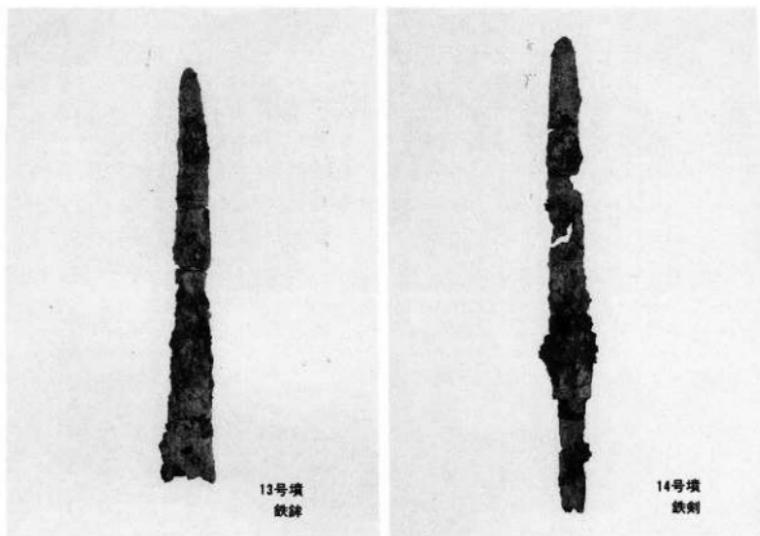
13号墳出土鉄鍔



14号墳出土鉄鍔



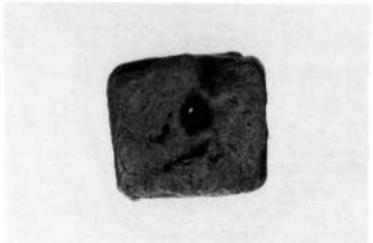
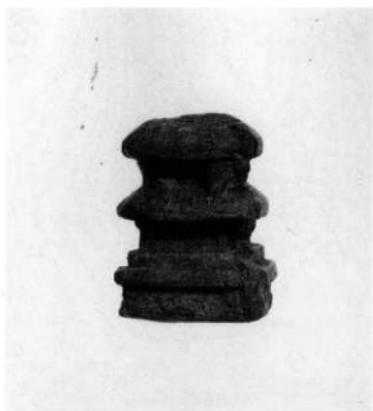
黒田長山古墳群出土鉄刀・鉄劍  
①②1号墳、③10号墳、④7号墳、⑤9号墳、⑥2号墳、⑦8号墳



黒田長山古墳群出土鉄針・鉄剣・刀子



黒田長山古墳群出土鉄斧・鋤先



小塔

昭和56年3月

北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書VI

—伊香郡余呉町所在黒川長山古墳群—

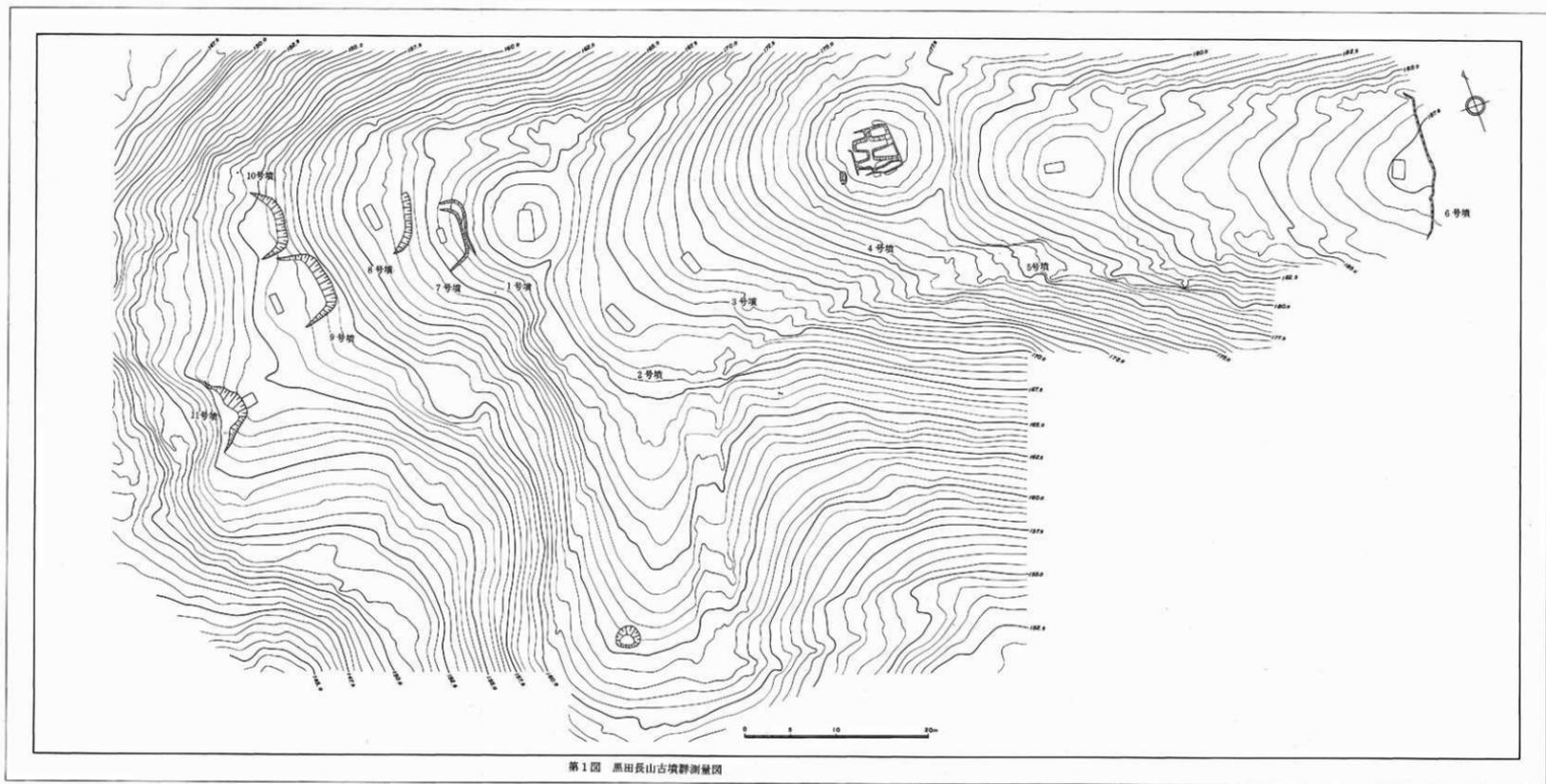
編集 滋賀県教育委員会  
発行 滋賀県教育委員会  
財団法人 滋賀県文化財保護協会  
印刷 株式会社 中村太吉舎  
大津市京町三丁目4-32

# 北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書VI

## 別添図面

第1図 黒田長山古墳群測量図

第2図 黒田長山古墳養・墳墓群測量図



第1图 黑田长山古坟群测量图



第2図 黒田長山古墳群・墳墓群測量図